

# 2次元ファンマガジン

cover illustration by ぼっしい

2016 **04** Volume.87  
1,080 yen (税込)

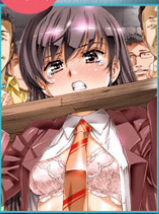
期待の同人ゲームが  
読者参加型小説として登場!!

## 魔剣士 ジネ2

乙女穢されし戦場

原作まくらカバーソフト  
【小説】酒井仁  
【挿絵】桐島サトシ

カラー  
ピンナップ  
color pinup



うるし原智志  
ぼっしい 緑木昆

最終回  
last episode

### 拘束魔少女メイ

【連載&読み切り小説】  
空蝉×伊藤隆生  
ぼいぼい×少名彦  
滝野鏡一×sasana  
百花乱太郎×鳴海  
kuronā×あまさひかえ  
島津六×ubanis  
天草白×宮代龍太郎  
斐芝嘉和×ぼっしい

【小説】高岡智空  
【挿絵】草上明

### 試し読み版

## 歌麿 かみ田

ばふえ  
海原圭哉  
天海雪乃

表紙&ピンナップテレホンカード  
応募者全員サービス

18 未満

# 拘束魔少女

今号の特集  
Special Felishment Series

痴態のすゝてを聴衆に晒され身動きすら許されぬ敗北陵辱!



# 女スパイ アリサ

～ 悦 虐 尋 問 ～

ギロチンで拘束された女スパイは  
為す術もなく淫らな責め苦に堕ちていく……

いしほよしかず  
小説 **斐芝嘉和**  
挿絵 **ぼっしい**

「や、やめろッ！ こんなことで、私が口を割るとでも思っているのかッ!？」

切れ長の瞳を怒らせて叫ぶ女スパイ・アリサを無視し、背に貼りついた男が剥き出しの乳房を無遠慮に揉み回す。柔らかな肉に硬い指先を喰い込ませたり、親指と人さし指の腹で紅い乳首をしごいたり。股間には仰向けになった男の顔が強く押しつけられていて、ライダーズスーツ越しに恥ずかしい割れ目

が甘噛みされている。

姿勢や仕草を見る限り、格闘術の心得など微塵もありそうにない男たち。普段のアリサであれば敵ではないが、催眠ガスを嗅がされて昏倒し、金属製の板枷で首と手首をまとめて拘束されたこの状態では、悔しげに歯ぎしりすることしかできない。脚さえ自由ならなんとかなるのだが、大きくハの字に開かれた恰好で、靴ごと床に金具で固定されている。

（く、そお……情報が漏れていただなんてっ！）  
テロリストとの繋がり疑われているナノマシン研究所へ潜入し、どのような取引が行われているのかを調べるといふ任務だった。当然、所内の警備状況は別の班によって下調べされ、安全なルート情報を得てからの単身潜入だったのだが――。

ルートとして指定されていたエアダクト内で、催眠ガスを嗅がされた。為す術もなく昏倒し、気がつけばこの状態。

拘束されているだけでも屈辱だが、見るからに下劣な男たちに囲まれ、ライダーズスーツの前をはだけさせられて形よい乳房を露わにされ、いいように揉み回されているのがなんとも悔しい。気を失っている間になにをされたのか、頬や髪や乳肌にはべつとりと、冷えた白濁液が粘ついている。

（内通者がバレて偽情報を掴まれたか……それとも、身内に裏切り者がいるのか……）

鋭い視線を周囲に走らせ、状況を観察しながら考

えてみるが、いずれにしろ、いまこの状況とは関係ない。とにかく、この下劣な男たちをなんとかしなければ――と。

「へへへ……喋りたくねえってんなら好都合だ」  
アリサの耳元に唇を寄せて、背に貼りついた男がねつとりと囁いた。

「俺たちは下つ端だからな。お前がうたつたら用済みになっちゃう」

「お前がなにも喋らなければ、ずっとこうして遊んでられるってわけだ。せいぜい頑張ってくれ」

立居振る舞いから想像できたが、この男たちはやはり、プロの尋問官ではないらしい。

（これは拙い……かも……）  
単独潜入を主任務とするスパイとして、対自白剤

耐性や尋問に対する対処法などはしつかり身につけているが、相手が素人では役に立たない。もちろん、相手が素人なら情報を漏らす恐れはないが、逆に言えば延々と罵られることが決定したわけ――。

などと考えているうちに、揉まれ続けている胸が芯まで熱くなってきた。男の手がいやらしく動くたび、ムキユ、ムキユ、と擦れ合ってしまう乳谷に、

甘酸っぱい香汗が滲み始める。

「へへへ……いやらしい匂いがしてきたな。オッパイ揉まれて感じちまったか？」

「な、なにを、バカな……ッ!」

咄嗟に否定した声が思つた以上に大きく、そして微かに甘い響きを帯びて妙な具合に裏返った。精神

な頬に、警戒の色が浮かぶ。

（なに、これ……私の身体、なにかおかしい……）  
全身が熱い。

呼吸が乱れて腰がくねる。

認めたくはないのだが、揉まれた乳房や甘噛みされている秘裂に肉の悦びが満ち始めている。敵に捕らえられているという切羽詰まった状況、いやらし

い視線にいいように罵られまくる剥き出しの乳房や乳首、周りにいるのは獣じみた野郎たち――緊張こそすれ、淫らな気分になる条件などひとつもないのに、どうしてこうも感じてしまうのか。

「ふ……く、ンうっ!？」

乳房に被せられた男の手指が動くたび、揉み歪められた双球の内側に淫らな熱が湧き上がる。擦れ合う乳谷は甘やかに痺れ、熱い視線を集める乳首がいつそう赤らみ、ブクツと膨れて、もどかしい焦れつたさを蓄積し始める。

胸ですらそんな具合だから、秘裂はなおさらだ。布越しに感じる男の歯や顎に、繊細な粘膜炎が

蹂躪されている。直にされたらきつと痛いだけだろうが、厚く滑らかなライダーズスーツの布地によって圧力が分散され、秘裂全体を撫で擦り、揉みしごくような、ほどよい愛撫になつてしまっている。

ぬちゅ、くちゅ、にちゅ――いやらしい響きが耳に聞こえているわけではないが、感触で分かる。

ライダーズスーツの内側、火照つた柔肉のさらにその奥で、恥ずかしい肉ピラが淫らな蜜を滲ませて、早くもはしたなく潤んでいる。濡れた粘膜炎が擦れ合い、あるいは裏地にしごかれて、心地よい細波

が秘裂に溢れかえってしまう。

「んん？ どうした、急に大人しくなったな」

「そろそろクスリが効いてきたんじゃねえか？」

「ッ!？」

ハツとするアリサに、下劣な笑みを深める男たち。「感覚神経の再分化がどうとか、神経密度が倍以上になつてピンピン感じる身体になるとか、小難しいこと言つてたな」

「普通の自白剤だと脳味噌を直接弄るからバカになっちゃうが、これだと皮膚感覚が何倍にもなるだけだから、バカにならないんだとか」

「まあ、理屈なんてどうでもいい。いやらしく勃起

した乳首やグチユグチユに濡れたオマンコがあれば、それで十分だ」

「ふあっ!? く……や、やめ……シラウっ!?」

痛いほど勃起していた乳首が硬い指に挟まれ、クニ、クニ、と揉み潰された。

途端に弾ける鮮烈な快感。

胸先に生じた熱い電流が乳房の中に反響し、左右の丸み全体が一気に沸騰する。

（か、感覚神経の、再分化……ッ!!）

アリスが身に着けている薬物耐性は、化学成分による中枢神経攪乱を減じるもの。末端の感覚神経そのものを弄られたのなら、まったく効果ない。

だがそもそも、そんなことできるのか——一瞬過ぎた疑問に答えたのは、自らの身体だ。

「あッ!? あ……やめろ、この……シラウっ!? ふ……うにゆうらッ!?」

股間に貼りついた男が仰向いた顔をグリグリと動かし、秘裂に新たな悦びが湧き起こった。ずれ動くライダースーツの裏地に肉敵や淫唇、クリトリスなどがしごきまぐられ、快感の荒波が背を駆け登る。意識が飛びそうになるほどの、未経験の淫悦だ。

しかも、乳房や秘裂だけではない。

ライダースーツに包まれた腕や太腿、脛などにも、じりじりとしたもどかしさが溜まり始めている。撫でて欲しい、揉んで欲しいと、細胞のひとつひとつが発情してしまっただかのようにだ。

もう、以前と同じ身体ではない。

常人より遥かに感じやすい、敏感すぎる牝の身体になっている。

（分化済み細胞の再分化なんて、植物細胞以外ではあり得ない。それを、クスリで起こすなんて……）

全身を舐む淫悦から少しでも逃れようとして、アリスは懸命に考えた。

だが、ダメだ。

「や……らッ!? く、ふうう……ッ!」

胸に貼りついている男の手指が動くたび、乳房の中に熱い悦びが反響して恥ずかしい声が漏れる。ライダースーツの股間にむしやぶりついている男が仰向いた顔を右へ左へ動かせば、

「はふっ!? あ、ああ……ふう、ああ、シラウッ!」

淫らな粘液に濡れた裏地に柔らかな肉敵や繊細な粘膜花弁が揉みくちやにされ、秘裂全体に蕩けるような快感が溢れかえって、細い背筋が泳ぐようになっってしまう。

（くそ……ッ! こんな奴らにッ!）

板枷に拘束された左右の手を怒りに震わせ、歯ざしりするアリス——と。

「んっ!? え? やだ……嘘でしょッ!?」

厚く丈夫なライダースーツに守られているはずの秘裂に、熱くプリプリとした舌の感触。仰向いて舐めていた男の舌が、なぜか直に触れている。

「へっへっへ……俺たちはこう見えても、改造人間なんだぜ。舌に定着したナノマシンによって、合皮を溶かす分泌液を出せるんだ」

「まあ、いままで使い道がなくて、なんでそんな改造したんだよってフテてたんだがな」

男たちがいやらしい笑みを深めている間にも、アリスの秘裂に達した舌は動き続けていた。合皮に開いた穴は思った以上に大きいのか、割れ目に潜り込んできた舌だけでなく、温かなナメクジのような唇の感触が柔肉の敵に這い回る。

「ふあっ!? く……シラウっ!?」

秘裂に湧き起こる快感が、一気に膨れあがった。ライダースーツに守られている間からすでに、布

越しに揉みくちやにされてはしたなく火照っていた敏感な恥肉が、劣情を乗せた男の唇や舌に直接蹂躪されているのだ。

愛蜜に濡れた淫唇を尖った舌先で掻き分けるよう

に舐められれば、割れ目全体に心地よい微弱電流が駆け巡る。熱い唇にクリトリスを押しさえられ、ピンピンに張り詰めた表皮を軽くしごかれれば、稲光のような電流が肉豆に発し、背を駆け登って脳天から突き抜けていく。

「ひらんっ!? く……シラウっ!?」

「へへへ、可愛い声が出るようになったな。そろそろチンポが欲しいんじゃねえのか?」

「ば……バカなこと言わないでッ! この程度のこと、私が……あッ!? ちょ……な、なににするの、やめてッ!」

叫ぶ間もあらばこそ、拘束された身体が抱きかかえられ、無理矢理姿勢を変えられた。首と手首を啜えた板枷が腰と同じくらいの高さまで降ろされ、怪しい唾液に溶けて大きく穴の開いたライダースーツの尻をうしろへ突き上げた恰好に。

ライダースーツの胸元はすではだけられているから、乳白色に輝く形よい乳房が重力に引かれて胸の下に弾む。股間に潜り込んでいた男はいそいそとアリスのうしろへ回り込み、

「お? 可愛い尻穴だな。見ろ、チンポ挿入れてってヒクヒクしてるぞッ!」

聞こえよがしに叫んで、恥じらうアリスに追い討ちをかける。

（な……なんてことをっ!）

穢らわしい排泄器官を見られ、嘲られる恥辱は、秘裂や乳房を見られる恥ずかしさ以上だった。しかも相手が、こんな下劣な連中——スパイとしてのプライドが首を立ててびび割れる。

「クソッ! 見るな……あッ!? さ、触るなッ!」

慌てて振った美尻に、右から左から男たちの手が群がってきた。溶けて裂けたライダースーツがさらさらむしられ、ムチムチとした尻肉が半分ほど露わにされて、羞じらいわななく肛門や淫熱に火照る秘裂

光の力、ついに陰る時

大好きな友人との日々を取り戻したい…メイはすべての力を注ぎこむ！

光魔少女

# メイ

拘束魔具の虜

第4章 闇魔少女メイ

小説 NOVEL 高岡智空

挿絵 ILLUSTRATION 草上明

「やつほ、お隣さん♪ 私は芽衣——響芽衣だよ、今日からよろしくね！」

転校してきた彼女は、決められた席の隣席である私に、明るくその声をかけてきた。

私はもちろん、いつも通りの作り笑顔で淑やかに、けれど心の中では見下しながら、こちらこそ、と返す。彼女など、いや——彼女を含めた他人など、自分にとっては踏み台に過ぎない。自分を高みに上らせ、その足場を支える者に過ぎないのだ。

そう——思っていた。

（そんな、な……二位……私が、二位……っ!）

そう思っていたはずの彼女は、直後の中間考査において、あっさりとした私の上に立った。結果こそ僅差ではあるが、転校早々に彼女は、私の上という地位を確固たるものとする。私が浴びるべき称賛と尊敬の眼差しは、彼女が一身に浴びていた。

「私、この問題解けなかったんだけど……あ、すごい八千代ちゃん！ ねっ、ねっ、次は一緒に勉強しようよ、お願い！ 教えて欲しいの！」

笑顔でその声をかける芽衣を見て、私は笑顔で心にもないセリフを返す。もちろん、こちらこそ色々教えてください、学年一位が先生なら心強い——等々、口にするたびに憎悪が渦巻いた。

『生徒会長 響芽衣』

張りだされた選挙結果を見て、私の顔から血の気が引いていくのを感じる。だが、なんとか顔色を誤魔化し、慰めの言葉をかける同級生たちに応援の感謝を伝え——芽衣への祝福を述べた。

「彼女なら、いい生徒会長になれるでしょうね。力になれることがあれば、ぜひ協力したいです」

自分の行く末というものは、常に頭にあった。

この学校で会長になり、実績を上げ、成績でも常に頂点に立ち、いい進学先を選んで、さらにそこでもトップに立つ。その先の学校、企業、組織でもその姿勢は変えず——やがて自分は国のトップに立つのだと、小学校の頃には人生設計していた。

なにをしたかった、なにかを変えたかったという思いはない。ただ、自分以外の者ではそうはなれないだろうと思いい、それなら自分がなるべきだと、自然に考えただけのこと。

無能な者は有能な者に尽くし、有能な者はさらに有能な者に尽くす——その一番上が自分であるべきだ。いまにして思えば彼女、響芽衣は極めて優秀な人材であり、彼女が自分の下においてさえくれれば、仲良くするのも各々ではなかった。

（なのに——どうしてあなたは、私の上に立とうとするの……おとなしく下にいて、従っていればよかったの……）

会長選に落ち、翌日の学校を生まれて初めてサボった私は、そのまた翌日の学校で、信じがたいものを目にすることとなる。

『副会長 常峰八千代』

副会長候補者たちが、自分よりは彼女がなるべきだと辞退し、同級生連中は誰しもが、私のあの言葉を吹聴していたらしい。それを真に受けた芽衣が、自分も彼女と一緒に仕事が行われない——と、大勢に訴えかけ、勝手に信任投票が行われたそうだ。

そもそも芽衣は推薦による候補で、むしろ演説などでは私を応援さえしていた。そんな姿勢が生徒の支持に繋がりが、会長となったのである。

彼女にしてみれば、会長職というものを自分と共同で務める、くらしいの感覚だったのだろう。私の執着した椅子を軽視するその態度に、プライドはいたく傷つけられ、私は激しい憎悪に包まれた。

それでも私の口から出たのは承諾だった。彼女への情にほだされた——わけでは断じてない。ここまで被り続けた仮面を、ここで放棄するのがあまりに無益だと判断したのが一つ。もう一つは、彼女の失脚を謀るためだ。

彼女は——どこまでも気高く、強かった。

私が小細工を弄そうと、それを真正面から掴み取り、投げ捨てるのではなく包み込み、敵をすべて味方へと変えてゆく。太陽のような海のような、あまりに大きな存在だった。

彼女の隣で微笑む私は、その様を見せつけられるうち、心を粉々に砕かれる。

（計画の初期の初期で躓くなんて——）

（あいつさえいなければ——）

（見る目もない無能な連中どもめ——）

彼女を貶す言葉、周囲を蔑む言葉を思い浮かべるときに、彼女の実績と照らし合わせることにとなり、ますます自分が惨めになってゆく。私が正しい、私が王道だと思えば思うほど、現実との差異が歪みとなって、ギシギシと嫌な軋みを響かせた。

そんなある日、私は闇と出会う——。

「闇が氾濫すれば、いまの世界は間違いなく崩壊する——そして、闇が新たな世界を構築するのだ」

「闇が……世界を……」

リンドと名乗ったその黒犬は、そんなことを私に伝えた。魔法だなんだという胡散臭い話ではあったが、目の前で犬が話しているのを見れば、眉唾な話も真実に思えてくる。そして、それが真実なのだと思えば、私は世界を構築する闇を——誰よりも多く抱え込み、色濃く凝縮させているようだ。

「——私が、闇を……世界を、作るっ……」  
長い間、心の中で育っていた私の上昇志向、その

原因の一旦を知り得た気がした。そしてリンドが言うには、彼と契約することでその闇を力と変えることができる——つまり、この間違った世界そのものを、作り変えることができるらしい。そのためにするべきことは、力を氾濫させる扉を開くこと、そしてそれを阻止しようとする光を持つ者を打ち滅ぼすことだと、黒犬は私に語って聞かせた。

「いいわ……あなたの話、乗ってあげる」

「ありがとう——君はこれより、私のマスターだ」

そうして私は、私を認めなかった誤った世界を破壊する、闇魔少女となった——。

◇

「そんな——そんな、くだらない理由で……世界を崩壊させようだなんて、馬鹿馬鹿しいわっ！」

ヤミヨの独白を、リンドの足に潰されたまま聞いていたシユカは、語気を荒らげて闇魔少女を糾弾する。けれど、そんな言葉で気持ちを改めるようならば彼女は最初から闇に堕ちなどしなかっただろう。

「それはあなたにとつてよ、メイの契約者」

「誰にとつてもよ……常峰、八千代……」

サキユミミックに襲われている八千代を救出するため、己の魔力の三分の一ほどを消費し、ヤミヨの結果を抜けたシユカは、数分と経たずして生徒会室に辿り着いてはいた。だが、そこで待ち受けていたのは触手でも八千代でもなく、多大な魔力を蓄えたリンド——闇に属する魔生物であり、大きな黒犬の外見を持つ、闇魔少女の契約者である。

芽衣の負担を軽減させる魔法に加担し、ただでさえ減っていた魔力を、結界の突破でさらに消耗していたシユカにとつて、万全の状態のリンドは敵う相手ではなかった。結果、彼に敗れたシユカは死なない程度に痛めつけられ、その後、姿を見せたヤミヨから、あまりにショッキングな事実を突きつけられることになる。

（こんな……こんなこと……）

触手に襲われそうになつていたはずの八千代は、あの鏡を通して見せられた、ただの幻だった。そして本物の八千代はあろうことか、あの結界の中で自分たちと対峙していた、ヤミヨだった——。

（なんて伝えればいいのよ……だけど——）

知れば芽衣はショックを受けるだろう、けれど伝えなければならぬ。シユカは懸命にリンドの拘束から抜けだそうと暴れるが、そもそも体の差もあり、その上で魔力を以て押さえつけられては、もう動くことすらできなかった。

「さて、すべてを知つたからには、しばらくおとなしくしててもらわよ——その間に芽衣には、しっかりと狂い悶えてもらわないとね……ふふふ」

そう言い残すとヤミヨは、姿を消そうとする。

「ま——待ちなさい！」

その背に懸命に叫びかけ、シユカは問いかけた。「すでにあなたの力は芽衣より上よ……もう彼女にこたわらなくても、闇の扉を探し、開けばいいだけ……なのになぜ、あの子にこたわるの！」

一瞬、ヤミヨが煩わしそうな視線を向けるも、すぐに冷たい表情を浮かべ、シユカに答える。

「私が、あいつにこたわっている？ はっ、冗談じゃないわ。確かに、あの子が私の下にいるなら、重用してあげたかもしれないけれど——」

ヤミヨはシユカの傍へ歩み寄ると、リンドに踏み躪られるその身体を拾い上げ、本物の蛇にそうするように、首元を指先で強く締めつけた。

「ぐっ……あつ……かは……」

「これは扉の鍵を開くための、大事な計画よ。光と闇の均衡を大きく崩すため、光魔少女を崩壊させておくだけのこと。あの子に対して思うことなど、何一つないわ。勘違いしないでくれるかしら」

「ヤミヨ——」

彼女の言葉の裏に感じた、ヤミヨの——八千代の、芽衣に対する強い感情を察知し、シユカは塞がれた喉で懸命に叫ぼうとする。

（まだ……間に、合う……なら……）

だが——言葉が吐きだされる前に、シユカの意識は闇へ落ちた。気を失い、ダラリと垂れ下がった紐のような蛇の身体を手にし、ヤミヨはうつつすらとも笑みを浮かべず、魔力によつてゲートを開く。

「マスター、どこへ行く」

「体育館よ。芽衣の公開処刑、そろそろクライマックスの頃だものね……最前列で拝ませてもらわないと。あんな女に騙された無能どもの、呆然とした顔と一緒に、ね……ふふつ、あははははははっ！」

途絶えぬ笑いを響かせ、ゲートに消えゆくその姿を、リンドは見えなくなるまで見送っていた。

◇

その——悪夢のような生徒総会にて、芽衣は全裸のまま、教師たちから取り押さえられた。シャワーの機会と着替えは与えられたものの、言い訳も説明も、する機会は得られない。

「二日間、自宅謹慎しなさい。その間に今回の騒動での責任と、君の処分について検討しておく」

そう突きつけられ、なおも食いがろうとする芽衣を抑えたのは、あろうことか八千代である。戸惑う芽衣に八千代は、その優等生の仮面を崩すことなく、優しく諫めるような声で言い聞かせた。

「大丈夫ですよ、芽衣——あなたがすぐ学校に戻れるよう、私が尽力しておきますから……くすっ」

その言葉に教師たちは同意し、彼女から詳しい事情は聞いておく——そう言つて、数名の女教師に付き添わせ、芽衣を帰宅させた。付き添いというのは建前であり、芽衣が余計なことをしでかさないうの、ただの見張りだったの言うまでもない。

もちろん——芽衣が冷静な思考を保つていたら



そんな最悪の事態は避けられたかもしれない。けれど取り押さえられる直前、本人から明かされたヤミヨの正体というショッキングな事実と、ポロポロになったシユカの姿を突きつけられ、芽衣は完全に戸惑い、混乱してしまっていた。

結果——芽衣は呆然としたまま、彼女らの言葉を受け入れることとなる。

最低の痴態を晒し、なんの説明もできぬまま二日もの時間を浪費させられるという、挽回しようのない状況、動けぬまま後手に回る情報戦、極めつけはシユカというブレインの不在——。

（なにが、どうなってるのっ……私、このまま……どうなっちゃうのっ?! 八千代ちゃんっ……）

八千代をはじめ、友人たちに連絡しようとも返事はなく、通じもしない。焦燥に包まれながら、芽衣は懸命にシユカの看護に努める。その甲斐もあつてシユカの意識は謹慎二日目の夕刻、無事に回復したのだが——そこで芽衣は、彼女が聞かされた八千代の事情を、すべて聞かされることとなった。

◇ 自宅謹慎——否、停学から明けた翌日、芽衣は久しぶりに、触手の支配を受けていない身体に下着をつけ、下ろしたての予備の制服に袖を通す。

（濡れてない下着、やっぱりいいなあ……）

乳房をしっかりと支えて押さえてくれるカップ、ピタリと腰骨を締めるようなゴム紐、お尻を撫でることなく包み込む布地——そこに新品の制服を纏うだけで、身も心も軽くなるようだ。もちろん、そんな天気でない状況でないことは、百も承知ではあるのだが。

「芽衣……学校は危険よ。行くのは得策じゃない」  
諫めるようなシユカの声も、背中にかげられる。

「——うん、わかってる」  
それでも芽衣はそう答え、スカートの裾をクルリ

と翻しながら、振り返った。

「シユカも万全じゃないから、ついて来られないもんなね……わかっているよ。だけど、私が行かないとみんなが危ない……闇の魔力を抑えなきゃ!」

「……そう、ね」

シユカは否定せず、怪我の完治していない身体をベッドで小さく蠢かせ、悲しげな表情を浮かべる。

「お願い——危険だと思つたら、すぐに引き返して。あの子は……ヤミヨは、あなたの知っている八千代じゃない……あなたへの嫌悪と憎悪に満ち溢れた最悪の闇魔少女よ……戦わないで!」

「それはもちろん——だつて、私は八千代ちゃんの大親友だからね! 友達とは戦わないよ……戦わないで、元の仲良しに戻れるよう、頑張るから!」

満面の笑みを浮かべて答える芽衣の言葉に、シユカの瞳からポロポロと涙がこぼれた。シユカは理解している——その言葉が100%強がりであり、芽衣自身が、二度と仲直りできないと思つて、芽衣自身を、その上での心からの願いであることを。そして、その上で、頼らなければ、こんなことには……私、芽衣を頼らなければ、こんなことには……

「——違うよ、シユカのせいじゃない。こうなることはたぶん、私と八千代ちゃんが出会ったときから決まっていたんだよ……それじゃね」

いつてきます——と。

そう言い残した芽衣は、重い足取りと気持ち悪さを懸命に振り払い、学校への登校路を急ぐのだつた。

◇ 「うわ……」「うっそ、もう来ないと思つてたのに……」「よく顔だせるよね」「変態女のくせにねえ」（つつ……だ、大丈夫……わかつたことだもん……）

周囲でささやかれる——どころではなく、堂々と口にはされる聞えよがしな罵倒や嘲笑を、芽衣は唇を

噛み締め、聞き続けるほかなかつた。教室に来るまで、幾度となく見知った顔に挨拶はしている。けれどその悉くが無視され、冷たい視線と舌打ちを浴び、失意と絶望の中で登校してきたのだ。

（……やっぱり、ダメだよ……記憶消去、全然通らないっ……くっ、ううっ……）

魔法を使おうとしても魔力が霧散し、効果を及ぼすどころか発動さえしてくれない。そして彼らのこの反応は、あの痴態のせいだけでなく、その後の八千代による説明の成果、ということなのだろう。直後に弁明の機会を——どのように弁明するか、言い訳すら思い浮かばないのは置いておいて——与えてくれていれば、少なくとも話を聞いてくれる生徒はいたはずだ。

だが、説明の機会を与えられたのは、副会長として芽衣の傍にいたと思われている八千代だけ。生徒会長としての芽衣を、誰よりも知っているはずの彼女が、あの行動について説明すれば、圧倒的な信憑性を持つて受け取られてしまう。

「うおっ、来たぜ……ブルンブルンの爆乳!」「いまさら制服着たつて、もう見られてんのになあ?」  
「動画も写真も、出回りがくつてるしな……へへへ」  
女子生徒たちの侮蔑の視線とは異なり、男子たちの視線は完全に、芽衣を性欲の対象として捉えている。獣のそれだった。知っている相手、学内の生徒からの遠慮のない性的な関心が、芽衣の心にあの記憶を呼び起こさせる。水着姿で口と尻穴を犯し抜かれた、おぞましい恥辱の記憶を——。

（もしかしたら、あの記憶も……元にも、戻されてるのかも……）

だが、いままら戻されたとしても、影響は少ないだろう。あれだけの恥辱、痴態を晒した芽衣に対する評価は、おそらく最悪といつていい。それを受け止める地盤をこそ、いまは問題視すべきだ。

……）

……）

姉姫は妹姫を助けるために虜囚として陵辱ショーの舞台に立つ！



# 嵌められた姉妹姫 (エレナとマリア)

小説 NOVEL うつせみ 空蝉  
挿絵 ILLUSTRATION いとうりゅうせい 伊藤隆生

# 嵌められた姉妹姫 (エレナとマリア)

王国歴二百七十七年。緑の豊かさで知られるエルシード王国は突如の強襲を受け、滅亡した。王と王妃は囚われるや即日公開処刑となり、遺児となった姫二人もまた囚われの身となった。それから早や三月が経とうとしている。今、亡王の長子にして姫騎士の名を戴く娘の姿は、闘技場に在った。

後頭部で一つに結わえた黒髪が盛大に靡き、豊かに実った胸の二つの膨らみがしきりに弾む。  
「チィ……！」

対戦相手である魔獣——虎と竜を足して割ったが如き外見の化け物が嘶き振るった前足の鉤爪が太腿間際を空振り、姫騎士の心身に寒気を刻む。

幸い腿に浮く汗と、騎士が纏うにしては心許なすぎずる腰布の前後に長く垂れた部分を裂いたのみに終わったものの、体力の差も考えると、長引くほど追い込まれてしまうだろう。  
(早く、倒さなければ……！)

囚われ、剣闘士として永らえる事となった姫騎士エレナは、両手と首を一枚の鉄枷で拘束された状態での戦闘を余儀なくされてもいた。本来の俊敏さも、国一番と称された剣さばきも望めない。当然素手であり、靴底が鉄のサングダルを履いた両脚のみが攻撃手段だ。その両脚も回避に忙殺されて、一向に反撃の機会を得られずにいる。

鎧の代わりに纏わされた粗末な胸当ては、すでに幾度か魔獣の爪が掠めて

部分的に裂け、素肌——脇と乳丘の一部を露出させられてしまってもいた。

「うほほ。避けよるたびに乳房がぶるぶる弾みよる」破れ目から覗く乳首も実にそそりますな！」

今日も満員御礼の観客席。居座っているのはほとんど敵国の兵や貴族だけれど、徐々に剥かれゆく姫騎士の様に下品な批評を飛ばしているのは、元エルシードの大臣達。私利を貪り、国の腐敗と弱体化を招いたのみならず、開戦後即、機密情報と引き換えに身を売った裏切り者どもに他ならない。

「うはは。庶民上がりの名ばかりの姫が、好いザマじゃわ」

「王位継承権もない身でわしらに説教垂れおったあ奴が、今は見世物というのだから、興奮もひとしおよな！」

(売国奴が。卑しいのはどっちだ！)

女剣闘士の衣服を徐々に剥き辱める。そして終いには、人間が抗うにはあまりに強大な獣の手で縊り殺されるところまで期待して、下卑た面をニヤつかせている。意識するほど反吐が出る。

「王をたぶらかし取り入った母親に似て、下品な身体をしておるわ」  
乳房や腿を視姦されて心地の悪さに寒気がする。亡き母を愚弄されてはらわたが煮えくり返る思いもした。

が、外野に気を取られた状態で勝てるほど、眼前の魔獣は甘くない。凜とした風貌の内に怒りと羞恥を押し殺して、エレナは襲撃から飛び退り、反転

攻勢の機会を窺った。

(今は目の前の敵だけに集中……。これに勝てば……勝ちさえすれば、マリアに会えるんだ！)

種々様々な魔獣相手に三十戦勝ち抜けたなら、別の場所に囚われている腹違いの妹姫共々解放する。囚われた日に、占領国司令を兼ねる敵国の王子に告げられた言葉があつたればこそ、今日まで恥を忍び永らえてきたのだ。

祖国を捨てた事は余儀なくされるが、妹と二人で生きてゆけるなら充分だ。希望の灯がエレナに恥辱を乗り越えて余りある活力を与えていた。

渴望する自由は、もうすぐ手に届く位置にまで迫っている。

「わはは。いよいよ追い詰められよつたぞ」「剥け！」「殺せええっ！」

いつしか追い込まれていたエレナの背が、闘技場の壁につく。獲物の逃げ道が狭まったのを確かめて、歓声に後押しされた魔獣が全力で突進してくる。とどめを刺すべく迫り来る巨体を前にしても、エレナは枷に阻まれて、身を庇う事も、顔を背ける事すら叶わない。間もなく訪れるだろう惨殺シヨ！を期待して観衆の興奮は最高潮。会場を揺るがすまでに達した。

——その瞬間をこそ、待っていた。獲物の逃走を防ごうと化け物が長い胴を起き上がらせ、後足二本で立つ体勢を取る。そうしてとどめの一撃。エレナの胴回りを優に超える前足を振り回し放った。その際、ひと際高まる客席の歓声に気を取られ、ほんのわずか

だが獣が動きが鈍くなる。

「くう、ああああっ！」

振り回された魔獣の前足の真上へと飛翔した姫騎士の右踵が、勢いそのままに直下。魔獣の肩間に突き刺さる。

「ぐうオオオオオオ……ッ！」

魔獣は身の毛もよだつ咆哮を上げて後方に倒れたきり、動かなくなつた。

(やつた……！)

先程までの興奮が嘘のように場が静まり返っていた。亡国の姫の恥辱と死を見たいがため集まった連中が、当てが外れた不満と、恐れ。皆一様に二つの感情をない交ぜにした視線を、姫騎士へと注いでいた。

けれどそれより、生き永らえた安堵よりも先に、エレナの心は、妹にまた会えるという希望に満たされていた。

姫を護る騎士、ゆえに姫騎士。我が身が姫である事は関係ないと言わんばかりの肩書きの謂れを聞かされても、愛しい妹を護る役を疎んじた事はない。身分の違いこそあれ姉妹として慈しみ合い、確かな絆を築いてもきた。むしろ護ってやらねばという気持ちで側仕えを担ってきた。その妹にもうじき会えるのだ。

囚われて以降初めて心潤わされた思いがして、まだ尚早だと思ひながらも噴き出る感情を堪えきれなかった。

(マリアに会ったら、まず話をしよう。たくさんたくさん……話をしよう)

両親を失くし寂しい思いもした。う妹の心の傷を癒してやりながら、共

に慎ましやかに暮らすのだ。

希望を胸に抱きながら、エレナは倒れ伏した魔獣を見やり、そして客席の中央付近に目をやった。そこに居座る不健康そうな風貌の若者。敵国の王子にして稀代の召喚術師ジークその人へと、約束の履行を求めるために。

「ふ……」

術師らしくフードを目深に被った男の口元がかすかにほくそ笑み、女剣闘士の視線を真っ向受け止める。

（相も変わらず生理的に受けつけられない方をする——）

不快感を覚えながらも、エレナは彼に向き直り。

「課せられし試練は果たした。そちらにも約束を守っていたらごう！」

まだ火照りの残る乳肌を、荒い息遣いに乗せて上下させつつ、告げた。

応じたつもりらしいジークが席を立ち、ロープから伸び出した右手をかざす

手中に発生した闇色の輝きと、発せられる不穏な気配が、否応なく魔術の発動を知らしめる。

「転移術で呼び寄せてしんぜよう。感動の対面を喜ぶといい」

距離の離れたエレナにその言葉は届かなかったが——発光さなかの彼の手が、闘技場の中央近辺を指し示す。そこにもうじきマリナが現れる。相手の意図を察したエレナは、周囲への警戒は保ったまま駆け出した

「マリナ……!!」

かつて同様の弾けるような笑顔と再

び会えると、思っていた。捕虜生活で多少は曇っていても、笑顔を手づけてくれるはずと。

けれど——実際に視線の先に現れた光景に、息を呑む。思わず立ち止まり、周囲への警戒も疎かとなった。

「ふあ……あつ、あはつ、ああ、つ！ 気持ち、いいですう、お股の奥コンコンされるのつ、好きイイ♥」

異形の魔物——ゴブリンに対面で抱えられ、自ら抱きついてもいる小柄娘。小ぶりの尻に届くほどの金髪も、高い声の響きも、愛らしい顔の作りもエレナの知る妹マリナのそれに相違ない。

なのに、見開いた姉の目に映るどれもが、懐かしさではなく、熾烈な衝撃と違和感を植えつけてやまなかつた。

「マリ……ア……？ どう、どうしっ」

——どうして!?

立ち尽くしたまま発した声に、ゴブリンに抱かれる娘が顔を向ける。

「あ……っ……ああ……お姉さま……お姉さま、わたしっ、イツひああああ……っ、だ、めええっ、今はお姉さまとお話する、ソッあアッソソ！」

魔物の中では最弱と位置付けられ、それゆえに高い繁殖力を有するゴブリン。そんな怪物が腰を揺るたび、抱えられたマリナが、艶めいた響きを吐き漏らす。蕩けた表情からは嫌悪も羞恥も窺えない。華奢な妹の股間の中心を、ゴブリンの生殖器が深々貫いている。発育途上の細身が壊れそうなほど

突き上げられているのに、マリナは甘えるように異形に身を寄り寄せて、媚びた囁きを響かせ続けていた。

「あは……ああ、硬いのが奥に、当たるのおつ、イイつ、よおお」

事の推移を見ていた客席の面々も、幼き姫の媚態に当てられたように興奮のつぼと化してゆく。

「下等魔物に犯されて年端もゆかぬうちから喘ぐような者が次期君主では、どのみちこの国も長くなかつたろうな」

本来のマリアの心優しさや清廉ぶりなど知る由もない敵国の兵が、露骨な軽蔑を幼き姫に、そして憐憫をこの場

にいない敗戦国の民衆に注いだ。

「しかし、幼き肢体に醜い魔物。なんともそそる。貴君も同意見だろうか？」

「え、ええもちろんですとも。実は前からわし、マリア姫を淫乱の資質ありと見ておりましたな……日々自慰のネタにしておりました次第で」

見るからに好色そうな敵国貴族に話を振られ、裏切り者の元大臣が、嘘か誠か秘めたる性癖を暴露する。明け透けな告白を受けて敵国貴族の男はおかしげに高笑い。元大臣は歪な諷刺笑いを披露する。

「だめっ、だめだよお、そこっグリグリされたらすぐイツちやうのおつ」

性的な要素を多分に含んだ侮蔑や嘲笑を悦び受け入れ、また妹姫が鳴く嬉しげな蕩げ眼と嬌声で男の視線を惹きつけ、惜しげもなく痴態を曝す元王女に、会場中の男の性的視線が注がれ

ている。

（もう、やめて……マリナ!）

無垢で穢れない少女だった妹が、醜い魔物、それも最弱の魔物であるゴブリンにいいように扱われて、喘いで

けれど妹を案ずるがゆえに、目を逸らせない。心筆られる姫騎士の姿勢が前のめりとなって、駆け出さんとする。

その出ばなを挫こうと、狂宴の主催者が言葉を放った。

「姫騎士殿が敗戦する、というのが既定路線だったのでね。先に妹君を躰けさせてもらつたよ」

段上で朗々と告げたジーク。その声がエレナの元に届く事はなかつたが、

笑はしかと目に留まる。敵国王子の、その態度が全てを物語っている。

——初めから、自由を与える気になかつたのだ。

「……っ。貴様ああああああつ!!」

振り所とした希望を破碎され、妹までも穢された。なのに憎しみをぶつつけるため拳を振るう事も叶わない。今初めて、枷を嵌められた身が心底から恨めしくて堪らない。

「ジイイクウウウツツ!!」

怒りで相手を殺せたら。そんな思いに囚われた姫騎士の瞳に、召喚術師の

再びかざされた魔術の輝き放つ右手と、嬉々とした口元が映り込む。直後、妹の痴態という衝撃に囚われたままでいた

姫騎士の左右に、異形の魔物が出現

# 嵌められた姉妹姫 (エレナとマリア)

した。

——ぶんっ!

間近に生じた邪悪な気配によって瞬時に緊張の再来したエレナの腰を、左に出現した魔獣——先に倒したのと同じ種族で、一回り以上大きな個体の右足が襲う。

「ぐ……っ! ああああ……」

緊張が強張りとなって身に現れていったせいで、かわしきれなかった。股布の前垂れ部分を掴まれ、地べたへと引き倒される。両手を枷に嵌められた状態で転がされ、唯一自由になる脚で地を掻くようにして起立を試みるも——

「はっ! ……あ……あ……!?!」

地に伏したまま魔獣の殺気を受け、初めて死の予感を覚えたエレナの瞳が、続け様の驚愕に見開かれる。姫騎士の視界の先には、魔獣を押し除け歩み寄る新たな異形。召喚術師が呼び出した真なる脅威の姿があった。

エレナ自身の倍は優にあらうかというオークの巨軀と、豚を百倍不細工にしたかの如き嫌悪催す面構え。さらには剥き出しの股間で屹立する丸太の如き逸物。異形のペニスの脈動。どれもエレナの心身を震わし、否応のない萎縮を誘発させる。武人として培われた防衛本能が、この時はかりは悪い方向に働いた。

オークの腕が振りかぶられたのを見て取って、とっさに身に染みついた動作をなしてしまう。

——枷により自由を奪われ、剣も盾もない。なのに腕をかざそうとし、回避に用いるべき時間を無駄にした。

「ぐ、ぶふッ……が、は……あッ」

異形の右拳が姫騎士の筋肉で締まった、けれど女性特有の柔らかみも帯びる下腹部に突き刺さる。痛苦と悔しさの中えずき、込み上げた胃液を吐き出しながら、土埃にまみれてのたうつ。

「姉……さま? 姉さまあああッ!」

胃液に続いて血反吐をこぼした姉を見て、青ざめた妹姫が喉も裂けんばかりの叫びを発した。姉を失うやも知れぬという不安と恐怖に押し潰されている妹の、涙に暮れた憐憫を誘う容姿。

(まだ、私のために泣いてくれるのね。まだ……優しいマリアでいてくれる)

やつと、本来の妹に再会できた気がした。安堵した心に腹部の痛みが激しく染み、またのたうちながら血反吐をこぼす。そうしてまた、妹の涙をより悲痛な響きにさせてしまった。

妹のために立ち上がろうと足掻く姉に、姉を案じ涙する妹。供物たる姉妹姫を見る観客達は、異常な昂揚に包まれ、食欲にさらなる刺激を欲して口々に叫び立てていた。性欲に続いて嗜虐心までも刺激され続ける事で、感性を麻痺させたであろう連中に理性など、もはや望むべくもない。

「加減はさせてある。死なぬ程度にね」

事が思い通りに進んで嬉しいのだからか。初めて喜色満面、土気色の顔を震わせ高笑いするジークへの怨嗟を、

痛む腹と胸一杯に敷き詰めたまま。

「く……う……逃げ、て……マリ……マリアアアアッ……」

肺に残る酸素を使いきる勢いで、すでに霞む視界では確めようのない妹の名を呼んだ。戦う力のない彼女単身では成せぬと知りながらも、願わずにいられない。

「うぐ……ぐっ! ああ……っ」

ポニーテールをオークの巨大な手に掴まれ、地べたより引き上げられて、再度拳を振りかぶられた瞬間も。醜悪な異形の面の向こうで嗜虐の微笑を浮かべているだろうジークの気配を察した際も。姫騎士の胸中は、愛しき妹への想いで一杯だった。

——ポゴォッ!

「がッッ!! う……ぐ……っ」

また腹部に巨大拳が突き刺さり、鍛え抜かれた、けれど女体ゆえの細さ、柔らかさを備えた肢体が宙に舞う。闘技場の壁にまで飛ばされ、激突し、三度血反吐をこぼしてから、間もなく、姫騎士エレナの意識は肉体を離れ、悪夢の淵へと引き寄せられていった。

——ぢゅっ、ぢゅちううっ。

「ん……は……ひあああうっ!」

目覚めは股に響く喜びと共に訪れる。覚醒と同時に膨張した疼きに唖らされて、姫騎士の尻が無様に震え弾んだ。

「なっ……? あっ、くうんう!」

事態が呑み込めず瞬いた瞳に、鉄の台と柱が映り込む。姫騎士の四肢と頭

部を捕らえて離さぬ拘束台は、抵抗にも揺れひとつ起こさず。エレナは改めて我が身の状態を確かめた。

まず、腰から下は起立状態で足枷を嵌められており、その枷自体は拘束台の左右の支柱へと繋ぎ留められている。ほぼ身動きが取れぬ有様だ。踵が鉄製の履物はすでに脱がされている。念入りに攻撃力を削ぎ落とされていた。

両手と頭も相変わらずの拘束状態にあり、身動きすらままならない。両手首の先、そして首から上はちようど腰の高さと同じ位置で拘束台に設えられた鉄板の枷穴に嵌め込まれ、固定されていた。必然的に腰から上を前倒しにする姿勢を強いられている。戦闘の際に所々裂けた心許ないポロ胸当てに覆われた双丘が、緊迫を孕み、震えた。

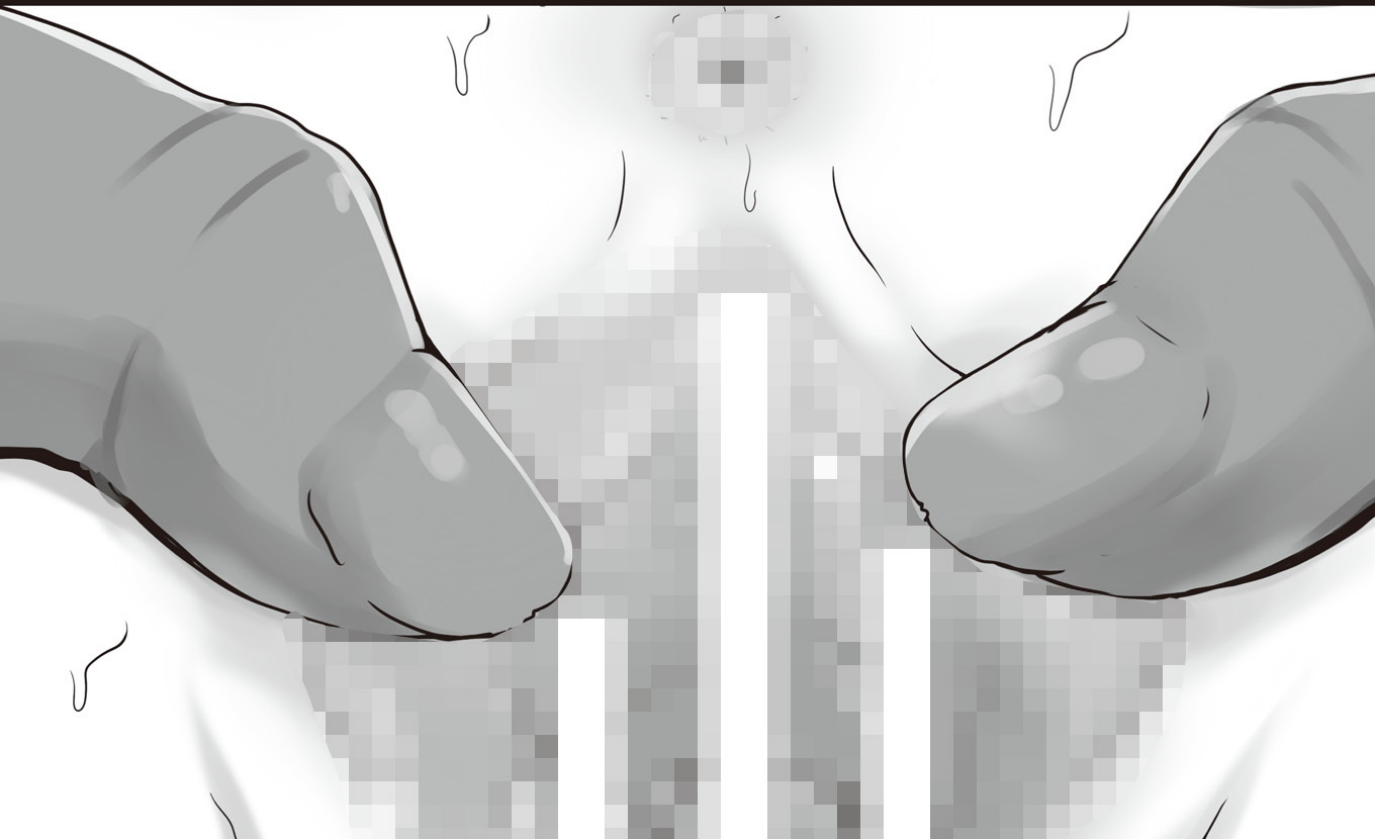
気絶前にも増して身を縛られた状況に置かれてしまっている。ひとつの事実をまず理解し、エレナが顔を上げて前を見据えようとした矢先。

「あ、暴れても無駄だア。おとなしくマンコねぶられてろ。ナ?」

エレナの腰の下。拘束された両脚の間辺りから、豚の鳴き声に似た響き混じりの濁った発声と、邪悪な気配が発せられた。二つ同時に浴びて瞬時に完全覚醒果たした剣士としての本能が、肉体に防衛と臨戦体勢を促すも、あえなく鉄枷に阻まれる。

(オークが……股下にいる!)

自身より頭五分は背丈があり、人ではあり得ぬ筋骨の有様をした異形の



白濁にまみれても  
高貴さは失わず!

あゝ  
はっ  
はあ

かなら...  
ず...

こんな...に  
この身を...  
穢さ...れ...  
よう...とも

最後には...  
必ず...!  
わたくし達が  
勝利...します

貴方...を  
討滅して  
さしあげ  
ます...わ

お

が

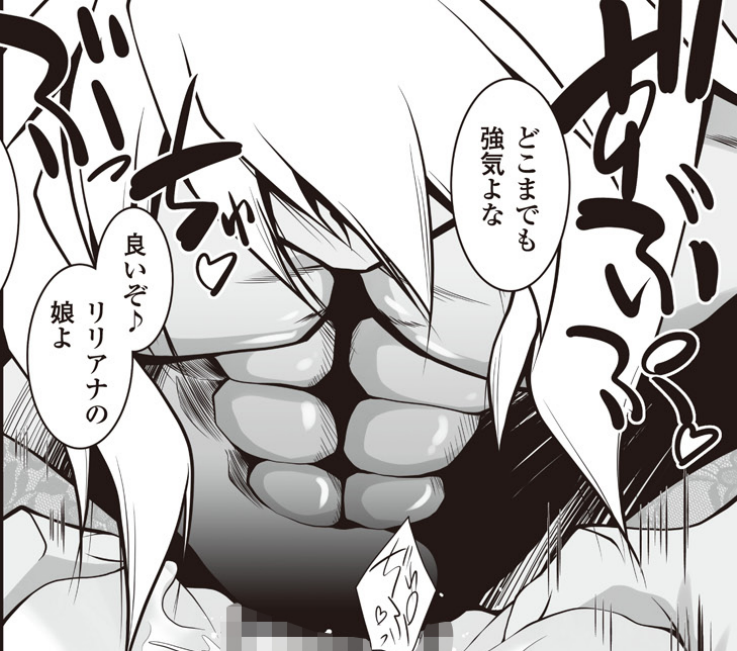
はあ  
はっ  
はあ

はあ  
はっ  
はあ



魔王様  
卑怯……ッ  
れすわ♡

だが貴様に  
何ができる  
堕ちきった  
この肉体で!



どこまでも  
強気よな

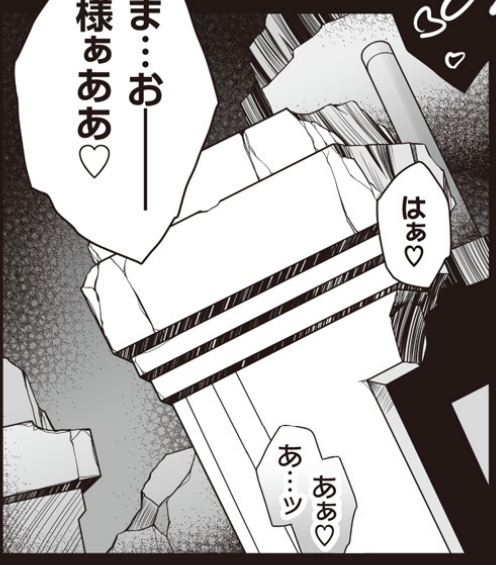
良いぞ♪  
リアアナの  
娘よ



おち ぼお  
挿れへえ…  
逆らへなく  
する…なんへ

♡♡

♡♡



ま…お—  
様ああ♡

はあ♡

す…す♡

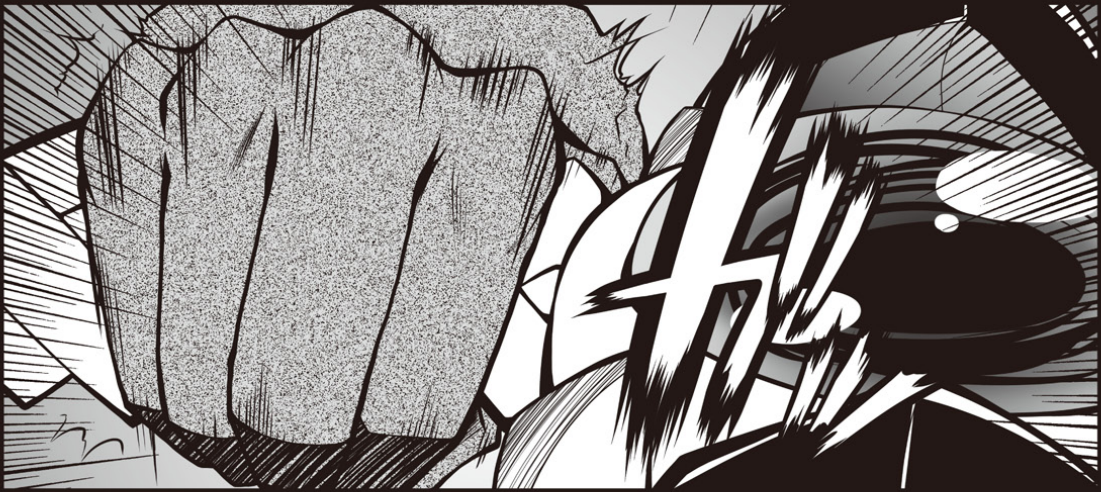
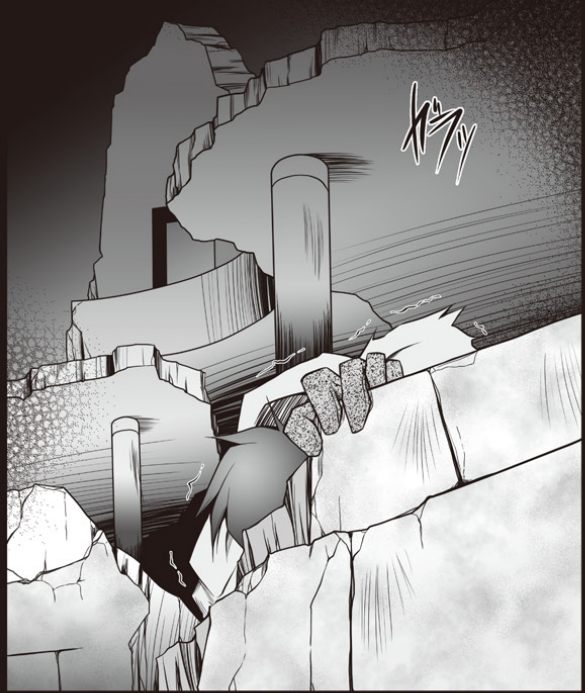


あ♡  
あ♡  
あ♡

あ♡  
あ♡  
あ♡

♡♡  
♡♡

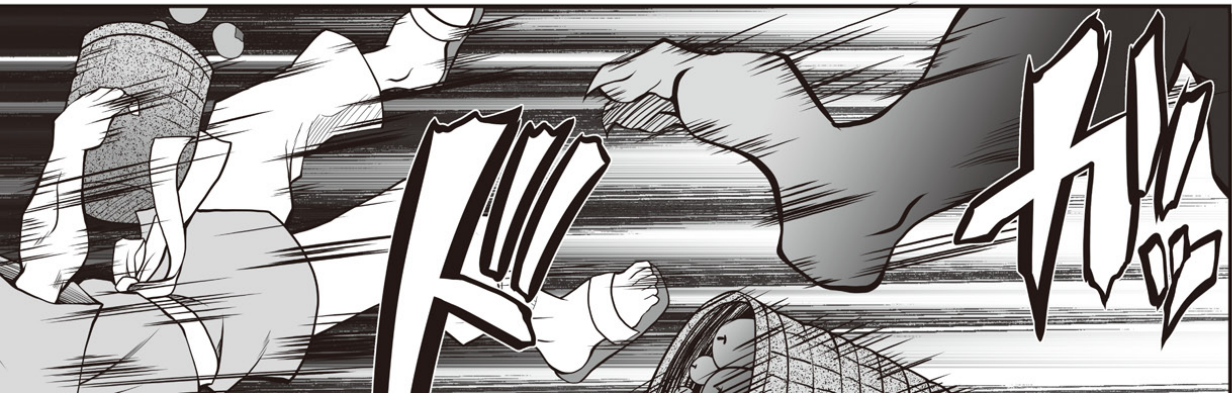




# 王都 陥落

～恥辱のギロチン拘束公開処刑～

漫画 **ぱふえ**  
COMIC







魔王!!

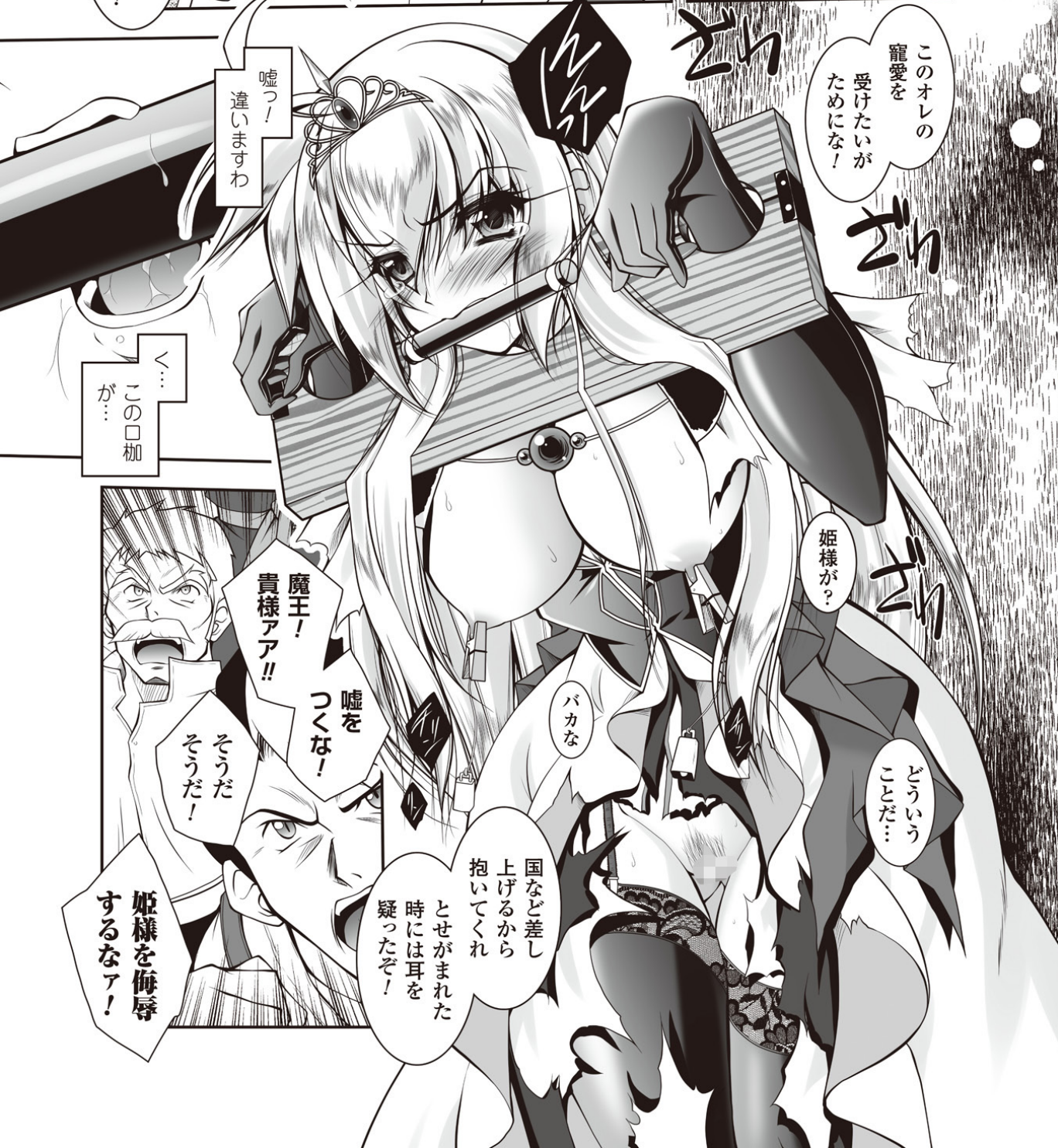
そして  
残された姫が  
次の王となった  
わけであるが



貴様らの  
愛する姫は  
喜んで  
悪の魔王に

そんな  
ざん

王座を譲り  
渡したのだ!



このオレの  
寵愛を  
受けたいが  
ためにな!

嘘っ!  
違いますわ

く...  
この口枷  
が...

姫様が?

バカな

どういう  
ことだ...

国など差し  
上げるから  
抱いてくれ

とせがまれた  
時には耳を  
疑ったぞ!

魔王!  
貴様アア!!

嘘を  
つくな!

そうだ  
そうだ!

姫様を侮辱  
するなア!

# 魔法少女と 淫辱の断頭台



ボウツチパワフル  
サボり魔の最弱兵に不戦敗!★

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説!

ご案内

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~5の番号がふられていますので、各シーンの末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

小説 **ぽいぽい**  
NOVEL すくなのこ  
挿絵 **少名彦**  
ILLUSTRATION

シーン1..秘密

「みんな怪我しても知らないからね！トワイライト・ストームッ！」

澄みきった初夏の空の下、リンと鈴の音が鳴るような可愛らしい声がこだまする。聞く者の心をくすぐらずにはいられない実に元氣瀉刺とした声。その少女は非常に可愛らしい面立ちをしていた。ショートボブのすつきりとした蜜柑色の髪筋、爛々と輝く意志の強そうな双眸、仄かに上気して色づいた頬は、少女のベビーフェイスに調和して甘く溶け込むかのよう。

そんな美少女の前に、全身黒タイツの男たちが殺気を放って取り囲んでいる光景はまさに異様だった。

「小娘が……今日こそ貴様の泣き面を拝んでやる！ 行けお前たち、魔法少女アカネに目にも見せてやれ！」

黒タイツ集団の後ろで偉そうに号令を放つ男の台詞はいかにも悪役然としたものである。事実、世界征服を目論む悪の組織の幹部なのだから仕方がない。ならば彼らの前に立ちふさがる美少女はいったい何者なのか——そんなことは決まっていた。世に仇なす悪者たちに敢然と立ち向かう正義のヒロイン、それこそが『魔法少女アカネ』その人の人なのだった。

（さてさて、今日もアカネちゃんの華麗な御姿を拝ませてもらおうとするか）  
彼女を建物の影から見守る男——彼

もまた全身を黒ずくめのタイツで覆っている——にへらと邪な笑みを浮かべている。場面はまさに悪の戦闘員たちがじりじりと魔法少女アカネを囲う輪を狭め、今にも飛び掛らんとしているところ。パチパチと火花を散らす電気棒を振り上げ、怪しげなガスを放つスプレーボールが一斉に魔法少女へと向かって投擲される。

「ふん、そんなオモチャじゃボクは倒せないよ！」  
瞬間、地を蹴った魔法少女が目にも留まらぬ速さで跳躍。澁刺とした容姿からは想像し難いグラマラスな胸元がぽよんと気怠そうに弾み、丈短のスカートがふわりと舞う。紺色のスパッツが艶めかしく男の目に映った。

「ひひひ、眼福、眼福。今日も実にイイ身体してるぜアカネちゃん……！」  
おやじ丸出しのエロ視線を受けていることなど露知らず、降り注ぐ凶器の雨をかくぐり、魔法少女は啖呵を切

って悪の集団へ突進する。臍脂色のコスチュームが陽の光にきらりと瞬き、少女の姿が見えなくなった次の瞬間、

「ぐわあああああ……！」  
まるで間欠泉のようにそこかしこから漆黒の人影が宙へと舞い上がった。

「おお、相変わらず凄まじいパワーだ！」  
物陰の男が呆れる間にも、暗れ暗れとした空へ向かって大の男たちが次々

跳ね飛ばされていく。  
「どおおりやあああああああ！」  
魔法少女の勇ましい雄叫びと、その

後に累々と降り積もる戦闘員たちの成れの果て。真っ黒な人海を真っ二つに割り開き、スタイル抜群のボディを下に暴れさせながら魔法少女は一直線に敵の親玉へと猛進する。  
「な、なにをしている！ 小娘一匹取り押さえられんのかっ！」  
（無茶苦茶言いやがって……それができりや苦労しねーっの）  
圧倒的だった。男の前で繰り広げられるのはいつもどおりの光景。こうして今日も悪の組織の世界征服計画にめでたく黒星がついたのだった。

\* \*  
さて、と彼は腰を上げる。怠慢がはれば重い罰が待っている。サボりとして薬ではないのだ。これから見つからないようにそと倒れ伏す仲間たちの中に混ざって、誰かが目を覚ますのを息を潜めて待つのである。

（ああそうさ、俺だって昔は悪の組織の戦闘員として立派に悪事の限りを尽くすのが夢だったさ……あの生意気な小娘をぎゃふんと言わせたかったさ）  
しかし現実是非情だ。何度もアカネと対峙してきた彼は心底思い知った。世の中には絶対に覆せない実力差があるということ。所詮、悪は正義に勝てないのだ。

それになにより魔法少女アカネは飛び切り可憐な女の子だった。わざわざむさい男たちに混ざってポコポコにさめている方がどれだけ幸せなことか。

きよるきよると辺りを見渡しながら彼は寂しくひとりごちる。  
「むむ!？」

そのときだった。目の端にひらりと映った淡い輝きを見て下つ端戦闘員の全身が凍りつく。視線の先に見つけたのは他でもない、びつちりとした蠱惑的なトップスに、ひらりと舞う暖色系のミニスカートと濃紺のスパッツ。彼の瞳に映ったのは今しがた同胞たちを悠々と空に舞い上げた張本人・魔法少女アカネの姿だった。

（まだこの近辺にいたとは……っ）  
背筋に冷や汗が流れる。見つければ組織の罰などよりよほど痛い目にあうこと請け合いだ。慌てて物陰に隠れようとした戦闘員だったが、ふと少女の様子がいとも違うことに気付く。どことなくそわそわして辺りに目配せしながら建物の陰に消えていく。まるで見られたくないものでもあるかのよう……そんな様子である。

（まさかこの辺にやつのアジトでもあるのか……?）  
魔法少女アカネに関する情報には莫大な懸賞金がかけられている。彼女の後を追ってそいつを割り出すことができれば大手柄だ。どうする、追うか？

ぐくりと喉が鳴る。あの様子には間違いないなにか秘密めいた香りがする、と久しく使っていないなかつた彼の悪党としての嗅覚が告げている。

シンと静まり返るビル郡を魔法少女はまっすぐ、しかしやはりそわそわと

気を配りながら進んでいく。やがて狭い路地の入り口で立ち止まると、念入りに周囲を警戒しつつ暗がりの奥に溶け込んでいった。

「やはりここになにか秘密があるに違いない……!」

腰の電気棒とスプレーボールに手をかける戦闘員。魔法少女にそんなものが効いた試しなどないものの、丸腰よりはどれだけかマシである。なにしろこの裏路地の先にあるのは敵の本拠地かもしれないのだ。

ぴつたりと壁に寄り添い、暗がりの奥へ視線を合わせたそのときだった。

「な、なんだっ——!?!」

不意に七色の閃光がパッと彼の視界を覆いつくす。虚を突かれながらも眩しさをこらえて目蓋をこじ開ける。閃光の最中、ゆらめく人の輪郭。眩しさも忘れて目を見開く。虹色の光はそこから——魔法少女アカネの全身から発せられていた。

だが少女が狼狽える様子はない。まるで身を任せるように静かに目を閉じたまま。トレッドマークのオレンジ色のマフラーが風もなく靡いて空気に溶け込んだかと思うと、続いて少女の全身から光の粒子がパッと霧散する。

「おお……っ!」

戦闘員の目の前で、アカネの纏うすべつもの解き放たれていく。ふるりと弾む大きなふたつの乳果、引き締まった稜線を描く細腰、濃紺のびつちりスパッツも例外なく消え去り、しな

やかでむつちりとした太ももがあられもなく白日の下に晒される。

「なにが起こっているんだ……!?!」

煌めく乙女の素肌が虹の中でくつきりと露わになったのも一瞬のこと。やがてアカネの糸纏わぬ下腹は虚空から滲み出るように現れたレギンスで再び覆われ、その上からさらにふんわりと水色のミニ・ワンピースの布地が降り注ぐ。瞬く間に起こった出来事に二の句を継げないまま、光の粒子がまばらになつて消えていき——路地裏はまた元の暗闇を取り戻したのだった。

ひらひらとしたコスチュームに身を包んだ魔法少女の姿はもはやなかった。

代わりにどこぞの学校の可愛らしい制服を着こなした、ごく普通の少女が気持ちよさそうに伸びをしている。

「んん〜疲れたあ〜。まったく正義のヒーローも楽じゃないや。今日のやつら、なかなか諦めが悪いんだもん」

元からそこに置いていたのだろうか、路地の隅から学生靴を拾い上げる少女。屈んだ拍子にスカートの裾がめくれ、スパッツに覆われた綺麗な桃型のお尻がふると戦闘員の視線を釘付けにする。

「な、なんだありや……!?! 魔法少女アカネが人間の女の子に……!?!」

謎の光に包まれたと思いきや、突如現れた制服少女——己の眼に映った光景を信じるならば、答えはひとつしかなかった。

「まさかあの小娘が魔法少女アカネの

「正体か……!?!」

「はあ、変身が解ける前に片づければ家まで飛んで帰れたのにさ……神様もこんな力をくれるなら一日に何度でも変身させてくれればよかったのに」

「なんだって……!?!」

戦闘員が驚愕に目を見開くなか、何食わぬ顔で吹きながら制服少女は踵を返す。そう、男が潜む路地の入り口へと向かって近づいてくる。

「まずい、こっちへ来るぞ……!?!」

慌ててもつれた足が壁際のパイプに強かに激突し、ゴーンと重々しい音が路地裏中に響き渡った。

「だ、誰っ?! 誰かいるのっ!?!」

当然、少女の訝しむ声が響く。心中で己の失態を毒づく間にも足音は着実に近づいてくる。南無三、戦闘員は震える手で腰の電気棒を掴み取る。

「くそっ、落ち着け! やつが本当にただの人間なら俺にも勝機がある。そうだ、これはチャンスだ。積年の恨み、今こそ目にも見せてやるぜ——!」

足音は壁のすぐそこまで迫っている。意を決して勢いよく飛び出した戦闘員は目にも留まらぬ速さで見事な不意打ちを食らわせる——はずだった。ところが大きく振りかぶった一閃は空しく宙を裂き、もんどりうった身体は前のめりに倒れていく。

「な……っ!?!」

視線の先には低く腰を落として如すなく彼を睨みつける少女の姿があった。不意の一撃にも敏捷に反応し、お返し

とばかりに太ももを引き絞っている彼女を眺めながら、戦闘員は己の浅はかさを実感した。

「どむんっ——!」

「ぐおおおっ!?!」

少女の膝蹴りが見事なまでに正中線を捉え、鈍い音と声が戦闘員の口から漏れる。

「やれやれ、雑魚をひとり倒し損ねてたか……!?! だだけどボクを不意打ちしようだなんてちよつと甘かったね」

悠然と言つて鳩尾から太ももを引き抜く魔法少女。変身が解けてなお、やはり絶対的な力量差は歴然かのように思われた。

「思われたのだが——、」

「あれ……痛く、ねえ……!?!」

鳩尾を押さえ無様に崩れ落ちるかのようと思われた身体は、けれどどしつかりと地面に立つたまま。

「なっ……!?!」

今度は少女が驚愕する番だった。ダメージを受けた様子のない戦闘員から慌てて距離をとり、今度は右側頭部へと峻烈なハイキックを繰り出す。無様な呻き声を上げ、戦闘員は遙か彼方に吹き飛ばされる——いつもならばそのはずだった。だが実際には少女の放った蹴りはいたもたやすく戦闘員の右腕に阻まれたのだ。

「お? おお……? 痛くない……!?! それに……見える、見えるぞ! 魔法少女アカネの動きが見える!」

本来ならば翻弄されるばかりの動き

がはつきりと見える。加えて彼女の攻撃は戦闘員になんらダメージを与えることもない。軽い。軽すぎる。今まで何十回と受けてきた強烈な蹴りとは比べるべくもない。

「わっ、ちよっ——!?!」  
にわかにアカネの脚をぐいと引き寄せる。しなやかなふくらはぎをがっしり掴み、バランスを崩したアカネの無防備な胸元へ向かって戦闘員は電気棒を容赦なく振り下ろした。

「あぐううあああつ?!」  
水色の制服の上からむにゆりと豊満な乳果にうずまつた電気棒がバチバチと雄叫びを上げる。

「ほお? こんなオモチャごときいつもなら涼しい顔で叩き割ってくるってのになあ、いったいどうしたんだ?」  
にやりと口角を上げ、上から下へ乱暴に電気棒を掻き回し、乳首の先にぐりぐりと押し付ける。毬餅のごとく柔らかな胸を弄り回す狼藉に、アカネの口からくぐもつた悲鳴がこぼれ出る。

「や、やめ——んくうっ?! 痺れっ、この……あうううっ! や、やめろ、んんんあああつ」  
「間違いないね……魔法少女アカネ、貴様の正体はただの人間……変身が解ければ俺ごときにさえ手も足もでない小娘でしかないわけだ」

「疑惑が確信へと変わり、不安が自信へと変わる。」  
「ククク、魔法少女のときとは違って

生身のカラダには染みるだろう?」  
豊かな乳肉にぐりぐりと押し付けたまま、苦しげに壁にもたれる少女の頭から足の爪先までを戦闘員はゆつくりと鑑賞する。

「ふ、ふざけるな……こんなの、なんとも……あつ、ちよつと、どこ突いて……んんんっ!」  
発育過剰な少女の身体が、男の手中で右に左にと為す術もなく身悶える。垂涎を禁じ得ない光景に戦闘員の声も興奮に上擦っていく。

「まったくスケベな身体だぜ……! へへへ、夢にまで見た瞬間だ。まさか魔法少女アカネをこうして手籠めにできる日がくるとはなあ!」  
戦闘員の魔手が欲望のままにアカネの胸へと伸びる。ワンピースの下からこれでもかと主張する蠱惑的な柔餅が、ごつごつとした男の手のひらに握り締められ、もにゅつと形を歪ませる。

「おおっ……! やわらけえ……!」  
「へ、変態っ!! スケベ!! 触るなあああつ!!」  
アカネの悲鳴など意に介す様子もなく、余すところなく乳肉の感触を確かめようと男は五指を蠢かせる。

「くあああ……んっ、ぶっ飛ばされたくなかつたら今すぐ——ひあああつ!」  
アカネを黙らせるかのように胸元に穿たれた電気棒がきつく食い込む。凄まじい電圧が身体の隅々を乱暴に駆け巡り、アカネの口から声にならない悲鳴が漏れる。

「さて、こつちの効果も試してみるか」  
徐々にヒートアップしていく興奮のままに、戦闘員は組織支給の怪しげなスプレーボールを取り出した。

「ぶしゅうううううううううっ!」  
有無を言わずアカネの顔めがけて桃色の煙が大量に噴きかかる。

「無駄だ、ボクにはこんなもの効かない……げほつ、ごほつ、うううっ……!」  
「ああ、『魔法少女』には効かないことは知ってるさ。だが……生身となつた今のお前にはどうかな?」

怪しげなピンク色のガスがアカネの口や鼻から容赦なく吸引されていく。  
「う、うそ……身体が……っ」  
効果は顔面だった。戦闘員に掴みかかっていた少女の手がだらんと力なく垂れ下がる。

「我がが研究所の発明品はお気に召したようだな。くくく、どうした? 俺をぶっ飛ばすんじゃないのか?」  
空つぼのスプレーを投げ捨て、戦闘員はむにゅむにゅといやらしい胸揉みを再開する。壁に押し付けられたまま、アカネはされるがまま。戦闘員を睨みつけるものの、その実、意識はだんだんと霞み始めていく。

「く、うう……抵抗したいのに、身体が痺れて動かな……んあああつ!」  
びくりとアカネの身体が撥ね上がる。靡げな意識を奮って胸元を見下ろすも、なにをされているのかほとんど理解できなかつた。

「くくく、魔法少女様の生乳、たつぷり堪能させてもらうぜ……!」  
むにゅむにゅと制服の中に感じる不快感。男の声が遠くに聞こえる。覚束ない意識でも、とてつもなく恥ずかしいことをされていることはわかつた。

「ふあつ……や、やめ……そこ、触るなあつ……んっ、んふあああつ」  
胸先から放たれる刺激にだんだんと身体が芯が火照り、いつの間にかアカネの口から淡い吐息が漏れ始める。チカチカと目の前の光景が瞬き、足腰が立つていられずがくりと折れる。

「おおつと、ただの人間には少し葉が効きすぎたようだな」  
華奢な肢体を受け止めた戦闘員は、人形のように無抵抗になった少女の身体をまさぐり続ける。瑞々しく男の手先を撥ねつけてくる実素晴らしい肉体。この若い身体が今や己のモノなのだと思つと、舌なめずりをしながら、際限なく高まる興奮に胸を膨らませずにはいられなかつた。

「まるで夢みたいだぜ。魔法少女アカネが俺の腕の中に……! さてどうしたものか……そうだな、まずは——」

◆「組織に連れて帰る」

↓シーン2 98ページへ

◆「自分だけの秘密に留めておく」

↓シーン3 102ページへ

## シーン2…博士の調教

魔法少女アカネが人々の前から姿を消して半月。世界征服という悪の組織の野望は今や滞りなく遂行されていた。戦闘員だった男は魔法少女を捕らえた功績により、今では数千もの部下を引き連れるほどの幹部である。街々を蹂躪し、奪い、犯し、心ゆくまで悪事の限りを尽くしまくる。念願だった地位も力も得、すべてが順風満帆に進み、現実はまだで己を中心に回っているかのようにだった。ただひとつ気にかかるものがある。それはやはり例の少女——魔法少女アカネのことに他ならない。

「んっ、くうっ、あつ、あふあ……っ」

幹部専用の豪華な椅子に座る男の顔を、モニターから溢れる光が照らす。静まり返る室内に時折響くのは、ヘッドホンから漏れ出るかすかな音だけ。男はその画面の中を食い入るような眼差しで見つめている。スクリーンに映し出されたアングラチックなサイトの右上には「魔法少女調教計画」という文字が並び、その中央にはとある少女の全身が画面いっぱいに映し出されていた。

「と、止める……はあつ、んああつ、止めて、はやくう……んんううっ」

ギロチン板で手と首を固定され、椅子の上で大股を開かされたはしたない格好でかつての宿敵——魔法少女アカ

ネは苦しげに息を弾ませていた。

衣服はほとんど着けておらず、きめ細やかな肌がそのままに曝け出されている。画面越しにわかるほど豊満な乳房をふるりと出し、ズタズタに剥かれたスパッツの内側でかろうじて純白のパンティが秘所を守っていた。

「止めろというのはいったいどっちのことかね？ カメラのことなのか、それともこれのことか……」

画面端にLIVEと赤く点滅する文字の横から、白衣を纏った恰幅のいい男が現れる。今や世界を脅かす悪の組織の主任研究員だ。戦闘員にとっては不服なことに、捕らえた魔法少女の身柄は今ではほとんどこの博士の所有物となっていた。

博士はゆつくりと拘束椅子に縛められたアカネの隣に立ち、彼女の身体中に無数に貼り付けられたパッドの紐を摘み上げる。

「ぐふふふ、残念ながらどちらでもできない相談じゃな。いいかなアカネ君、我々に歯向かい、世界征服計画を遅延させた君の罪はとても重い。今頃処刑されてもおかしくないほどじゃ」

「んくううううっ!!」

画面の中で少女の身体がびくんと波打つ。博士がしゃべりながら露出した乳房を無造作に驚掴みにしていた。

まるで目の前の肉体が己のものであることを示すかのよう。だ、安心してたまえ。これほど活きのよい、いやらしい身体をただ殺してし

まうには惜しい。そこでじゃ、我々の世界征服を待ち望むみなさんに是非魔法少女アカネのように邪魔をすることでなるかというのを君のスケベな身体をもつてして御覧に入れようと思わうわけじゃ」

「うううっ……こんなこと、絶対許さない……あんたたちなんか、自由にすれば一撃で——」

「ふむ、相変わらず躰のない小娘じゃ、ワシがしゃべっているときは静かに」

「あつやあつ、乳首摘む、なああつ……んくうんんん……!!」

画面がアカネの胸元にズームする。乳肌に浮かぶ汗の玉がはつきりとわかる。その頂の蕾を博士の節くれだった指がぎちぎちと痛いほどに振り上げていた。

「くくく……いざまだアカネ——鼻息荒く画面の中を見定めながら男は薄く笑みを漏らす。かつては最強と恐れられた魔法少女も今では形無しだ。だが……なにかが心に引っかかる。

胸の奥に感じるかすかな苛立ちを無視しつつ戦闘員は再び画面に注視する。「ほれほれ、空豆のようにコリコリ固くなってきおった。君は本当に乳首が弱いのか、それとも全国の男どもに見られるのが興奮するのかね？」

「だ、誰が興奮なんか……っ」

画面端に表示されている497,831という数字に男は視線を止める。始まって間もないこのネットストリーミングに存在する視聴者の数は今なお上昇し

続けている。あられもなく胸をはだけ、局部を曝け出したアカネの姿が今、世界中に配信されているわけである。

「ぐふふふ、人間どもを必死に守ってきた君が今では彼らのズリネタというわけじゃ。ほれほれ、君も遠慮なく悦がりたいまえ」

「うるさいうるさいっ！ ポクは感じてなんかないっ！ んん、くあつ……こ、こんななんともないっ……誰がお前の指なんかで——んくうううっ」

アカネが感じていると認めようと認めまいと関係なかった。必死に唇を噛み締め、真っ赤に上気した頬に我慢の涙が伝う表情がアップになってしまえば、視聴者にはすべて筒抜けだろう。（だがどうして……？）

胸を採まれているだけだというのに少し過剰な反応ではないだろうか。そんな男の疑問はすぐに明らかになる。「おやおや、まだ「レベル1」だというのに随分な感じ入りっぷりじゃのう。まだまだ調教はこれからじゃぞ？」

「ひっ……!!」

博士の言葉を聞くやいなや、あれだけ喚いていたアカネが息を呑む。興奮に息を弾ませ、男はのめり込むように画面に顔を近づけた。いったいなにが始まるんだ？ 画面からフレームアウトした博士が、両手になにやらリモコンのような機器を持って現れる。

「ま、待つて！ 今はだ……っ」

弱々しく首を左右に振るアカネ。これから起こることによほどの抵抗感が



# オオオオ

魔女狩り  
…ねえ

我等が国を  
滅ぼした恨み…  
必ず捕えてくれる！

この不死の魔女ステラに  
敵うと思っいて？

ボウヤたち…

キヤッ

数百年生きた魔女の  
十日間の陵辱

官憲こときの剣が  
届くわけないでしょう

私を捕まえるなら  
殺す気で…

# 魔女裁判 陵辱

りょうじよくまじょさいばん

うたまろ  
漫画 歌磨  
COMIC



銃弾…!!  
まさか私を本当に  
殺す気で…!!?

ダメだ背骨を  
損傷してすぐには  
回復が…!

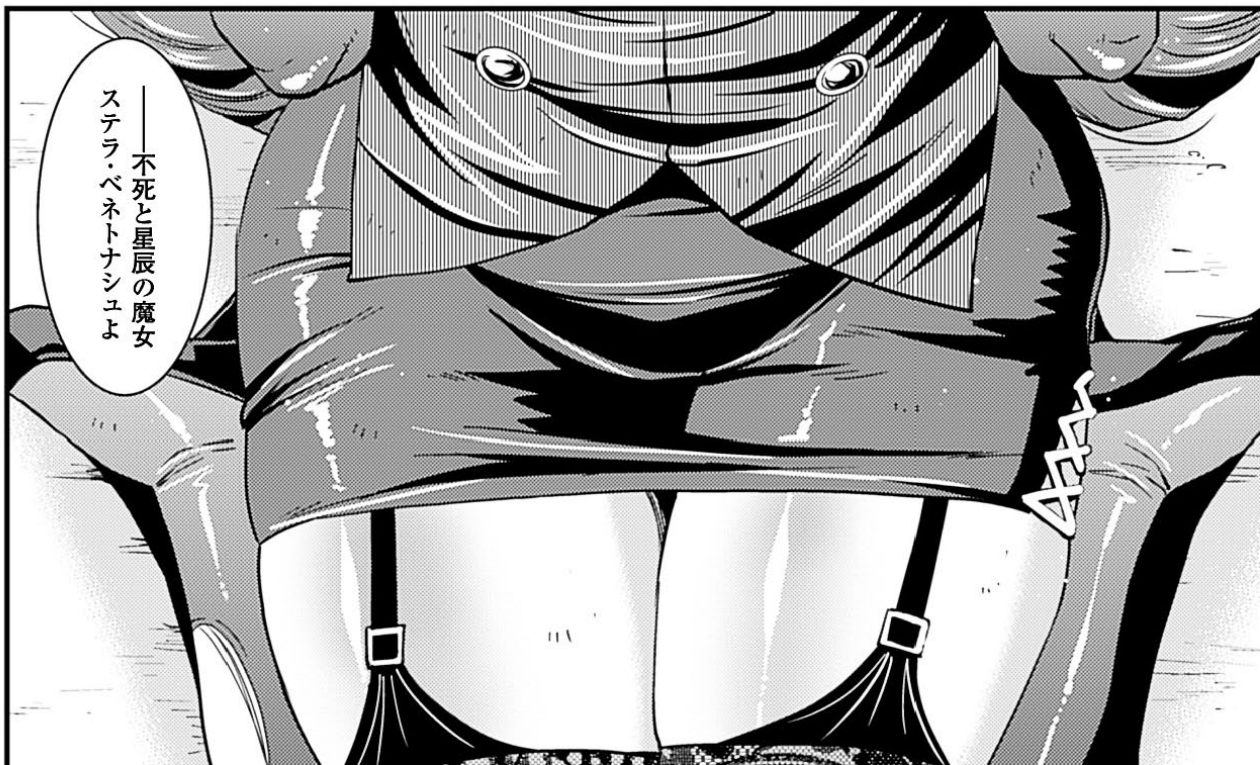


あ…!?



追いつか…ない…!

落ちたぞ!  
早く縛れ!



——不死と星辰の魔女  
ステラ・ベネトナシユよ

あらゆる犯罪に手を染め  
滅ぼした国は数多

本来なら  
裁判にかけるところだが  
数百年生きた魔女に  
すでに戸籍は存在しない

なんと  
屈辱的な姿…！  
手が封じられては  
魔法も使えぬ…

つまりこの女の存在を  
認められず人権すら  
存在していないということ

ゆえに  
政府は

魔女ステラを  
処刑までの間

男囚しかいない  
この刑務所で責め苦を  
与えることにした



魔女？  
なんでも数百歳  
らしいじゃねーか

おいおい  
とんでもねえ  
ババアだな

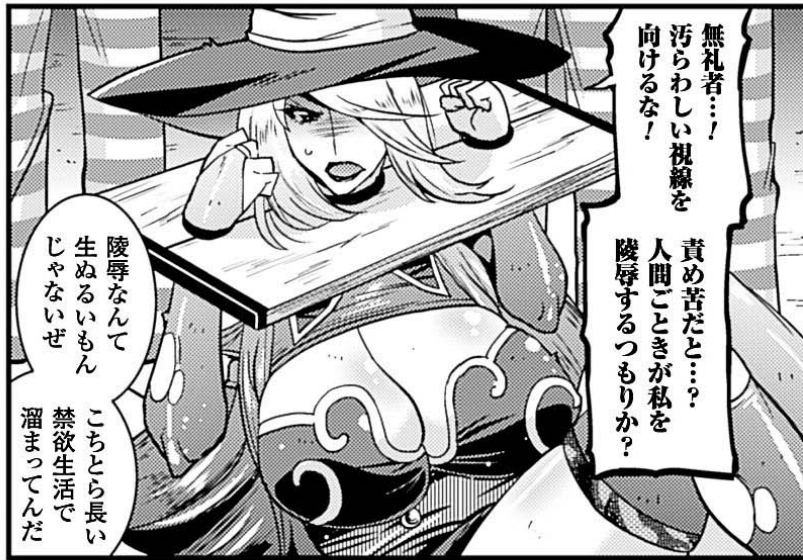
にしても随分  
エロい身体  
してやがるぜ



お前のことは生殺与奪  
含め好きにしていって  
言われてんだ

刑務所の囚人の  
数はおよそ500人

お前が処刑される  
までの数日間



無礼者...!  
汚らしい視線を  
向けるな!

責め苦だと...?  
人間ごときが私を  
陵辱するつもりか?

陵辱なんて  
生ぬるいもん  
じゃないぜ  
こちとら長い  
禁欲生活で  
溜まってるんだ



はたして  
犯し殺されずに  
いられるかなあ?!

おらおらと  
股ひらげや!

うああっ!?



そっ嬢がんなよ  
仲良ししようぜ  
魔女さんよお

うぐっ!!



数百歳のくせに  
マコはガキみてえに  
綺麗な色してんな

いたっ  
下着ひっぱら  
ないでっ



んじや魔女マコ  
一発目いただき  
おっ入口  
スッゲーきつい...!

んっ!!  
待つて待ちなさい!



そんな濡れても  
ないのにベニスなんて  
入るわけないでしょう!?  
汚らしいものを  
押し付けないでっ!

分かってねーな  
マコ濡らして滑り  
よくしちまったら...



ゲイルム内のオナベットヒロインを  
ギロチン拘束で騷り楽しむ！

# ヒロイン強制辱

戦女神姉妹  
陵辱ダブルギロチン刑

たきのぎょういち  
小説 **滝野鏡一**  
NOVEL  
挿絵 **sasana**  
ILLUSTRATION

「あああッ——!! うあッ、ああッ、いついやああアア——ッ……!!」  
 拓男の足元で、股間のベニスの真正面で、ヒップに鞭の一撃を受けた戦女神が泣き叫ぶ。

「ああ、カワイイねリフィーナたんはっ……♥ その顔と声がステキだよっ、なんだって本物の戦女神だもんねええええっ……♥」

ベッドの端に座る、でっぷり太った腹の斜め下に、兜を着け鎧をまとった「本物の」ヴァルキュリアがいる。丈の低い、しかしがっしりとした骨組みのギロチン台に四つん這いで拘束され、その脆い格好で首と両手首を横板にガッチリ嵌められている。

それはコスプレなんかではなく、本物の神聖金属でできた兜と鎧。

そしてリフィーナは——二次元世界のゲームキャラ、『ヴァルキュリア・ソードライン』のヒロインは——、この現実世界に召喚された、手に触れられる現実の存在。

拓男はその現実の戦女神を使い、今まででさんざんオナニーに使ってきたシチュエーションを、リアルにやっているのだった。

(ど、どうしてなのっ、どうしてこんなことに……!! わ、私はヴァルキュリアっ、それなのにこんなっ、こんな者たちに……!!)

リフィーナは戦女神の聖なる力を根こそぎ奪われ、肉体も完全にギロチンに固められていた。抵抗の術は何もな

く、ただ無力に無様に陵辱の的となり、「愉しまれる」だけでしなくなっている。それは魔族どもと気高く戦い続けてきたヴァルキュリアにとつて、死にも勝るすさまじい恥辱だった。

「ねえ、変わり果てた姿だよねえリフィーナたんっ……! あの勇ましいキミはどこへ行ったの? 凜々しいお顔はどこへ行っちゃったのかなあああ?」

拓男はほとんど異常者を思わせるほどの表情で浮かれニヤつき、そんな言葉を送りつけてまともに口走る。

「キミさあ、戦女神が絶対に見せちゃいけない恥姿を見せてるよねえ? でも知ってた? キミらヴァルキュリアは同人誌とか同人ソフトじゃさんざんそんな目に遭ってるんだ——キミらを罵りたい人たちが、世の中にいっぱいいるんだよお?」

拓男は頭の中で「公式の」リフィーナの姿、原作ゲームやフィギュアに描かれた彼女の姿を思い浮かべ、それをいま目の前の無惨な姿に重ねて愉しむ。活発な少女タイプ。やや幼ささえ感じさせる外見に描かれた彼女は、若い女神の愛らしさと聖純さを表すかのようなピンクの髪を三つ編みにして、それを両側に翼をあしらったヴァルキュリア共通デザインの兜の隙間から可憐に垂らす。

同じくピンクを基調色とした神聖金属の鎧、アームアーマー、レッグアーマーの装備一式を、細く小柄な身にま

とう。

その性格は常に明るく、たとえ苦戦に陥ったとしても自信と希望を失わず、澁澁とした振る舞いで仲間の戦女神たちを勇気づける——というのが、原作ゲームでの設定だった。

しかし今のリフィーナに、そんな澁澁とした凛々しい少女の面影はない。グロテスクでチンカスのこびりついた男の肉棒と鼻が触れあうほどの距離にある彼女の顔には、恥辱の証の射精痕が広がっている。しかもその鼻孔にはフックをかけられ、プタのように無様に縦に広げられていた。さらにそんな状態で両膝を床に突き、処刑される罪人のような格好でギロチン台に固定され……

「ひいッ!! お、おひいああッ……!! いやっ、ああ、ダメえええエツ……!!」

もう何度目かわからない鞭打をまた浴びせられ、リフィーナは心ならずも「か弱くなった強きヒロインの、加虐欲をそそる被害声」を上げてしまう。それはもちろん拓男の聞きたかった声——グロベニスを硬く太らせ、その先端からカウパー液を下に滴るほど湧き滲ませる声なのだった。

(くッ、屈しない絶対につ……何を、何をされてもおっ——! たとえつ、たとえこの身は穢されようとっ、心まで折られることは絶対にいいッ……!!)

こんな状況下にあってもなお、リフ

フィーナは必死の思いで戦女神の誇りと矜持を保とうとする。それはある意味滑稽な姿でもあった。武装したヴァルキュリアでありながらそのままの格好で聖なる力を根こそぎ消され、泣き叫びながらこのキモオタに辱も処女も奪われたのだから。今もこうしてギロチン台に拘束され、逆転のチャンスなど全くないことを自分でも悟らされているのだから。しかもヒップに受ける鞭は、痛みだけでなく異様に強烈な「快感」をも彼女の総身に駆け巡らせてしまっただけから——

どんな人間でも(いや戦女神でも)、こんなことになれば絶望しきつて心は虚ろに、そしてただ悲鳴しか上げられなくなってもおかしくはない。それでもリフィーナがお悲壮な心の抵抗を止めようとしなのは、拓男がそう望んでいるからだ。そういう「設定」でここに召喚したからだ。

(ああ、いいなあッ——こんなヒロインをギロチン責めにかけてあげるのがボクの夢だったんだよねえ……♥)

ギロチン台は——またぎでできるほどの高さしかないものの、いかにも頑丈な太い木柱で作られている。床と接して台自体を支える横木は、四つん這いで強要されたリフィーナの足指の先まで伸びている。

リフィーナはそこに両膝を突き、厚い木の板に開いた三つの丸穴に首と両手首とを通され、足首は横木に縛り付けられ、すっかり固定されていた。

もちろん、どんなにもがこうとしてもギロチン台は小揺るぎもしない。

リフィーナの鎧はその背面を剥ぎ取られ、細腰の肌が露出している。さらにはスカート状の聖衣の裾もまくり上げられ——いや一部は引き裂かれ、若々しい丸みあるヒップすら守るものもなく剥き出しに。

そしてその後ろには一人の女が鞭を手に立ち、楽しげな笑みを浮かべながらゆつくり間を置き、うら若き戦女神のヒップを打ち据えていた。

「くっ、あッ、あおおおッ……!!」  
う、打つのはっ、打つのはもうっ——  
やめっ、やめてッ、やめなさいいいお願い!!!

鼻フックで歪まされた顔をいつそう歪め、引き撃らせ、リフィーナは戦女神の自分を監禁拘束する憎むべき「敵」に、哀訴のような叫びを上げる。

その聖純な肉体の中に、ここへ連れてこられるまで決して知ることのなかった「おぞましい快感」の波動が、激しく何度も打ち付ける。それが彼女自身信じたくない「甘み」を帯びた、どこか官能をそるような羞辱の声を上げさせてしまっただった。

「こっこんなッ、こんな声エッ、私があっ……!!? こんな声を、私が出してっ——こ、この者たちにつ聞かれてるううッ……!!!」

「ホント、情けないわねえこのヴァルキュリアちゃんは——それでも歴戦の戦女神? アンタの剣で何匹も魔獣が

倒れていったんじやないの? 何人もの魔族が消し飛んでいったんじやないの? いくら力を失ったからって、せめて聖なる「耐える力」ぐらいいは見せてもらわなきゃ面白くないじやないリフィーナちゃんさあ——」

邪悪な微笑混じりに嘲笑の言葉を発する女の名は、レネディアという。

確かに女には違いないが、その姿も身に着けているものも、普通の女では全くない。

全身紫色の肌に、露出度の高い禍々しいデザインのもの。その鎧の文様は、まるで触手がトグロを巻き、無数に交錯しているように見える。

そして手に握られた鞭はよく見れば、彼女の腰の後ろ側から伸びていた。それは変形能力を持つ淫魔の尾であり、今は鞭として使われている——

彼女もまた本物の「女淫魔」で、実体を持つ現実の存在。

その肉体も鞭の尾も、身に着けた鎧も全て「本物」。

リフィーナと同じくゲーム世界から抜け出してきたレネディアだが、リフィーナが強制召喚されたのと違い、自分の意志でここへやって来た。

「ヴァルキュリア・ソードライン」の戦女神を召喚する力を拓男に与え、リフィーナを犯さず、拓男の興奮を自らの魔力に換え——ついに世界の境界を踏み越えて来たのだった。

「ふふっリフィーナ、拓男さんがアンタたちヴァルキュリアどもを黜れば黜

るほどあたしの魔力は高まっていくの——ついでにあたしも、アンタたちの恥辱姿を愉しめるってわけよねえ♥」

レネディアの生きた「ゲームの世界」は、むしろ彼女にとつて現実の世界。

そこでの敵はヴァルキュリアども。しかし中級魔族に過ぎない身では、どうやっても戦女神たちに勝つことはできない。だからこの「異世界」との接触を試みて成功し、自分自身では使えない「力」をこれと見込んだ男に——拓男に授けて使ってもらおう。

そして、彼を選んだのは間違いでやはりなかった。

「ヴァルキュリア・ソードライン」の登場人物たちに歪みきつた愛情を向け、むしろ彼女らについてはとことん詳しく。その強烈な欲望は、「念じるだけで好きなものを好きなように召喚できる」などというものを可能にするのに充分なものだった。まさに彼は、これ以上ない適材だった。

レネディアが特に助言したのは、「戦女神の聖なる力は必ず奪っておくこと」「腕力も幼い子並みに落としておくこと」の二点のみ——

単純に、ヴァルキュリアどもをこちらの世界に召喚し無力化するだけで敵の数は減ることになる。だがレネディアに、それだけで済まず気はまるでなかつた。

あるいは可憐に、あるいは凛々しく、人間どもの崇敬を受けて光り輝き躍動する戦女神たち——それにどれほど嫉妬と怒りを掻き立てられてきたことだろう。いつか彼女らに地獄のような恥辱を味わわせ、高貴な心と体を踏みにじり破滅させたいとどれだけ願ってきたことだろう。

それが拓男という最高の「力」の受け手によつて、現実のものとなつていく。レネディア自身もその陵辱に手を貸し、直接に愉しむことができていく。拓男と自分の欲望が相乗共鳴することで彼女の魔力はいっそう高まり、いつか魔王さえ超えることになる。まさしく拓男は彼女にとつて、この世界で言う「最高のパートナー」と言えた。

「ねえ拓男さん、これからもこの調子で愉しませよ♥ どんなに責め罵つてもやり過ぎじゃないわ、あたしのヴァルキュリアどもへの恨み、こんなものじゃないんだしっ——♥」

「力」の効果の一つとして、この部屋は完全防音化されている。どれほど泣き叫ぼうと外に漏れることは一切ない。召喚された戦女神たちにとつて、ここはまさに絶望の監禁拷問の場となるのだった。

この拓男の住むアパートの部屋——壁には二次エロポスターが貼られ、雑誌や菓子袋の散らばる典型的なキモオタ部屋で、少女女神リフィーナはギロチン陵辱を受けている。拓男の抱く「長年の夢」が実現している。

「そ、そうだよねレネディアっ——ああ可愛い、可愛すぎるよりリフィーナたんっ——! ボクの大好きな戦女神



のキミが、こんなミジメでイヤらしい目に遭ってるなんてっ……♡ これってホントに現実なんだ、本当にボクの部屋でキミの身に起こってるんだよっ……!!」

ズリネタとして大好物の北欧ヴァルキューレタイプヒロイン——そんな美しい女神たちが多数登場するゲーム『ヴァルキューリア・ソードライン』は、何年も前から彼のお気に入りだった。

公式の「まともな」アクションRPGで遊ぶだけでは、もちろんない。

彼女たちを扱った同人ソフト、CG集、エロ漫画、そしてフィギュアに至るまで——そんなものを集め、使う、何度センズリしてきたかわからない。

でもそれらも当然ながら、いま足元でギロチン台にかけ這いつくばらせた「本物の」キャラに比べれば、リアル感はずっとずつと及ばない。

(う、うああどうしてええッ……どうしてこんなことにいいッ……!!? だっ誰か、助けてえっ……ひッ、ひぎッ、打つのはやめてえうあああああ——ッ……!!!)

口からの叫びとともに、リフィーナの心の中の叫びも聞こえる。それもまた、力の一環。悲痛な声と内心との二重奏が、興奮・快感・嗜虐欲をさらにいっそう高めてくれる。

板の丸穴から出たリフィーナの両手はまるで「グー、パー」を繰り返すかのように鞭打ちによって引き撃り開き、苦痛によってまた握りしめられる。

それを眺める拓男は自分でもキモいと思いつつ、「ぐひッ、ふひひッ」などと声に出して笑ってしまふ。

「くっこれがさあ、これがボクの力」なんだよ、ボクは何でもできるんだっ——! リフィーナさんも他のヴァルキューリアたちも、みんなみんなボクの慰みものになるんだよねえっ……♡」

ああ、自分の童貞喪失相手が、大好きなこのヴァルキューリア少女だなんて——「本物の戦女神」、本物の二次元キャラ」が相手だなんて。ついでにその彼女の方も、自分のチンポで絶望的な処女喪失を遂げただなんて。

脂肪の垂れたブクブクデブで、タラコ唇とニキビ跡だらけのブサメンで。こんなキモオタヒキニートに犯されるなんて、女性には絶対に耐えられないだろう。もしそうなったら本気で死にたくなるだろう。

でも今、輝ける戦女神のリフィーナは、まさにそんな目に遭っている。その絶望感を考えただけで胸が躍る。「ねえリフィーナたん、ボクのチンポが恋しいんじゃない? キミの女神のオマンコ犯して精液バババ撃ち込んであげたチンポだよお? こんな近くにあるのにさあ、唾え込めなくてすっごくツラく思っっていない? ……ね、欲しいって言ってごらんよ、拓男様のオチンポお唾えしたいです、オマンコだけじゃなくお口にも突っ込んでほしいです、淫乱戦女神の私にご奉仕オシ

ャブリさせてくださいませ、つてねえ……♡」

自分を犯した人間の男——これほどまでに醜く下劣な憎むべき男にあまりの言葉を投げかけられ、リフィーナは恥辱と絶望に悶え泣きそうになる。しかし健気にも最後の矜持を振り絞るかのようにキッと拓男を睨みつけ、激しい言葉で彼を罵る。

「ふっ、ふざけないでッ——誰が、誰がそんなことっ、そんな穢らわしいことをっ——!! 私は、私は戦女神、ヴァルキューリアっ——下劣なあなたたちなどに屈しはしないっ、たとえ、どんなにこの身を穢されようっ……聖なる志だけは、何者にも穢されることは絶対にないのっ——!!!」

その息を呑むような表情や、ゲームの声優そのものの声で発する必死の叫びこそ、拓男が見たがり聞きたがつていた望みどおりのものであることはリフィーナが知るよしもない。

拓男にとつてそれは、超お気に入り二次元エロ画像を——そして長年オナネタに使ってきたシチュエーションを、完璧に実写実体化したようなものだった。そして一方レネディアは、自分の尾の鞭を弄んで言う。

「あーら、やっど勇ましいところを見せてくれたみたいねえ……拓男さんに犯されたときはあんなアラレもない、気持ちよさそうな声を上げてたけれど——あたしも見せてもらってたくせいで、最後は自分から拓男さんに抱きついて

いったじゃない? まるで『もつと犯して』って叫んでるみたいだに聞こえただけ?」

「なっ——だ、誰がそんなっ……違う、絶対に違うううッ、そんなこと絶対にないっ、絶対そんなっ、でたらめなこと言わないでえッ——!!!」

「ふふっ、そんなこと言っただけで今の顔じゃ全然説得力ないわよ——だいた自分でもわかっているじゃない? 憶えてるじゃない? 恥ずかしい淫乱女みたいの色っぽい声で叫んでたの、自分の耳に残ってるでしょ?」

ああ、違う、違う違ううッ——!! リフィーナは目をきつく閉じ、体の中でそこだけは動かせる首を左右に振りたくり、女淫魔の言葉を必死に否定しようとする。

しかしレネディアの言うとおり、彼女はつきり憶えていた。脳裏に拓男の力によって、あの時の忌まわしい記憶がはつきり映し出されていた。

見も知らぬ薄暗い部屋で目覚めたとき、彼女の体はすでに拓男にさんざん舐められた後。下卑た醜い男の笑みが目の前にあり、生ぬるい口臭と鼻息を受け……

リフィーナは「な、何者なのっ——!! こは、こはどこののっ……!!?」と思わず叫び、彼をはねのけようとする。しかしそれはできなかつた。聖なる力は発動できず、腕の力もブヨブヨの男のそれに対抗できない。身を守る神聖金属の鎧さえいとも簡単に

剥ぎ取られ、人間などに見せてはならない乳房を露出させられてしまう。

それが自分に施された「設定」だとも知らず、リフィーナは驚愕と羞恥に身をよじりながらそれでも必死の抵抗を見せる。だがそれは、「タクオ」と名乗る男の興奮と陵辱の度をさらに高めることにしかならない。

「わ、私は犯されてっ——こんな人間に穢されて、女神の操を失ってっ……!!」

その後のことは、思い出すだけで身を引き裂かれる思いがする。しかし拓男の力により、強制的に頭の中で再生される。

泣き叫ぶ戦女神である自分は、人間の男に力で制圧された。

口づけを受け、舌を絡められ、吐き気を催す唾液を絶え間なく喉へ注ぎ込まれた。

その間にも防具はたやすくはだけられ、まだどの異性神にも触られたことのなかった体を荒々しく撫で回されては抱き締められ——そしてついに、怒張して透明な粘液を垂らす男の性器を、生まれて初めて見せつけられる。それは今、ギロチンにかけられた自分の目の前にあるのと同じもの——

「ああ、これにっ……これに私は貫かれっ——お、犯されて、あんなに叫んでしまっ……!!」

真に愛する者のみに許すべき行為を抵抗むなしく強要される。秘部を肉棒で貫かれ、目を見開き口を開いて絶叫

する自分の姿を、リフィーナは力によって見せられていた。

そして響く——犯される自分の発する恥ずかしい声が。得体の知れない「気持ちよさ」としか言いようのない感覚に全身を蝕まれ、揺さぶられ、まるで悦んでもいいるかのようにさえ聞こえる、あの信じられない自分の声が。

「ねえ、レネディアさんの言うとおりじゃない？ キミの顔、何だかちよつと蕩けてきてるよ？ 顔とカラダは正直だよねえ——ボクに処女喪失させられたことそんなに思い出に残ってるんだ？ 思い出したら欲しくてたまらなくなってくるんだよねえ？」

「バツ、バカなっ——バカなことを言わないでっ……!! そんなこと、あるわけないっ……戦女神の私に、そんなこと絶対あり得ないいいッ——!!」

そう叫びながら、リフィーナには別の感情が確かに芽生える。

この目の前のチンポが欲しい。唾えて頬張り、舐めしゃぶりたい。この男性に、人間の男のチンポにご奉仕したい——!!

「ど、どうしてっ、どうなってるの私の心っ……!! しっかり、しっかりしなさいリフィーナあつ——私は誇り高きヴァルキュリア、魔を討ち払う天界の騎士っ……!! 決して、負けてはいけないどんなことをされてもおッ……!!」

リフィーナには、美しくも忘れがたい記憶が甦る。

天を覆う飛翔魔獣の大群に仲間とともに立ち向かい、聖なる炎の宿る剣でそのほとんどを斬滅させ——

あどけない人間の少年少女を魔族から救い、その子たちをしっかりと抱き締め——

そしてその傍らには、尊敬する最愛の姉・エステルが在る。

しかしそれらの記憶を押し、眼前の男の性器の輪郭が巨大に鮮明に映り込んでいく。

「あああつ……いやあッ、チンポ、オチンポっ、オチンポおっ……!! なつ何をっ、私は何を思っ……!! い、いけないこんなことっ、こんな思っ……!!」

しかしリフィーナは自らに課せられた「設定」と、レネディアの鞭で注入されたおぞましい快感から逃れられない。それが穢れなき戦女神の心を穢し、容赦なく姦落へ向けて狂わせていく。

「ほらさあリフィーナさん、もう我慢できないってのはわかってるんだよ？ だからさっさとボクのチンポにフェラしなよ、卑しいマゾペットに堕ちちゃいなよ——やりやすいように鼻フック外してあげるからさあ♥」

「そうそうリフィーナ、アンタはもう拓男さんの奴隷なの、あたしたちのオモチャなの。おとなしく幸せになっちゃいなさいよ、犯されて感じるマゾ女神にはそういう態度がお似合いでしょ？」

「ああ、そんな、そんな嫌ああッ——でも気持ちがつ、私の気持ちおかしくなってるっ……!! こ、この者たちの言うとおおりつ、我慢できなくなってるうッ……!!」

リフィーナの心の中が掻き乱れる。戦女神にあるまじき下劣な言葉が脳裏に煌めき、大音量で響き渡る。

「オ、オチンポっ、オシヤブリーッ……!!」

リフィーナは少女らしい瞳に涙をたたえ、とうとう小さくそう叫ぶ。その瞬間激烈な羞恥に拘束の身を震わせるが、植え付けられた衝動には抗えない。

「ぐッ、ぐむううッ、ンぐンンッ——やつ、やああッ、こっこんなああッ……!!」

リフィーナはギロチン拘束のまま、拓男のペニスを「フェラチオ」する。腰をやや前にずらした拓男の、カビのような恥垢の貼りつく肉棒を喉奥に突っ込まれ——恥辱にまみれた心の叫びを全て聞かれているとも知らず、舌を動かしほとんど必死懸命に奉仕する。それを拒むこと、及びときおり拓男の顔を目で見上げ、まるで媚びるかのような表情を作らないでいることは、「設定上」決して許されないのだった。

「ひッ、い、いやああああッ……!! ああつでもお私いいッ……オシヤブリーッ、オシヤブリーッ、フェラしますうッ、一生懸命ご奉仕しますう——ッ……!!」



：知ってるか？  
この森は神様が  
住んでるんだとよ

おい！  
見てみる！

こりや随分  
でかい木だな  
いい材木に  
なりそうだ：

なっ…

なんだっ!?



森を荒らしたら  
パチが当たる  
らしいぜ…

くだらねえこと  
言わないで  
獲物取るだけ取って  
さっさと帰ろうぜ



神聖なる森に蔓延る  
男の色欲

人間たち…  
一体この森に  
何の用です

私はこの森の  
精霊ルビア…

本誌  
初登場!!

漫画

かみ田

汚された森  
The forest which was polluted

せ：精霊だどっ!?

あなたたち：  
ここがどういう場所か  
わかってるのですか？

ここは神の宿る森…  
この森自体が神といって  
良いでしょう

あなたたち  
無類の徒が  
踏み込んで  
良い場所では  
ありませんよ



すぐに出て行けば危害を  
加えはしません

即刻森から  
出て行きなさい

ただまあ…  
姉ちゃんの  
態度次第…かな？



なるほど…  
そいつあ悪かったな  
すぐ出て行くよ

分かって  
貰えましたか  
では…



へへ…こちら  
こんな辺境の森にまで来て  
溜まってるもんでね…

姉ちゃんが  
何者かは知らねえが  
手ぶらで帰るなら  
それなりのもん  
頂かねえとな…？

…なるほど  
そういう  
ことですか

良いでしょう  
好きにしなさい

こんなもので  
拘束せよとも  
私は逃げませんよ

精霊のわたしに  
こんな拘束など…

保険だよ…  
杖は預かって  
おくぜ？

それにしても…  
随分素直に  
従うんだな

それに…  
大地の子らであることは  
変わりません

…あなたたちの  
ような者は  
はじめてでは  
ありませんから

わたしは  
森の意思に  
従うだけ…

森は無意味な殺生を  
嫌います

へへ…そりゃ  
ありがたいことで

森の精霊のくせに  
随分エロイ乳  
してやがるぜ…

人間は…  
どうしてこのように  
性欲ばかり…



どうだ…人間に乳首  
もみ潰される感覚は…



…わたしに普通の  
女性のような反応を  
求めないことです



むしろそそるぜ  
そういう女が  
ヒイヒイ言うのが  
良いんだよ…

オラッ！  
ケツをこっちは  
向けろっ！





フン…  
そうだったな…  
じゃあ入れ  
させて貰うぜ



へへ…精霊のママ コッてのは  
さすがにはじめてだぜ!

くっ…おおっ  
挿入ったあつ!



こんな良い女  
こんな所に置いとくのは  
もったいねえなあっ♥

へへ…  
しばらく溜め込んでた  
からなあ…濃いのが  
たっぷり出るぜ…っ

…好きにしなさいと  
言ったはずですよ

濡れてねえから  
ちよっとばかり  
痛いかもしれないが…  
我慢しろよ?



森に入ってきた連中  
全員とハメてる  
ガバマンかと思ったら  
なかなか良い締り  
してるじゃねえか!

こりやとんだ  
収穫だぜ!



ふううっっ…  
まさか森でこんな  
良いマ●コに  
ありつけるとはなあ♥

くうっ…  
ザーメンが  
止まらねえぜ…



くっ…  
出さずっ…!



おっと…  
そんなに  
騒ぐなよ

!?  
いったい何をっ…  
放しなさい!



へへ…  
最後の一滴まで  
出してやったぜ

も…もう満足  
しましたか

ああ…  
満足したよ  
だが…

アホ

コリッ



ジャスティスVあやうし!?  
怪人ポップオマニアの手に落ちたピンク!  
ピンク!

聖色戦隊

# ジャスティス

ジャスティスピンク危機一髪! そして新たなる仲間?

小説 NOVEL 百花乱太郎 挿絵 ILLUSTRATION なるみ 鳴海

「失踪事件です。不特定多数者の行方不明事件が再び起きてしまいました」

ビルの大型モニターで、最近多発する不穏なニュースが流れている。しかし駅前通りでは、それを気にして足を止める者はいない。サラリーマンたちは携帯を片手に慌ただしく行き交い、学校帰りの女子高生たちは、楽しみに声を弾ませている。家族連れは仲睦まじく買い物を楽しんで、しつこくナンパしている軽薄そうな男も、当然、ニュースに関心を示さなかった。

そんな普段通りの平和な繁華街で、突如、甲高い悲鳴が響き渡った。

「キャー——!!」

悲鳴は次々に連鎖し、人々は蜘蛛の子を散らしたように逃げ惑う。

「ポッポッ！ 地獄行きの列車、間もなく発車しま〜す♪」

そこには見るからに異形の怪人がいた。列車を何両も連結させたような触手が逃げ遅れた老人を捕らえている。

「駅員さん、お乗り遅れがないように手伝ってあげてください〜い」

その怪人の呼びかけに、全身が真っ黒な人型戦闘員が現れて、無差別に一般人を襲い始める。そのときだった。

「そこまでだ、怪人ポッポマニア！」

光線が怪人へと突き刺さり、触手が切断される。その隙に赤いスーツ姿の戦士が現れ、拘束されていた老人を助け出した。他のところでも、別の色に身を包んだ正義の戦士が登場する。計画を邪魔された怪人は地団駄を踏んだ。

「現れたな〜。ジャスティスV！」

緑の戦士が颯爽と女子高生をピンチから救えば、桃色の戦士は家族連れを助け出し、泣いている子供の頭を撫でて優しくなぐさめる。そんな中、

「こつちこつち。ここは安全だつて」

ナンパに動んでいた男が、どさくさに紛れて女性をラブホテルに連れ込もうとしていた。しかしその寸前で悪の戦闘員に捕まり、今度は都合よくヒーローたちに助けを求める。

「この人、助ける必要あるのかな？」

黄色の戦士が呆れて見ていると、「何してるの」と桃色の戦士に諭されて、ようやく救いの手を差し伸べた。

「助かった〜。：おっ♪ ナイススタイル。お礼に今度、お茶しようぜ」

男は桃色の戦士をまじまじと観察すると、にやけ面でウインクをした。

「懲りてねえ。それになんかムカつく」

「イエロー。そんなのに構ってるな」

ここまで黙々と敵を倒してきた青の戦士が口を開く。その後ろには一番多く、敵戦闘員のむくろが転がっていた。

「あとは親玉だけだ。みんな、行くぞ」

そこで赤い戦士が号令をかける。多勢に無勢。形勢が不利になり、怪人は思わず怯む。しかし、

「チッ……。命令してんじやねえよ」

青の戦士が協力しなかった。

「おい、ブルー。なんで従わないんだ」

「なんでお前が仕切つてんだよ。俺はお前を、リーダーなんて認めてねえぞ」

戦士たちの間で内輪揉めが始まった。

「今まで俺の指示で、危機を乗り越えてきたじゃないか。何が不満なんだ」

「全部お前の手柄みたいじゃないやがって。それがムカつくんだよ！」

「ちよつと二人とも、何揉めてるの」

桃色の戦士が間に入つても揉め事は収まらない。その様子を見て怪人はほくそ笑んだ。先程切断された触手がスルスルと動き出し、誰にも気づかれな

いままピンクのスーツに張りつく。

「みんな！ アイツが逃げちやう」

怪人の逃亡に気づいた黄色の戦士が声を上げる。しかし遅かった。

「危険ですのでお下がってください」

怪人のカメラのような頭部から、眩しい閃光が放たれた。ヒーローたちの視覚は奪われ、その間に怪人は、忽然と姿を消してしまった。

ジャスティスVの基地では、男たちの間で未だ険悪な空気が流れていた。

「ブルー。お前のせいだぞ」

「……。クッ……」

男前の顔を歪め、押し黙る衛。

「確かに衛がチームワークを乱したせいで、怪人を逃してしまいました」

緑の戦士、実友が、クイツと眼鏡の端を持ち上げながら口を挟んだ。

「ですが堅護、あなたも人のことは言

えませんが。リーダーシップと聞かえはいいですが、まるで誰かにいい格好をしているようで、確かに不快でした」

「なっ！ お前だつて葵のことが好き

なくせに。俺は知ってるぞ」

「それは否定しません。ですが私は、戦闘に私情は持ち込みません」

「そうそう。二人ともピンクの前で格好つけすぎなんだよ。でもこれで両者共倒れかな〜。葵、すんごい怒ってたもん。こ〜んなにして」

黄色の戦士、悠は、無邪気な仕草で両目を吊り上げた。それを見て二人はシユンとする。変身姿を解いた風間葵は、「反省しなさい」と二人を叱責したのだ。普段優しい目元は、心なしか吊り上がり、本来はおつとりとした口調が、刺さるように厳しかった。

「はあ……」

二人が溜息をついたそのとき、突如基地のモニターがジャックされた。

『ピンポン♪ 人質のお知らせです』

画像にはポッポマニアが映し出される。そしてその背後にはなんと、ジャスティスピンクこと風間葵が、惨たらしくYの字に張りつけられていた。

『関係者の方はお早く迎えに来てください。さもないと……』

怪人は列車を連結させたような触手を、葵の体に鞭のように打ちつける。

『みんな、これは罠：アアアア』

『ピシャーン！ と打擲音が響き、葵の口から悲鳴があがった。』

『葵っ！』

『へ、平気よ。私は大丈夫だから』

葵は気丈に振る舞い、瞳に強い光を宿して勇敢に敵を見据える。すると怪人は、容赦なく触手を振るつた。

『痛ッ！ ンッ！ ウウ、……ク』



連続で触手を打たれ、桃色のスーツがズスタにされていく。裂け目からは、初雪のような肌が露わになった。

「こんなの大したことないわ」

切りそろえられた幼げな前髪の下、その表情は凛々しさを失わない。

「葵！ すぐに助けに行く」

「私のことは心配しないで。敵を倒すことに集中して。地球の…」

葵の言葉をすべて伝えないうちに、敵からの画像は途切れた。

「みんな、絶対に葵を助けるぞ！」

堅護が声を上げると、衛も続いた。

「ああ。大切な仲間だもんな」

「そうそう。恋愛は奴らを倒してからでもできるでしょ。でもそのときは僕も負けないけどね」

不敵に語る悠に、堅護と衛は嘩然とする。しかしそれも束の間、吹っ切れた顔をした男たちは、ものすごい勢いで飛び出していった。

ポッポマニアのアジトでは、拘束された葵にさらなる危機が迫っていた。

「さーて、拷問の続きですよー」

余裕綽々にいたぶる怪人に対し、葵は精一杯、正義感を奮い立たせる。

「あなたになんか、絶対負けない」

「痛みには強いようだけど、その強がり、いつまで続くのかなー」

先程の拷問とは違って変わり、列車のような触手が、葵の細い足首にそつと下ろされる。そして「始発列車、発車しまーす」という号令とともに、ゆ

っくり動き始めた。

「本列車は各部位停車、女体路線です。途中、数々の名所がございます。外の景色と一緒に楽しんでください」

列車のような触手には、特殊な力があるようだった。強靱なヒロインスーツをいとも容易く裂いていく。

「次は太もも、太もも、細いぐせになかなかいい肉付きをしています。ソフソフ。しっとり吸いついて危険なため、ゆっくり走りまーす」

触手が太ももをじっくりと上ってくると、ビリッ、ビリッ、とスカートの部分が破られる。車内アナウンスのような真面目ぶった口調だが、やっていることは下衆そのものだった。

「ヒイ……ッ！」

これまで気丈に耐え続けてきた葵だったが、太ももの内側を撫でられ、思わず短い悲鳴をあげた。

さらに太ももを付け根まで暴いてきた触手は、純白のパンティーを先端に引っかけると、張力に負けず突き進む。

「そんなっ……まさかっ！」

プツッ！ と音がすると、葵は顔を背けて、長い黒髪を震わせた。

「だいぶ堪えてきましたね。でもまだまだこれから。おっ、と。おへその溝に脱輪してしまいました。縦長の可愛

いおへそです。車輪を戻すのに時間がかかります。少々、お待ちください」

腹部を何度も往復して這い回る触手に、葵は辛そうに顔を歪めた。

「大変お待たせいたしました。運転再

開しまーす。次は双子峠ー」

声音が一段といやらしく変わる。

「シュッポ、シュッポ、ソフソフ」

陰湿な調子で胸の谷間を進み、プツンツ、とブラジャーが切断される。それから触手は、スーツを払い除けながら乳白色の肉丘を這いだした。

「ポッポー！ 細いのに意外な量感。列車は急勾配を登りまーす。地盤が軟弱なため、ぶるんぶるんと揺れが予想されます。お気をつけください」

「そ、それ以上は……もう……」

「懇願ですか？ でも走り出した列車は、そう簡単には止まらないのです」

沈み込む感触を堪能しながら、触手は胸の頂上付近まで登り詰める。すると「ああ」という絶望的な吐息が葵の口から漏れ、ついに頼りなくも覆っていたがスーツ片がハラリと脇に落ちた。

「うっひょー！ 山頂は見事に桜色の絶景でございます。初々しい色合いもありながら、ピンと勃つた小豆ちゃん

は熟れ始めの美味を想像させます」

調子づく怪人。しかし興をそぐように、葵が凜とした声で言い放った。

「好きなだけいたぶればいいわ。私の心はこんなことでは負けない！」

一度は折れかけた葵だったが、正義の心を持ち直す。あどけない顔立ちで簡単に壊れそうなほど華奢な体をして

いるのに、地球を守るという使命感を誰よりも強く抱いていた。

「グヌヌ。生意気な女だ。しかしたぶりがいが増しただけのこと。グへへ

へ。たっぶりよがり泣かせてやる」

そう告げると、怪人の股間でニユツ、と剛棒がそり立つ。そしてポッポマニアは葵の股を割ると、僅かに残っていた下着を払い除けた。

「ウッポッポ。初そうに見えても、しっかりエロい陰毛を生やしてー」

怪人はいやらしく目を細めると、剛棒の先端を女性の秘密の園へと向けた。葵は無念そうに目を瞑る。そのときだった。ポッポマニアが素早く飛び退き、そこへ鋭い刃が突き刺さった。

「そこまでだ、ポッポマニア」

間一髪、ヒーローたちが駆けつけた。「なに、まさかあの罫をかい潜ってくるとは。しかしだいたいダメージを負ったと見える。そんなお前たちなど……」

「ポッポマニア！ 許さない！」

怪人の言葉を遮って、ジャスティスピンクが怒りの声をあげる。

「なっ！ どうやって抜け出した？」

その答えは拘束台にあった。ヒーローたちの刃が拘束具を破壊していた。

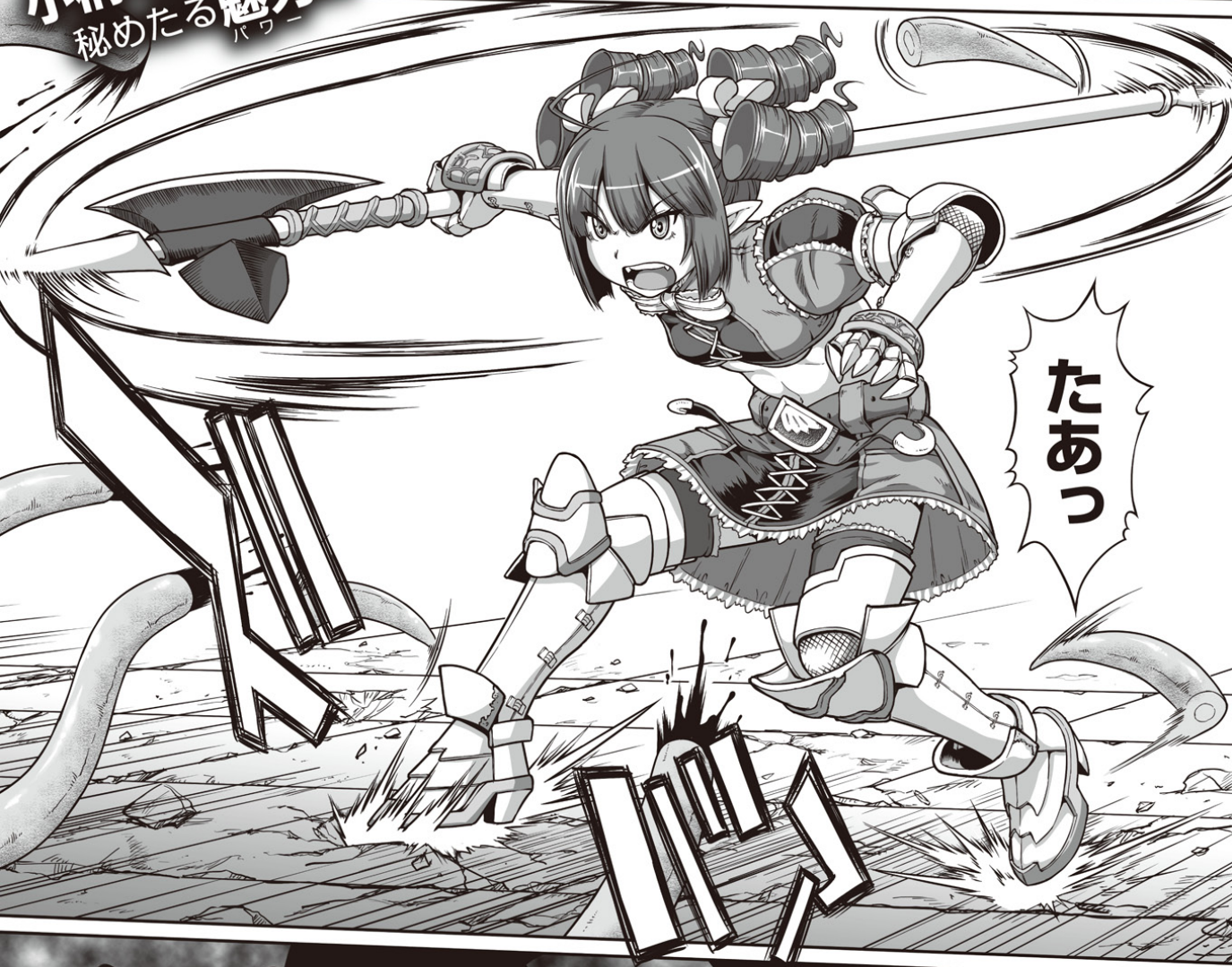
「不良車両を切り離しまーす。お客様はお乗り替えください」

葵が正義のブレードを怪人の股間へ突き刺す。すると棒状のものが切断され、明らかに怪人が弱体化した。

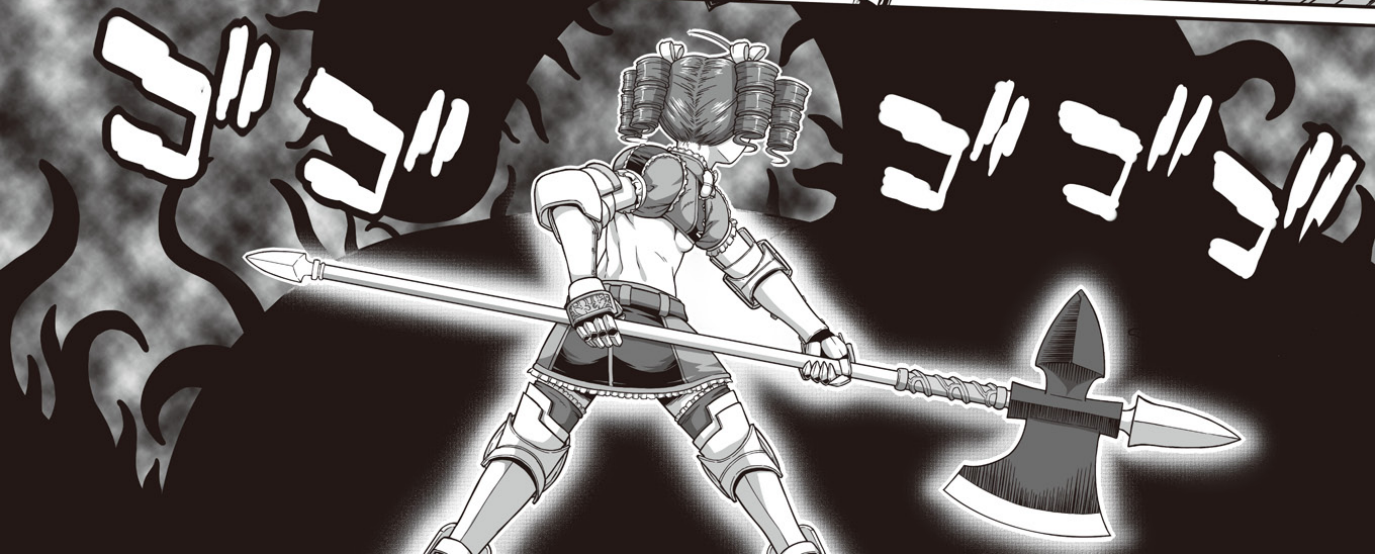
「今よ、みんな。力を合わせてー」

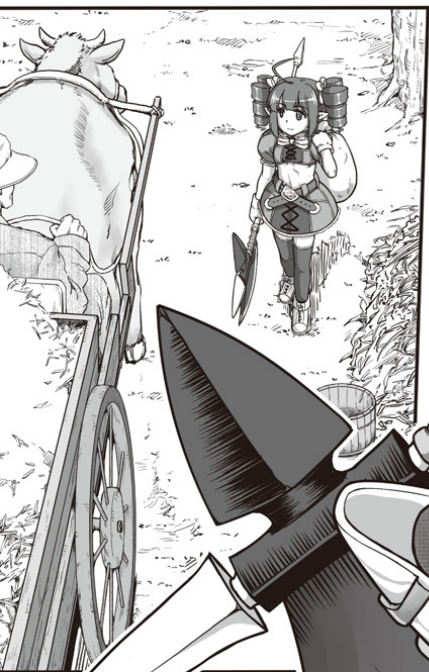
「お、おう」

小柄な肢体に  
秘めたる魅力!!  
パワー



たあっ



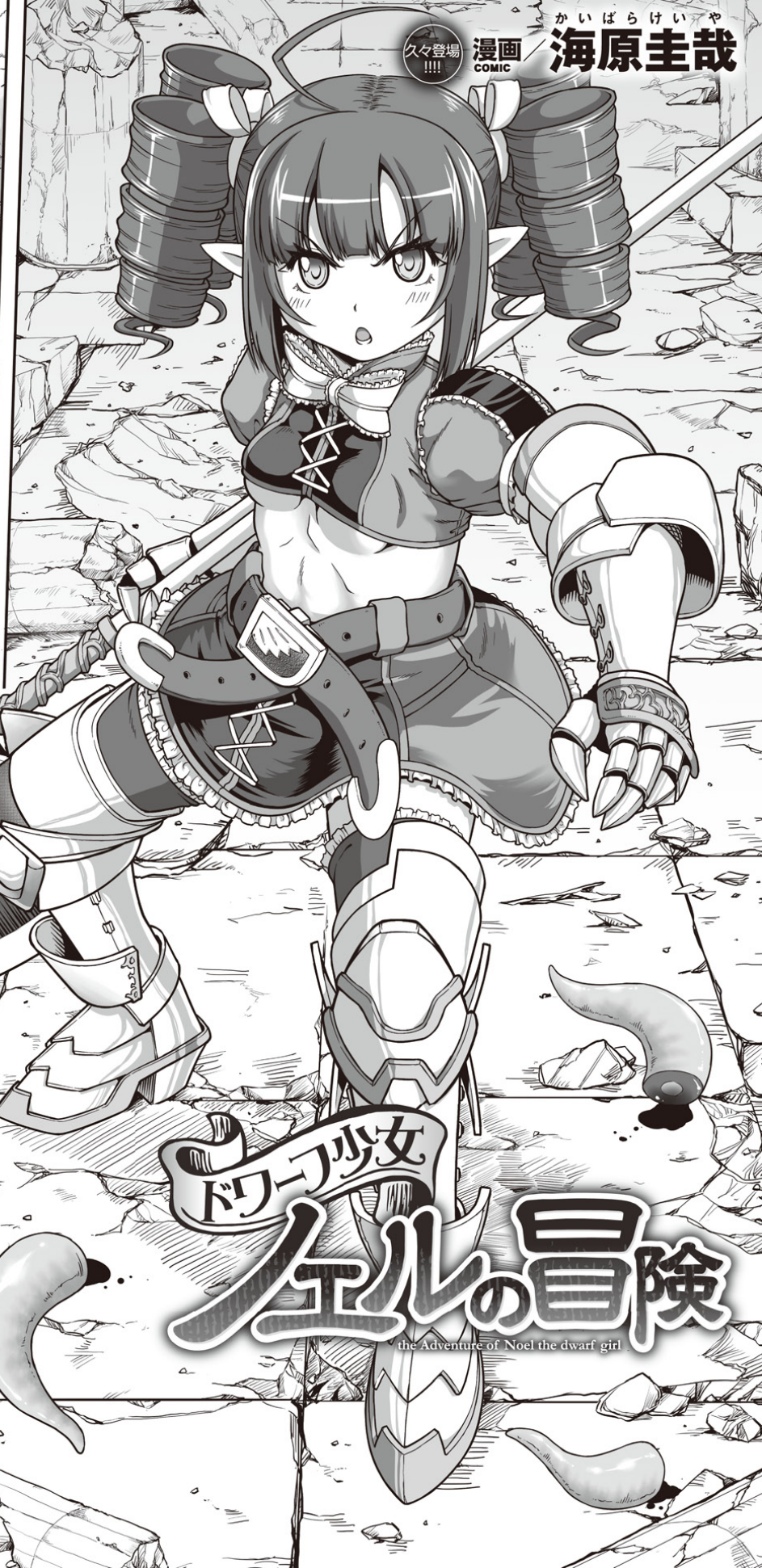


生贄の洞窟?

久々登場  
!!!!

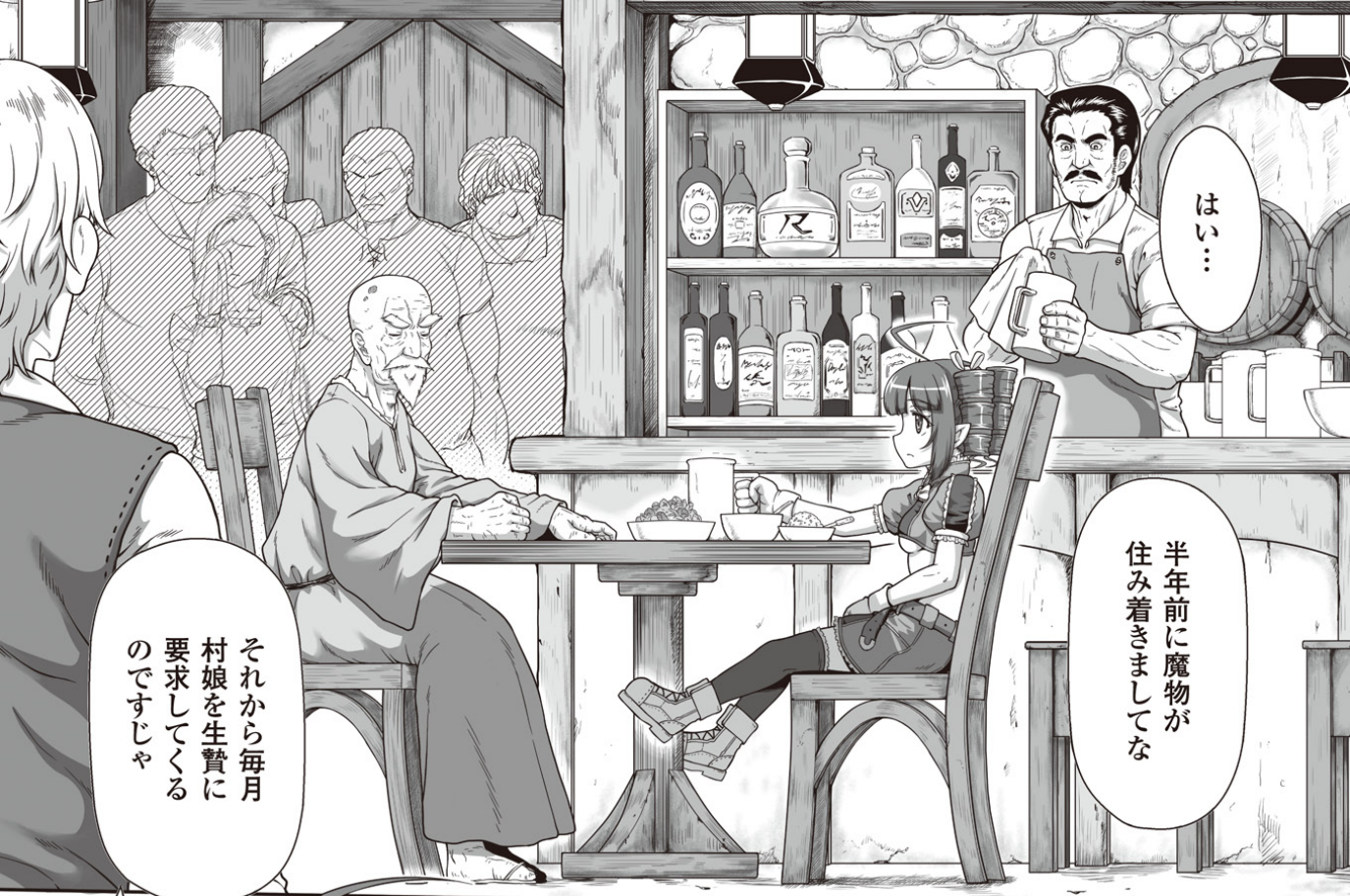
漫画  
COMIC

かいばけいや  
海原圭哉



# ドリフ少女 左の冒険

the Adventure of Noel the dwarf girl



はい…

半年前に魔物が  
住み着きましたな

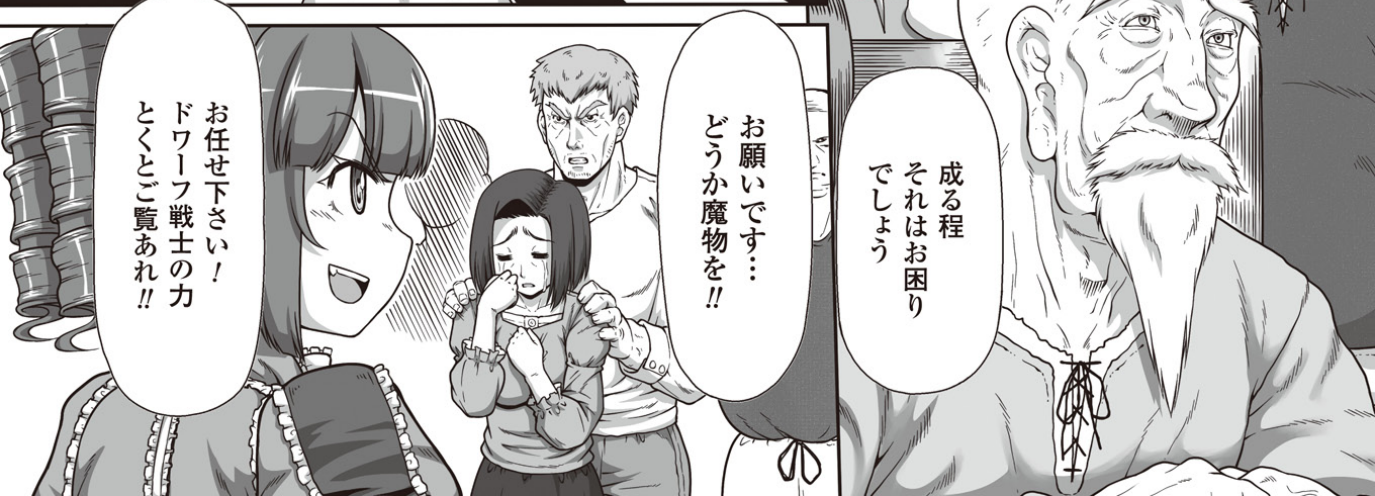
それから毎月  
村娘を生贄に  
要求してくる  
のですじゃ



おおッ

許せません！  
私が退治して  
やります！！

お役人様は何も  
してくれませぬし  
このままでは…



お任せ下さい！  
ドワーフ戦士の力  
とくにご覧あれ！！

お願いです…  
どうか魔物を！！

成る程  
それはお困り  
でしょう



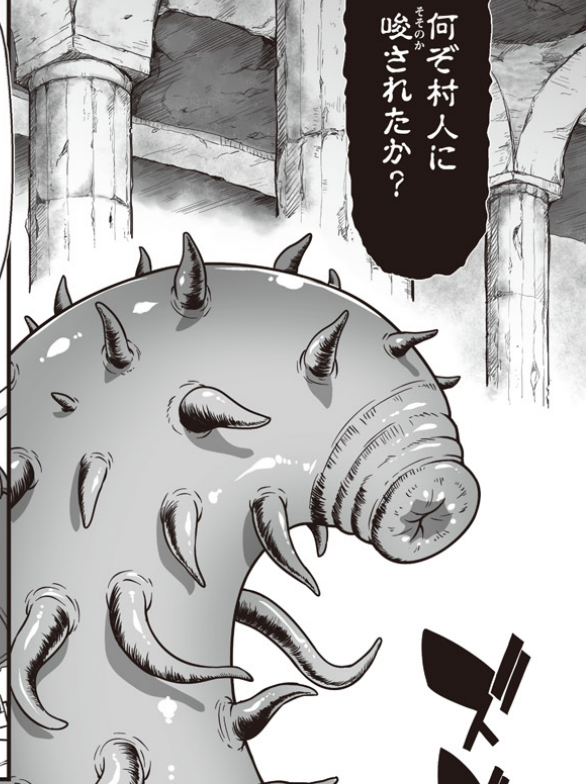
ア  
ア  
ア

何ぞ村人に  
喰まわさされたか？



触手を斬っても  
きりがない  
ですわね…

なんとか  
本体を  
叩かないと



ア  
ア  
ア



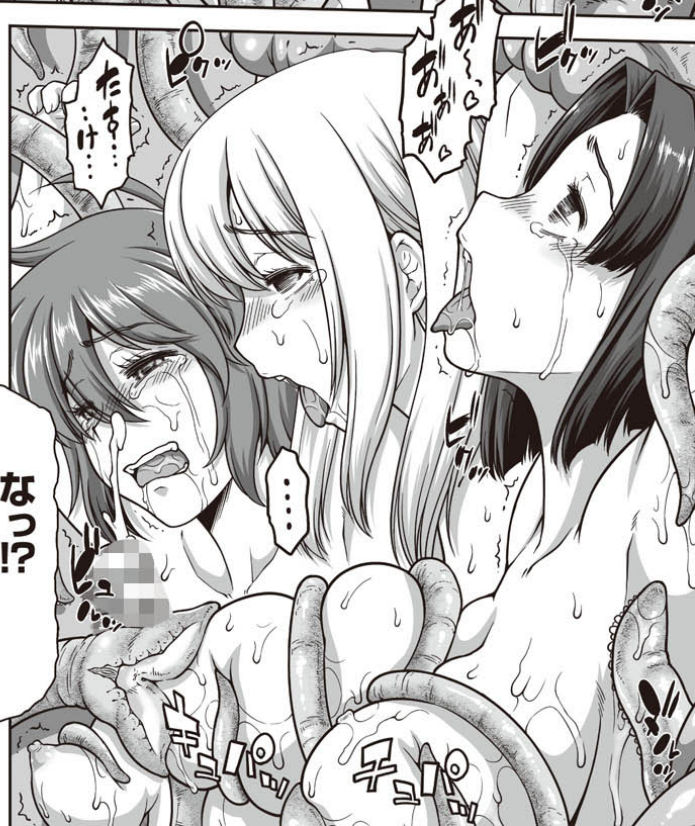
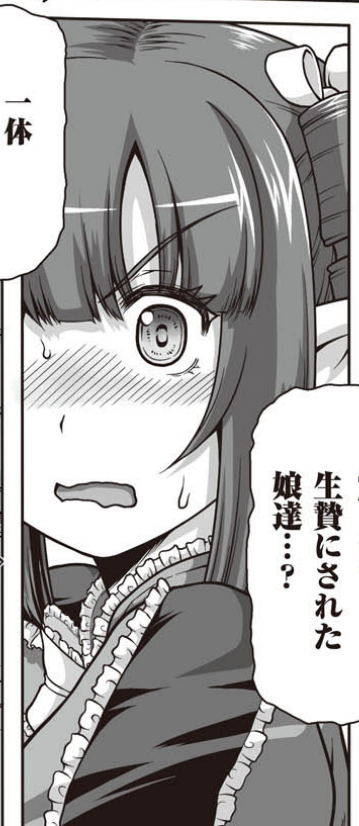
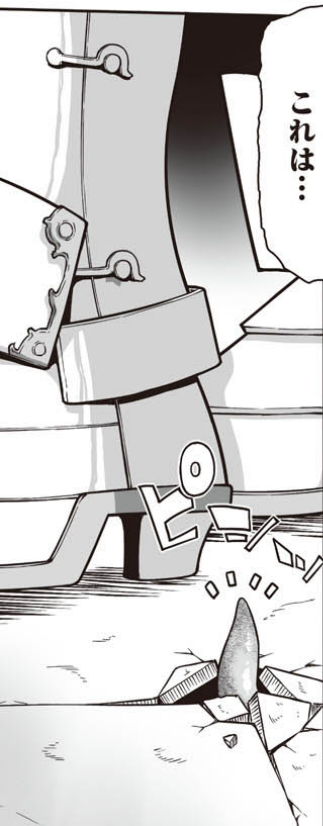
ワシを斃たおす  
ことなど  
できるものか

貴様もご奴達と  
同じように  
取り込んでくれる



自ら餌食に  
なりにくるとは  
愚かな奴よ





# 罪と罰のソライユ

～女処刑执行官 恥辱の逆処刑～

小説 / kurona  
NOVEL

挿絵 / あまさひかえ  
ILLUSTRATION

冷静沈着な女処刑人を狙う罠  
屈辱の公開逆処刑が始まる!!



豚の治世。

後世の史家たちがそう呼び、唾棄してはばからない暗黒の時代。王都にそびえる巨大な断頭台はその象徴だった。  
「あつ……ああつイヤツ！ 助けて、ママ！ あつ……あつ……あつ……！」  
「お慈悲を……どこ、どうか娘だけは……あ、あ……んあつ！」

青空に響き渡る喘ぎ混じりの悲鳴。断頭台に拘束された母娘が、処刑人に取り囲まれて鬨りものにされていた。

今、高い壁に囲まれた処刑場の広場には観衆はいない。一度に数人の首を撥ねる事の出来る幅広の拘束板に、母娘の体は互い違いとなるように固定され、母には娘の、娘には母の、這いつくばり、粗末な囚人服をはだけて突き上げさせられた白い尻と、男たちの挿入による蹂躪が見せつけられている。

「思い知ったか、自分たちの罪を……」  
「反省しているなら感じてみせろ！」  
責めたてる四、五人の男たちは皆

フード付きの処刑人の服を身に着けていたが、その下半身はむき出しだった。娘も母親も、同じ栗色の髪を上流階級の女がするように品良く編み上げ、女らしい成熟した肉づきの母は、喘ぐ声もどこか艶がある。それに対して、まだあどけなきの残る娘のほうは、ほつそりとした両脚の間の肉棒の出入りが痛々しい。とはいえ、共に優美なしなを作った体つき。悲鳴と涙で歪めてはいても、その顔立ちには平民とは思えぬ気品があった。

「いったい彼女たちがどんな罪を犯したというのか？」

「食うに困って強盗殺人とは、それが誇りある良家の子女のする事か！」  
「わつ……私どもはそんな大それたことなどしてはおりません！」

「濡れ衣です！ そのようなこと！」  
目に涙をためての必死の訴えだったが、処刑人たちに聞く耳はなかった。

「どうやら、反省が足りねえようだな」  
娘を犯していた男が肉棒を引き抜き、湯気を立てているそれを、すぐ隣の母親の顔の前に突き出す。

「おらつ……しゃぶれつ……テメエの生んだ淫売が垂らしたマン汁を、その口で拭うんだよ！」  
母に突き入れられていた肉棒も、娘の前に差し出される。

「お前はこつちのチンポだ！ 大好きなママの味だぜ、嬉しいだろ？」  
「いやつ……いやあああつ！」  
娘が悲鳴を上げる。

「オラツ！ 聞き分けの悪いお前の娘に手本を見せてやれよ！」  
母親の前に立つ処刑人が、母の鼻をつまんで手際よくその形良い唇の奥へと肉棒をねじり込む。

「ううつ……おふうぐうううつ！」  
「お願い、ママに酷いことしないで！」  
「ごちゃごちゃやるせえつ！」

娘の前の処刑人がそのまま肉棒をねじ込んで泣きわめく口を塞いだ。  
「お……ぶ……ほつ……ほぶつ……」  
「空いた穴はもらったぜ！」

残る処刑人たちが我先に濡れをぼつ肉襲を掻きあげようと飛びつく。

「こんなにグショ濡れにしやがって。これじゃあ懲らしめになんねえぜ！」  
「まったくだ！ だらしなくヒクついてんじゃねえか！ ケケケケケッ！」  
勝手な事を言いながら、めいめいがズブリズブリと肉の処刑棒を突き刺す。

「~~~~~ッ！」  
口を塞がれたままの声にならぬ悲鳴。

「反省してんなら、腰ぐらい振りやがれ！ 親子で動きを合わせろよ！」  
「フヒツ……オッパイもな！ せつかくお揃いのデカ乳なんだからよ！」

「ンンツ！ んあつ……お慈悲を！」  
「どうか……ンヒイイツ！ アアッ」  
いつ止むとも知れぬその饗宴は、しかし突然終わりを告げることになった。

シュルルルッ……カシーン！  
風を切る音と共に飛んできた、いくつもの手錠のような鉄製の輪が男たちの勃起の根元にはまり、拘束する。

「うわわつ……」  
それは、ただの手錠ではなかった。小さな刃が取りつけられた携帯式ギロチン錠。輪に繋がる鎖の先のスイッチひとつで捕えた物を切断できる、この特別性のギロチン錠を操ることができるとは、王都の処刑人の中で只一人。

「し……執行長！」  
「ソ……ソライユ様つ！」

広場の中央には、ギロチン錠の鎖を束ね持つ女の姿があった。  
その背に翻る漆黒のマント、黒衣の

下に隠せぬ豊富なバストの隆起、膝丈のロングブーツの中に呑み込まれる、すらりとした長い脚。目深に被っていたフードが風に払われると、見事なブルンドが渦を巻いて舞い広がった。

肉感的な唇は厳しく閉ざされ、頬は引き締められたまま。長い睫毛の下に陰るその伶俐な眼差しが、静かな怒りを湛えて細められる。

「貴様ら……何をしている」  
王都にその人ありと名高き、美貌の女処刑執行長、ソライユ・ペルソヌその人だった。

「処刑の執行日は今日ではなかったはずだぞ……その母娘を放してやれ」  
険しい声に、男たちがうろたえる。

「これは……その……教育を……教育を施しておたのでありましてっ！」  
「こやつらに自分の犯した罪を、身をもって体験させることで、反省を……」

明らかにでまかせの見苦しい言い訳は、ソライユのひとつ睨みで途切れる。

「さつさとしろ。さもないと……」  
ソライユが手にしたギロチン錠の鎖を、じやらりと鳴らしてみせる。

「ヒイイイイイツ！」  
男たちは情けない悲鳴を上げて即座に母娘を解放し、それを見届けてソライユがギロチン錠を解除すると、皆

一目散に駆け去っていった。

美貌の処刑執行長は、断頭台に上ると、労わるように母娘を助け起こした。

「お前たちに着せられていた強盗殺人の罪だが、私が独自に調査した所、他

に犯人がいるとこがわかった。したがってお前たちは無実だ。釈放しよう」「ああっ……ありがとうござます！」

「このご恩は一生忘れません……」感謝の涙を流して抱きつく母娘をソライユもまた優しく抱き返し、落ち着かせるように「もう大丈夫だ……」と繰り返してやるのだった。

しかし、ソライユにはわかっていなかった。彼女たちを始め、無辜の罪の犠牲者は後を絶たない。腐敗した貴族たちの権力を巡る暗闘。弱者を陥れ、私欲のための手段を選ばぬ謀略の連鎖。

その腐った病巣を取り除く事、それこそが人々を救う唯一の手段なのだ。

※ ※ ※

「———そうか、そのような事が」

ソライユの報告に年若い美貌を愛いに陰らせた枢機卿は、腐敗貴族の一派と争うこの国の重鎮である。

「腐敗貴族どもと通じた処刑人たちの無法、もはや看過できぬまでに……」

枢機卿の前で影のようにして跪き、唇を噛むソライユ。枢機卿は法衣を翻すとその手をとった。

「頼りにしているぞ、ソライユ……辛いい想いもあるが、民を守る為にはお前の力が必要なのだ」

「勿体ないお言葉です。陛下……」ソライユは目の前のこの美青年の中に一縷の希望を見出していた。

前王の血を引く者として王位継承の

争いに巻き込まれ、命を狙われた幼い彼女を救出し、新しい名を与えて匿い育ててくれたのが彼だった。

処刑人という身分を与えられたのは、出自を隠すため。

「どうか陛下のお心は王都の……いえ、この国の市民のためにお痛め下さい」伸ばされた枢機卿の手に忠誠を込めて口づけをする。

彼と共にこの国を変える。暗黒の時代を終わらせ、正義と公正を世にもたらず。それがソライユの理想だった。

そんな彼女を優しい眼差しで見つめ返し、枢機卿が静かに口を開いた。

「ソライユ……また、君にお願いしなくてはならない事があるのだが」

※ ※ ※

「真夜中の断頭台———近頃、王都ではそのように呼ばれる奇怪な暗殺事件が立て続けに起こっていた。

標的は腐敗貴族ばかり。その私邸で堂々と為される犯行。現場には切り離された犠牲者の首と胴が残される。

今宵、腐敗貴族一派の元締めである国務大臣の邸宅に集められたその取り巻きたちの話題も、自然とこの事件に

関する事ばかりとなっていた。「明らかに我らを狙い討ちしとる！」

「闇の処刑人などと呼ばれて民衆の支持があるのが気に食わん！」

「一体何者の仕業だというのだ……」

「ただでさえ、最近是我らに対する風当たりが厳しいというのに」

「ええい、何もかも枢機卿のせいだ。あの若僧、ハナ垂れと思つて軽く見ておつたらいつの間にか……」

話は彼らと対立する政敵、枢機卿に対する不満に移る。

「それに、あのナントカという女処刑執行官、枢機卿の後ろ盾をいいことにやりすぎておるそうではないか……」

「金を握らせようがないではないか」これでは逃れようがないではないか

「このまま枢機卿に司法を完全に押さえられた暁には、我らは……」

枢機卿との暗闘は、処刑合戦の様相を呈していた。汚職を暴き、次々と処断する枢機卿。捕えられた仲間を賄賂を使つて救い出し、或いは邪魔者に濡れ衣を着せて葬る彼ら。そのバランスは、ソライユの厳格な処刑執行によつて枢機卿優位となりつつあったのだ。

「まあ任せておけ。いずれ……な」

そのようにして密談を終え、仲間達を見送つた大臣が寝室へと向かうと、そこでは異変が起きていた。

ベッドを囲むケープが夜風にはためいている。そして……

開け放たれた窓。カーテンと共に金色の髪をなびかせて立つ女の姿。

「き……貴様は……！」

それはつい先ほどまで議論の遡上に上げていたばかりの者———処刑執行長ソライユ・ペルソーヌその人だった。だが、処刑場で見かける彼女とは違つた、異様な出で立ちをしている。

フードは彼らと美しき素顔を晒しているばかりか、その素肌の多くを露出した、局部だけを覆う革コルセット。長い手袋とロングブーツには刺々とした悪魔的装飾が施され、地獄の使者かと思ふうばかり。

その怖ろしくも妖艶な装いの彼女が氷のような表情で厳かに口を開いた。

「罪ありて、罰なき者よ。処刑の刻が来た……我が刃の血の染みとなれ！」

「ヒッ……ひええええええっ！」

怯え、転がるように逃げ出す大臣に、ソライユはひとつ飛びに追いつくと、手にした鎖を振るつた。先端に奇怪なパーツをつけた幾条もの鉄鎖が宙を舞い、互いに組み合わさる。

ガアッシー———ン！

一瞬で組み上がった人間の身長ほどの小型断頭台に拘束される大臣。

「なんじゃこれはああああっ！」

「ギロチンだ。知らぬとは言わさぬ。貴様らが無辜の民の血を吸わせ続けてきた処刑具だ！ 私利私欲に溺れた、その報いを……今、受けよ！」

「ま、待つて……」

「待つて思うか？」

躊躇うことなくソライユが鎖を引く。留め金が外れてギロチンの刃が落ちる。しかし、それはガキンという鈍い音と共に止まってしまった。

「なにっ？」

「たわけが……ワシは、待つてくれ、と言おうとしたのではないわ……！」

ガウンの下に隠されていた大臣の首



美人捜査官を襲う仮想領域の悦楽地獄!!!



サイバー捜査官

# リサ

淫獄の  
仮想領域

小説  
NOVEL

しまづろく  
島津六

挿絵  
ILLUSTRATION

ubanis

葉月リサは仮想領域の捜査を開始すべく、現実世界から意識を閉ざした。両目を覆うアクセスデバイスを通じて、サイバネットワーク内に広がる仮想領域へと精神を没入させる。

「ふうう……」

大きく深呼吸をするたびに四肢の末端から少しずつ自分の存在が仮想領域に溶け込むのを感じる。素肌に直接着けたボディスーツの感覚増幅機能が仮想領域内の感覚を鮮明に伝えてくれた。シリコンとマイクロファイバーが構成する極薄のボディスーツは彼女の肢体にピタリと張りつき、美麗なボディラインをくっきりと表出させていた。優美なカーブを描き鎖骨へと流れ落ちる首筋。重力に反するように前へ突き出した豊かな乳房と、その先端に生まれた乳首の突起。幾何学的な陰影を描く腹筋の起伏と縦長にくぼんだ可愛らしいヘソ。リサの肉体の総てがグレーの薄布の向こうで息づいている。

リサの捜査に立ち会っているサーバ管理者の中年男性は、あまりにセクシヤルな彼女の出で立ちにぼかんと口を開けていた。彼はリサが意識を完全に仮想領域に飛ばしたことに気づくと、遠慮なく視察を開始した。

仮想領域で得た感覚は彼女の肉体にフィードバックされる。リサが仮想領域内で何かを感じるたびに、女体の中でも有数の感覚器官である乳首がムリムリと盛り上がる。たわなに実ったリサの豊乳とその先端に咲く大輪の乳首

を凝視するサーバ管理者の股間もまた恥ずかしいほどに勃起していた。

\*

「完全スキヤンをしましたが、ご心配されていたような違法プログラムはありません。ご安心ください」

リサはアクセスデバイスを外しながら端的に告げた。ゴツい装備の下から彼女の顔が完全に現れる。

キリリと斜め上方を目指す眉。アーモンド型につり上がった勝気そうな眼。細く跳ね上がる鼻梁。くつきりと凛々しく整った顔立ちを締めるように引き結ばれた唇は柔らかな桃色の輝きを抱えている。

クールな容貌を一瞬だけ緩めて大きく息を吐いたリサは椅子から立った。百七センチの高身長はヒールの高さでさらに十センチ底上げされている。その身長を半分近くを占める彼女の美脚は折れそうに細く締まった足首から、なだらかな起伏を描きつつむつちりと媚脂を滲えた太腿へと繋がっている。両足の付け根は中心で膨らみ、縦に一筋の陰影を刻んでいた。重力に反するようにツンと張りながらも、彼女が身じろぎするたびにぷりぷりと驕慢に揺れるヒップが管理者を赤面させる。

「では失礼します。もし異常が確認された際は遠慮なくご連絡ください」

リサは見た目に違わぬクールな口調で中年男に告げる。彼の返事を待たずにコートを羽織ると、彼女はサーバールームを立ち去った。

(……ただ、一瞬だけザラつくような感覚がした気がするのよね……)

\*

爛熟期を迎えたネット社会ではパーソナルセックスやドラッグプログラム

の進歩が激化の一途を辿っていた。現実での行動すら制御するプログラムも一部では開発されているという。

インターネット内に広がる仮想領域におけるサイバー犯罪捜査課の捜査官 葉月リサはその一人だった。

「先輩、お疲れ様です。今回の現場はどうでした？」

捜査課のオフィスに戻ったリサに、彼女にとって課内で唯一の後輩である板谷ジュンが声をかける。

「イタズラが取り越し苦労ね。何もなかったわよ」

「ま、多少のトラブルなら一人でなんとかするもんな。リサちゃんは！」

体育会系そのものといった容姿の筋肉質の男が笑いながら言う。リサの先輩で四十代のベテラン捜査員である。

「僕達の業務は葉月さんのサポートだけでも大丈夫そうですね」

そう続けたのはロマンスグレーといった表現が似合う五十代の男である。

彼もまたリサの先輩で、インテリ然とした物腰が印象的だった。

「葉月君、お疲れ様。キリがいいし今日はもう上がっていいよ」

最後に好々爺然とした六十代の課長がのんびり告げた。リサとジュンに加え、先輩二人と課長を入れたこの五人

が捜査課の全構成員である。「ありがとうございます。では、これで失礼させて頂きます」

リサは礼を言いつて立ち上がる。(お言葉に甘えさせてもらおうかしら。さつきからなんだか頭が重いような変な感覚がするのよね……)

\*

ガクン、とブレーキがかかり電車が揺れる。リサはその振動で我に返った。「えっ？」

驚いて顔を上げれば、車内の吊革に掴まる自分がいた。(いつの間には私は電車に？ ついさつき帰る支度を私に、それから……)

なぜか記憶が曖昧だ。しかし今はそれよりも重大な事態が出来ていた。リサが身に着けているのは、捜査用のボディスーツ一枚だったのだ。

(なんで私はこんな格好で電車に乗ってるのよ!? まるで痴女じゃない!)

捜査中のように乳首が立っているわけではないものの、ぶつくりと生地に浮かんだ乳輪は形が丸分かりだし、電車の揺れに合わせて踏ん張るリサの両足の間に息づく陰阜の膨らみは、座っている乗客からは丸見えの筈だ。

クールな捜査官は恥ずかしさのあまり両足をギュッと閉じて、ひたすら次の駅に到着するのを待った。

(……一体どういうこと……?)

翌日のこと、リサは捜査課のあるオフィスビルのサーバールームにいた。

「昨日の捜査で一瞬掴んだザラついた感じといい、無意識に電車に乗っていたことといい、私がクラッキングされている可能性が高いわ」

悪意のある何者かにクラックされ、精神に影響を及ぼすプログラムをインストールされているかもしれない。サーバに集積されたリサの行動ログから彼女への違法アクセスの有無を確認する必要があった。ポデイスーツ一枚になった美人捜査官は大きく深呼吸をすると、両目を塞ぐアクセスデバイスのスイッチをオンにする。

「んっ……ふう……」

仮想領域に意識が流れ込む感覚に彼女の乳首がピンと立ち上がる。膨大なデータのうねりに、リサの背筋が椅子の上で切なそうに反らされた。

広大な仮想領域に散らばるデータの奔流を泳ぎ、捜査課のパーティションへたどり着く。自分のIDで捜査課のファイアウォールを通過する。彼女の認識ではこの空間でも捜査課は現実のオフィスと同じ構造になっていた。

「探し物がしやすくて助かるわね。まずは私のログを……」

「待っていたよ。葉月君」

「えっ?」

「課長!? なぜ……ここに?」

混乱と動揺の中でリサは声を絞り出した。責任者である課長が、現場である仮想領域に入ることなどまずまずない。

「リサちゃん、俺達は本当の自分の心を解放しにきたんだよ」

「えっ?」

別の方向から聞こえた声に振り向く。課長に続き唐突に出現した筋肉質の男は、捜査課の四十代の先輩だった。

「葉月さんには僕達の心を解放する手伝いをしてもらいたいんですよ」

「そう言いながら登場したのはロマングレーの先輩である。彼らがこの場に現れることの不自然さに、さしもの敏腕女捜査官も動揺と疑問を隠せない。

「先輩達……一体なぜここに?」

緊張と嫌な予感にリサがじりりと後退した瞬間、課長が仮想肉体の両手で、何もかも空中にタイピングするような仕草をした。直後にリサの仮想肉体が硬直し、彼女の周囲にノイズが走る。

「なっ! これはっ!」

ノイズが消えると、リサの仮想肉体を覆うポデイスーツが姿を消している。代わりに彼女が身にまとっていたのは、普段オフィスで着用している地味なタークスーツだった。

「これだよ! キャリアウーマンスタイルのほうがぐっとくるんだ!」

課長の満足気な言葉と同時に、先輩二人が背後からリサの肩を掴んだ。

「先輩!? ちょっと何を!」

「葉月さん、少しおとなしくしててください!」

彼らは美女を押しさえつけ、立ったまま前方に胸を張るようなポーズをとらせる。リサは咄嗟に抵抗しようとする

が、身体にほとんど力が入らない。(これって私の仮想肉体が制御されている? まさか課長達も!)

緊張に身を硬くするリサのスーツのVゾーンに老人の手がかかる。

「えっ?! 何をっ! 課長っ!」

プチプチと音を立ててスーツのボタンが弾け飛ぶ。リサは背筋を凍らせた。(ちよっと、冗談じゃないわ! 仮想空間で強姦する気なの!)

それなりに狭き門であった捜査官の仕事に就くために、リサは学生時代から勉強一筋に生きてきた。いざ捜査官になれば、訓練と技術の習得に彼女の

二十代前半は消化されてしまった。恋人を作る余裕のなかった彼女には男性経験もない。また、捜査官として仮想領域での性犯罪をイヤというほど見てきた彼女にとってはバーチャルセックスの利用にも抵抗があった。

つまり葉月リサは二十七歳の現在、現実でも仮想領域でも処女だったのである。仮想肉体への行為とはいえ、課長の無体に抵抗するのも当然だった。

「課長っ! 先輩達も、あなた達みんな操られているのよっ!」

「その通り。ただし彼らの望んだ方向へ誘導しているだけだよ」

「なっ! 今度は誰よ!」

唐突に室内に響いた声にリサはぎょつとして室内を見回す。

「あ、僕は君達に行動制御プログラムを仕込んだ犯人だよ。くふっ」

「何っ! あんたが犯人っ!」

登場と共にいきなり自供の言葉を吐いた「声」はリサの反応を楽しむように続けた。

「僕はね、君の内面を暴くためにこのプログラムを開発したんだ」

「現実の行動や感覚にまで影響を与える行動制御プログラム……!」

「くふっ、そうだよ。クールな美人捜査官を常に演じている葉月リサが、本当の姿を見せやすいようにね……」

「私を狙っていたのね! 一体あんたはどここのどいつなのっ!」

だが、それきり「声」は沈黙してしまふ。

「答えるっ! 貴様あつ!」

「葉月君、今は私が君の相手をしているんだよ? 余所見はいけない!」

老齢を迎えた課長は恍惚とした表情でそう言うと、リサのブラウスを一気に引き裂く。ポロ切れと化したブラウスの内より、リサの肉体と同じように清楚な白いブラジャーが露わになる。

「きゃああつ!」

「おお……葉月君の白ブラ!」

興奮に震える老いたレイパーの指が乙女のブラジャーを掴んだ。

「こんな場所で……男達に身体を晒すなんて!」

屈辱に奥歯を噛む乙女だが、抵抗すらできぬままに雪乳を包む下着をむしり取られてしまふ。

「あああつ! 見るなあつ!」

「は、葉月さんのおっぱい!」



「凄えデケえ……！」

圧倒的な弾力をもつてぶるんぶるんと跳ねながら登場した淑女のロケットおっぱいに、背後の先輩達が賞賛の声を漏らす。課長は興奮に震える手で、傲慢なまでの張力で男を挑発するその魅乳に違法アクセスを試みた。

（課長の手が！ 私の乳房を！）

ふにゅん！ ぷりゅんっ！

「あつ、やめろっ！ 触るなっ！」

初めて男の接触を許した乳房は極上の感触を採み手に与えた。ぷりんぷりんと柔らかでありながら高反発なその媚肉を老人は飽くことなく採みしだく。（くそっ！ こんなことで私の身体が男に自由にされるなんて……！）

しっとり汗を滲えた乳根元から、摩擦係数を感じさせないほどにスペースの玉の肌を撫で上げる。やがて先端に色づく乳首へと無遠慮な指が触れた。「ああっ！ きゅふうっ！」

課長のしなびた指先が処女乳首を無造作に摘んだ。それだけでリサの脊椎を冷たい快感が走り抜ける。

「んくう、んはあ……やめ、ろお！ 触るなあ……！」

「可愛らしい声だねえ。葉月君」

「リサちゃん、感じてるね！」

（こんな風にレイプされて快感なんて……まさか感覚までプログラムで制御されているのか!!）

「じゃあ、お次はこつちだ」

老人の言葉と共に派手な音を立ててリサのスカートが破かれた。中に潜

ていたのはいかにも処女らしいデザイアのシンプルな白いパンティだった。が、むっちりとした盛りがった美女の恥丘は実にはしたくない濡れ染みを作って牝の匂いを撒き散らしていた。

「おおっ！ こんなに濡らして！」

「課長！ 早く葉月さんを満足させて差し上げないと！」

「ふざけるなあっ！ 貴様らっ！」

抵抗すらままならない乙女のパンティに手をかけると、調子に乗った老人は濡れた布切れを一気に引き下ろす。（こいつら、私の性を……！ 初めて男に見られて……！）

「おお、リサちゃんのオマンコ！」

「やめろっ！ 見るなあっ！」

「これが葉月君の……！」  
リサの股間では、手入れを全くされないままの陰毛がワサワサと豪快に繁殖していた。さすがの課長もクールな美女がこんなに野生的な恥毛の持ち主だとは思わなかったらしい。老人は興奮に唇を震えさせ、ウニを丸々一匹乗せたようなリサの陰部へと接近した。

「はむっ、うん！ むはもっ！」

課長はリサの陰毛を口に含み、毛間から美女の姫汁と微細な老廃物を掻きとる。老人は処女の清らかなマン毛を穢しながら牝窟へのキスを試みた。

「ああんっ！ くっふ、やんっ！ やめろおっ！ そんな場所をっ！」

初めて味わう粘膜への刺激にリサの腰は弓の如く反り返る。快感すら制御された美女は、老強姦魔の舌攻撃に嬌

声を抑えきれない。溢れた牝蜜が美女の尻を伝ってねっとり流れ落ち、オフィスの床に可憐な染みを作った。（こんな強引な行為で感じているなんて……！ 屈辱を……！）

\*

「課長、そろそろ俺達と交代してくださいよ」

「葉月さんが絶頂して失神したりしては僕達が楽しめないのでからね」

「おお、これは失礼」

男達がリサの頭上で勝手な会話をしている。胡乱な状態で聞いていたリサだったが、いきなり眼前に出現した先輩二人に睨目した。いつの間にか全裸になった彼らはオフィスの灯りの下でペニスを隆々と勃起させていたのだ。

初めて見る臨戦状態の男性器の威容に、クールな女捜査官は口許をわななせるばかりだった。（こいつら、こんな、ペニスを曝け出して……何をする気だ!!）

「僕はね、君の綺麗なお口にチンポをガンガンぶち込みたかったんだよ」  
知的な容姿からは信じ難い下劣な言葉を吐いて、五十代の先輩は美女の眼前で牡竿をぶるんとしならせる。同時に彼がタイピングの仕事をすると、美人捜査官の顎がだらしなく開いた。

「えっ？ んらあっ!!」

急に自分の口がカクンと開いたことに驚く。顎に力が入らない。（またプログラムか!!）

「じゃあ葉月さん、よろしく！」

にゅっぷつと音を立てて美女の緩んだ口唇にペニスが侵入した。（こいつ!! 私のお口になんて物を！）

こんな汚物を……この私がつ！）  
のつべりとした感触の肉茸は激しい熱気と臭気を伴ってリサの口腔に君臨した。屈辱と驚愕の中で才媛は口内を犯すペニスの食感を覚え込まされる。

「うっほ！ 葉月さんの口マンコ気持ちいいっ！」

（口の中が臭いっ！ 私の身体で勝手な真似をして……！）

リサの内心など気にも留めず、日頃の落ち着いた物腰とは及びもつかないだらしない表情を浮かべたロマンスグレーは再び宙に向かってタイプする。「っ!! むちゅっ！ れるっ！」

「おおおっ！ 来たあっ！」

（何だ！ 私の舌が勝手に!!）

持ち主の意思に逆らって才媛の舌は先輩の肉茸に熱烈なローリングフェラを振舞った。リサは既に舌の動きすら制御されているのだ。彼女の舌が回転するたびに中年ペニスから黄緑色に濁った恥垢が剥離する。

「ちゅむぶちゅ！ ぶちゅっば、れろちゅるっ！ んむちゅむうっ！」

クールな顔立ちと対照的な下品な水音を立ててリサの舌は勃勃起に付着した老廃物を回収した。しかし、舌で味わう五十男のチンカスのむせ返るほどのエグ味に乙女は嘔吐す前だった。

（こんな下劣な行為を私にっ！）

「美人捜査官のフェラ！ 最高！」

「んっば、るちゅっ、むちゅう！」  
乙女の舌は中年チンポを愛しさを込めて丁寧に掲ぐ。生ゴミの如き腐臭が口蓋を撫でつつ美女の鼻から抜けていく。その鼻先をくすぐるのは五十男の白髪混じりの陰毛である。乙女はあまりの屈辱に脳が灼ける思いだった。

「葉月さん、ラストスパートだよ！君のクールなお口に出すから！」

(な!! 出すってまさか!)

いかに処女といえども男の最終目的が何かは理解している。しかし自分が初めて体験する射精がこんな状況で行われるとは想像だにしていなかった。

「んっ！ んっ！ れるぶ、ぬっぼ、にゅっ！ べろちゅっ！」

しかし乙女がどんなに抵抗を試みても行動制御の鎖は解けない。逆にロマンズグレーの要求通りの全力フェラチオを提供する始末だった。

「ああっ！ 出る出るっ！」

(な、ペニスが大きく!!)

びゅびゅっ！ びゅるるっ！

「んっむああっ！ あぐぶっ！」

灼熱の欲望がリサの口腔で爆発し、溢れ出した精液は美女の鼻から口から逆流する。初めて感じる汚辱汁にリサは嘔吐寸前だった。

(熱い！ 苦い！ 臭いっ！)

リサの美貌をたっぷりと汚した中年ザーメンは、着衣を破かれ裸同然の彼女の官能ボディの上を流れていった。

(私にこんな真似を……!)

涙と鼻水と唾液と精液にまみれた乙

女は憎悪を込めて自分を汚した男を睨みつける。

\*

「じゃあようやく俺の番だね」

そう言うと、四十代の先輩はマッチョな肉体を誇示するようにギンギンのペニスを一振りして、リサの股間に無造作に宛てがった。

(まさか、こいつは私を……)

ぶちゅっ。

小さく水音がして、リサの性器は初めて異性の性器と接触を遂げた。

「いやあっ！ やめろおっ！」

自分の尊厳を奪い去ろうとする行為に、美女は恐怖の叫びを上げる。

(私の初体験がこんな仕方で……!)

こんな男に純潔がっ!)

くにゅっ、みりい!

「あっつ！ くら……」

精液で汚れたリサの口から苦痛の声が漏れた。仮想肉体に破瓜痛がフィードバックされているのだ。

「ほら、もうカリ首まで……」

「あっ！ いやあっ！ よせえっ！

んふあっ、やめえんっ！」

じゅぷりと音を立ててリサの陰門を先輩の中年チンポが通過する。強制的に処女腔を開通させられるみちみちと響く感覚に乙女は涙する。

(いつものオフィスで、私が、こんな……! 私の処女を……!)

リサの股間から脊髄にかけて冷たい衝撃が襲った、その瞬間。

\*

「先輩っ！」

「っ！ くああっ！ はあっ……うぐっ、板谷君……? うっ！」

急激に意識を現実に復帰させられ、リサは身体を痙攣させる。胡乱な意識でリサが周囲を見回せば、そこはサールームである。隣に立つジュンが、リサから外したらしいアクセスデバイスを手配する表情をしていた。

「現実……戻れたか……」

一時間で戻らない場合は、自分を起こしに来ようにとリサはジュンに言い含めていたのだ。美女は、まず自分の身体を確認する。

(やつぱりこんなに……)

ピンピンにしり立った乳首はいつものことだが、スーツの内側は汗と愛液とでとんでもないことになっている。

動くだけでにちゃにちゃと水音がする陰部にはそれでも違和感はなかった。

とりあえず処女は無事のようにである。

「それであの、サーバへのアクセス記録ですが……」

(あの「声」の正体ってわけね)

ジュンにはリサが仮想領域に潜っている間のアクセス記録の回収も頼んであったのだ。

「捜査課の人間以外にサーバへアクセスしたのは、技術課の飯田テツという人物だけです」

「……誰よそれ」

「そうだね。君達エリートはオフィスで一日中プログラムいじりをしてい

る僕のことなんて意識していないよねくふっ」

汗もひかぬ身体で技術課のオフィスに駆けつけたリサとジュンを迎えたのは、頭髪の薄い四十代後半の男だった。とてもウィルスプログラムで大規模な犯罪をするようには見えない。だが、聞き覚えのある声と独特の語り口調は

「声」と同一人物に間違いなかった。

「……貴様、何が狙いだ」

冴えない中年はリサの肉体をじっくり視察しつつ、ゆっくり口を開く。

「最初に君を見た時は驚いたね。イカつい男達ばかりの捜査課に、ドラマやアニメそのまんまの美人捜査官が配属

ってんだから。くふっ」

卑屈さや狡猾さの混在するテツの視線が、じつとリサに当てられる。

「それに引き換え僕は君とは正反対の、奥に引込んだ脇役だ。けど、だからこそ他人の奥が……心の奥が分かる気がするんだよ。くふっ」

「先輩、もう時間の無駄ですよ！ こんな犯罪者の妄想！」

「ふん、君はどうでもいいよ」

テツの言葉を遮るように前に出たジュンだが、中年男がデスクのキーボードを素早く叩くと同時に動きを停めた。

「えっ?! 板谷君？」

ジュンに呼びかけるが、動かぬ後輩からの応答はない。虚ろな眼には何も映っていないかのようだ。

(これは……行動制御か!)

「これでようやく葉月の内側を確認す

うわわわっ

飛びすぎ  
飛びすぎ!

力が  
湧き出ている…

あのとまで  
同じ

# 思春期な アダム

天海雪乃 原作 かわさき肇

第21話

EVIL EYES



あの子か  
……っ



蛇眼が勝手に  
覚醒した…!?



…完全なる男性を  
…守るための力……



最後の  
リミッターを  
外すしかない…


更ナル融合ヲ要請

——作戦  
……遂行困難



クル……ッ

前号までの  
あらすじ  
エンジユとマキナを倒すためYデバイスを使用し捨て身の  
攻撃を仕掛ける黒猫。そして猛毒に触まれ、朦朧とする睡  
月が夢の中で謎の女性と接触した時、蛇眼が発動して!?



天使も  
アダムも  
排除する!!

シャア  
アアツ!!

フシヤア  
アアアッ!!!

させない

アンタの  
相手は……

ギギ……



ギヤフッ

いっしょに!!

……相互不干渉

130  
!!  
>

……!

私は藤田君を  
助ける  
黒猫を  
任せたい



あまくさしろ  
小説 **天草白**  
NOVEL  
みやしろりゅう たろう  
挿絵 **宮代龍太郎**  
ILLUSTRATION

卑劣な魔の手が桃香の純潔を襲う!!

幻装神姫  
Fairy from the mirror princess  
**アクトアクト**

催眠に穢された聖性

第2話 穢された聖性! 変身ヒロインの処女喪失



「う、うわあああつ!? ば、化け物つ……!」  
「いやあああつ! 殺されるうつ……!」

花舞駅前の繁華街に悲鳴と怒号が交錯していた。部活帰りの学生や帰宅の途についていたサラリーマン、OLが恐怖の表情を浮かべて逃げ惑う。その向こうから悠然と歩いてくるのは、体長三メートルを超える巨大な影だ。

逞しい筋肉に覆われた赤褐色の体軀。その首の上に乗っているのは人間のものではない。尖塔のように突き出した二本の角を備えた、獷猛な牛の顔である。人と獣がおぞましく融合した怪物の姿は、まるでギリシア神話の牛頭人を連想させた。

全身から禍々しさを放つ怪人——ミノタウロスエデンの周囲には黒いタイツスーツと目出し覆面をしたブラックエデンの戦闘員がつき従い、逃げ遅れた人々を襲っていた。

彼らの目的は人々の恐怖や絶望、怒りや憎悪といった『負の心』にある。精神力の具現化装置——FEDドライブを備えた生体兵器である怪人は、人間のマイナス精神エネルギーを吸収して力を増すのだ。「自分が力を得るために、罪もない人々を襲うなんて——許せない!」

凜とした声が響いた。逃げる人々の波をかき分け、一人の少女が彼らの元へ走ってくる。ツースайдアップにした赤い髪が勝気な美貌によく似合う。細身でありながら出るべきところはきつちりと出た女らしい曲線を描く肢体を、花舞学園の制服ブレザーに包んでいた。

怪人を前にして、恐れるどころか闘志をみなぎらせて立ち上がった彼女の名前は——火澄桃香。

悪の組織ブラックエデンに立ち向かう正義のヒロイン、フェアリーフレアだった。

「ふん、現れたな。フェアリーフレア」  
ミノタウロスエデンが振り返った。

「ちようどいい。ドクターに命令されていたんだ。お前を見たら、この言葉を言え、と」

「? 何を言ってる——」  
訝る桃香を見てニヤリと笑う怪人。

### 『夜九時の日食』

「つ……!?!」

ミノタウロスエデンが発した意味不明の言葉に胸の鼓動がドクンと高鳴った。以前にも感じたことがある、目の前が揺れるような感覚——。

「な、何をしたのか知らないけど、私は負けない!」  
桃香はすぐに気を取り直して叫んだ。緑の宝玉が

「FEDドライブ・ペンダントを取り出し、高々と掲げる。精の衣——ブレインングドレス・マテリアライズ!」  
制服が輝く無数の粒子となつて弾け散った。乱舞する光の反射を受けて、乙女の裸身が艶めかしい光沢を放つ。

刹那の後、光の粒子群は変身スーツとなつて物質化し、桃香の全身を覆った。

これがFEDドライブの力だった。意志の力——精神エネルギーを具現化するこの装置を用い、いったん原子レベルまで分解した制服を戦闘スーツに変換しているのだ。

精神エネルギーのバリアをまとうこのスーツの防御力は理論上無限である。あらゆる物理攻撃をシャットアウトし、核兵器の直撃にすら耐えうる。

スーツを破壊できるとすれば、それは彼女の意志を上回る精神エネルギーが込められた攻撃のみ。

だがそんなことは不可能だ。彼女の正義の意志が怪人の邪悪な意志に負けることなどあり得ない。

「……?」  
だが、今日の変身はいつもに比べて妙な違和感がある。

あった。外気が全身に吹きつけて、やけに肌寒く感じるのだ。

訝りつつも、桃香——フェアリーフレアはすぐに目の前の怪人に意識を移した。

「覚悟しなさい、ミノタウロスエデン! このフェアリーフレアが来たからには、あなたの死は絶対よ!」  
「ぐへへ、正義のヒロインのくせにエロい格好しやがって。おっぱいもオマンコもポロリと見えそうじやねえか」

牛頭の怪人が舌なめずりをした。やに下がった目で、フレアの全身に淫靡な視線を這わせる。

「……!?! こ、これはあなたたちと戦うための聖なる衣装よ! 汚らしい目で見ないで、化け物!」

フレアは怒りの視線を怪人に叩きつけた。  
FEDドライブによつて正義の心が具現化した戦闘スーツは、彼女にとつて誇りそのもの。白は純粋な正義感を、赤は悪に対する怒りを、金は何物にも挫けない意志を、それぞれ象徴している。

そんな変身スーツを淫らな視線に晒されるのは耐え難い屈辱だ。だが、欲情の視線を送ってくるのは怪人だけではなかった。

「すげえ、おっぱいがこぼれそうだぜ。乳輪が見えそうだし、乳首もあんなに浮き出て……!」  
「それに股間のところ……ほとんど紐パンド。筋の形にびったり張りついてエロすぎだろ……!」

ギャラリーの大半がフレアの全身に粘ついた欲情の視線を送ってきていた。誰もが生唾を飲みこみ、前かがみになつて腰をモゾモゾとさせている。  
(皆、どうして私をじろじろ見るの……?)

——フェアリーフレアは気づいていなかった。

怪人の発したキーワードで、先日受けた催眠が発動し、変身スーツがいつもとは違うデザインで具現化していることを。

本来ならレオタード状のボディスーツが、今回は  
ピキニを思わせる形状になっており、しかも肌を隠  
す布地が極端に少ない。

乙女らしからぬ豊かな双丘は、乳首こそ隠れてい  
るものの魅惑の膨らみの大部分は露出して、パ  
ストの形が丸わかりだ。

ショーツ部分も股間を隠す小さなクロッチ以外は  
ほぼ紐である。布地が股間にびっちり食いこんでい  
るせいで、二枚のラヴィアの盛り上がりより強調  
されていた。ほんのわずかでも布が左右にずれれば、  
臍孔まで丸見えになってしまいそう。

また布地そのものも普段よりはるかに薄く、魅惑  
的な乳首の突起や淫靡な肉裂の形を余すところなく  
浮き上がらせていた。

「何をよそ見してやがるっ」

怪人が前傾姿勢を取り、二本の角を突き出して突  
進してきた。直撃すれば、おそらくはコンクリート  
すらも易々と貫く刺突攻撃。

だが、そんなものを黙って食らうフェアリーフレ  
アではない。ドリルのように回転する二本の角を舞  
うようなステップで華麗に避けてみせた。

「んっ!! ひああ、うんっ……!!」

ステップを踏んだ瞬間、クロッチ部が秘唇に強烈  
に食いこんだ。布地が一枚のラヴィアを割り開き、  
クレヴァスがジンと痺れるくらいに圧迫される。

同時に、激しい動きで胸の双丘がダイナミックに  
揺れ弾んだ。極小の布地はかろうじて乳首の露出こ  
そ避けたものの、激しく擦れて胸の尖りをツンとし  
こらせてしまう。

「くは、ああ……ひやあ……んっ……」

体勢が崩れそうになるが、身体に染みついた戦闘  
技術でボディバランスを立て直した。

「くっくっく、もうちよつとで大事な部分が丸見え

になったのによお。惜しいところだったぜ」

攻撃を避けられた怪人はにやついた表情でフレア  
の胸元や股間をじろじろと見ている。

「け、汚らわしい目で……見ないでっ」

フレアは股間を襲う刺激に小さく息をつきながら  
も攻撃に転じた。怪人に向かって突進する。

だが甘痒い刺激のせいで身体がやけにふらつく。  
上手く攻撃態勢に移ることができない。普段とは比  
べ物にならない、体重が乗らないパンチとキックを、  
怪人は易々と避けた。

「ふう、あむ、う……ん……っ」

攻撃が空を切るたびにクロッチが股間に食いこみ  
微電流に似た痺れが走る。薄い布地と胸の先端が擦  
れ、甘美な刺激が生じて乙女の身体を揺さぶった。

（もうっ、どうなってるのよ!! 胸とアソコが……  
ジンジンする……うっ……!!）

秘所がムズムズするような淡い愉悅も相まって、  
乙女の胸丘は先端の蕾を硬くしらせていた。戦い  
の最中に性悦の反応をしようなど、正義のヒロ  
インにあるまじきことだ。

「くくく、お前のエロい姿をいつまでも見ていたい  
ところだが、そろそろ決着をつけさせてもらうぞ」

突然方向転換した怪人が人々に突進する。

「人間を守って俺の角に貫かれるか、見殺しにする  
か。好きなほうを選べ! はははははは!」

ミノタウロスエデンが上げた哄笑は、しかし、  
「悪いけど……ふうっ、ど、どちらもお断りよ」

性悦を振り切り、素早い動きで人々の前に立ち  
上がったフェアリーフレアによって遮られる。コン  
クリート壁をも貫き砕く必殺の突進は、彼女の右手  
からあふれた光によって受け止められた。

輝きが凝縮し、幾何学的なデザインをした銀色の  
剣となって具現化する。  
フェアリーフレアの正義の意志を具現化させた聖

剣ブレイジングソード。その意志の強さを示すよう  
に、聖剣の刃は決して折れない。砕けない。

「私を倒すために無関係な人々まで巻きこむあなた  
たちブラックエデンを——絶対に許さない!」

刀身がまばゆい光を放つ。剣と角の鏝迫り合い状  
態から、フレアが一気に押しこんだ。バランスを崩  
して倒れる怪人。

「なんだと、さらにパワーが上がっていく……!!」

「終わりよ、ギガフレイムザンバー!」

振り下ろした必殺の一撃が、ミノタウロスエデン  
の巨体を両断した。X字に聖剣を振って、いつもの  
ように刀身にこびりついた血糊を払う。

「……!!」

ふと視線を感じて、フレアは振り返った。人々は  
町を救ってもらった感謝と、淫靡なコスチュームへ  
の発情と——その二つを等分に含んだ視線をフレア  
の全身に浴びせている。

自分の何かが、変わり始めている。  
不気味な予感が彼女の胸をざわめかせた。

翌日の放課後、桃香は帰宅路を一人歩いていた。  
人気がない路地に差し掛かったところで、前方から  
巨大な影が現れる。

「あなたは……!!」

表情をわずかにこわばらせ、足を止めた。  
進み出てきたのは醜い豚の顔にでっぴりと太った  
身体をした異形だ。身長は二メートルほどで、怪人  
としては小さな部類に入る。

「俺様はオークエデン。今からお前に絶望を味わわ  
せてやるぞ、ぐひひ」

「昨日の今日でまた怪人が現れるなんてね。だけど  
少し無謀じゃない? 戦闘員も引き連れずに、たっ  
た一人で現れるとはいいい度胸よ」

桃香は不敵に告げながらも、油断なく身構えた。

恐怖や絶望をエネルギー源とする怪人は、人の多い繁華街や学校などに現れることがほとんどだ。わざわざこんな人気のない場所に現れたということは、彼女に一对一の勝負を挑むつもりだ。だとすれば、よほど自分の力に自信があるのだろうか。

『エベレストで海水浴』

オークエデンがにやけた笑みを浮かべて、意味不明の言葉告げた。次の瞬間、豚怪人の姿がまるで蜃気楼のように揺らぎ、霞んでいく。

「なっ……!!? これは……」  
気がつくのと、そこには悠斗が立っていた。

「どうかしたの、桃香ちゃん？」  
幼なじみの少年が不思議そうに首をかしげる。

「だって、さっき怪人が……」  
「怪人？ 夢でも見てたんじゃない？」

悠斗はにっこりと微笑む。頭の芯がぼうつと痺れだした。目の前が揺れる。意識が薄らぐ。

「今日は僕とデートするって約束だったじゃないか。一人で先に行っちゃったから、追いつくのには苦労したよ。桃香ちゃん、足速いから」

悠斗が爽やかに笑った。そうだ、と思い出す。今日の放課後は悠斗からデートをする約束をしていたのだ。なぜ忘れていたのだろうか。

近くの雑木林を散歩したり、公園を二人で歩いたりと穏やかな性格の悠斗らしいデートコースだった。人気のない場所で過ごす静かな時間が、戦いの連続で疲れていた桃香に癒しと喜びを与えてくれた。

そんな楽しい時間はまたたく間に過ぎ、気がつけば日が暮れていた。

「今日は本当にありがとう、悠斗。楽しかった」  
夕暮れどきの静かな公園に二人つきりであらずみ、

気持ちが高揚してくる。心臓の鼓動が自然と高まり、胸の芯が甘く疼いた。

「僕のほうこそ楽しかった。なんだか桃香ちゃんと恋人同士のデートをしたみたい気分」

「……そ、そうだね」

恋人同士などという単語をさらりと口に出来る、桃香は頬が熱くなるのを感じた。あらためて幼なじみのことを意識する。

すぐ間近に悠斗の柔和な顔があった。かすかに荒くなった息遣いが吹きかかる。優しい瞳が桃香をまっすぐに見つめている。

「そ、そういえば、どうして急にデートに誘ってくれたの？」  
ドギマギしながら桃香がたずねた。

「桃香ちゃん、最近元気がなかったから」  
「えっ、そんなことないよ……」

言いつつも、桃香の顔はわずかにこわばっていた。先日の戦い以来、幾度となく訪れるフラッシュバック——ドクターゴルバや戦闘員に性的な奉仕をしている光景——が彼女を悩ませていたのだ。

悪夢としか思えないその光景は、妙なりアリティを持っていた。  
（もしかしら私——知らないうちにあんないやらしいことを経験していたのかな？）  
そんな不安が込み上げてくる。憎むべきブラックエデンの科学者や戦闘員に自ら跪き、フェラチオや手コキをするなどあり得ない。あつてはならないはずなのに——嫌な疑念はいつまでも晴れない。

「でも、ありがとう。誘ってくれて」  
「少しでも桃香ちゃんの気晴らしになればいいな、って思ってた」

幼なじみの少年が微笑む。優しい笑顔を見ているだけで胸がキュンと締めつけられた。

「よかったら、これからも今日みたいに付き合ってください」

「よかったら、これからも今日みたいに付き合ってください」

ほしいな……今度は正式に恋人として」

恋人として——その言葉に桃香の思考が停止する。同時に悠斗の顔が近づいてきた。ドキッとしながらも桃香は避けなかった。

「んっ……ちゅ、う」

乙女の唇に悠斗の唇が重なった。思ったよりもゴツゴツとして硬い感じの唇だ。

（……何、この感じは？）

不意に、胸騒ぎがした。大好きな少年とのファーストキスのはずなのに——なぜか、かけがえのない大切なものを失ってしまったような不安感があった。

「ちゅ……れる、お……むふ、あふうん……」  
悠斗の唇の感触は相変わらず硬く、口内に侵入してきた舌はヌメヌメとしてどこか不気味だった。

いや、こんなことを感じてはいけない。一生一度の、記念すべきファーストキスなのだ。

だが、違和感が消えない。初めての口づけはきつと甘くて蕩けるような味がするのだと思っていたのに——

「どう、桃香ちゃん。僕の恋人になってくれる？」  
長いキスを終えると、悠斗が甘く囁いた。

桃香は先ほどまでの違和感を懸命に振り払った。心臓が破れそうなほど鼓動を速めた。初心な少女の意識はたちまち蕩けた。四肢から力が抜け、熱い息が唇からもれた。

「私でよければ……よ、喜んで」  
喜びを囁みしめながら、桃香は幸せな気持ちで声を震わせた。

悠斗は両親が県外で働いているため、アパートで一人暮らしをしている。彼の部屋に案内されると、緊張感が一気に増大した。

ブラックエデンの怪人と戦うときよりも、はるかに緊張している。無敵を誇る正義のヒロインも、恋

に緊張している。無敵を誇る正義のヒロインも、恋

原作 **まくらカバースoft**  
さか い ひとし きりしま  
小説 **酒井仁** 挿絵 **桐島サトシ**  
NOVEL ILLUSTRATION

新たな読者参加企画が始動！  
選択肢で女武将のピンチを救おう！

# 魔剣士 リネ

乙女穢されし戦場

プロローグ 大陸を覆う暗雲

今より約四〇〇年もの昔——世界の東に位置する大陸は諸侯、多民族が入り乱れる地であった。

街は焼かれ民は飢え、戦乱と度重なる飢饉が人々の心を荒廃させた。

しかし救世主が現れる。

彼は強いカリスマと高い指導力の下、たちまちにして大陸を平定し、大帝國を築き上げた。

その国——「ハイランド王国」を統べる英雄は「聖王」を名乗り、以後数百年にわたる太平の世が続いた。

だが、人は常に欲にまみれ、権力を欲し、私腹を肥やそうとするものである。ならばなぜ「聖王」はハイランド王国を長きにわたって統治し続けることができたのか。

聖王は、王国を治める資格を有するのは、「聖王の四親等までの男系の男子のみ」というルールを定めたのだ。

継承の資格がある者には、特殊な魔法によって、その身体に「聖王家の紋章」が現れるようになっていた。

その代わり、聖王の資格を継ぎし者は国のことを第一義と考え、独裁によって圧政を敷くことは厳に戒められた。

歴代の聖王はその掟に従って身を慎み、家臣の声に耳を傾けてきたのだった。それは厳格なる掟あればこそ。

そして聖王に仕えし三つの同盟国の存在も大きかった。聖王の剣となりし騎士の国ストームランス公國。聖王家の智慧袋となる魔導師の治める国、ヘステリア公國。

最後に祭事を取り仕切ってきた神官たちが支配する国、アウラ神國である。この三つの国は聖王を支え、平和を守る礎となってきた。

三つの同盟国そして「聖王家の紋章」というルールあればこそ、ハイランド王国は三〇〇年以上もの平和を保ち続けてきたのだった。

その太平の世に乱れが生じたのは、十八年前。第三十二代聖王マクシミリアンの代のことであった。

歴代の聖王たちが世継ぎとなる男子を残すことができず、聖王の後継者が完全にいなくなってしまうのだ。

げに浅ましきは人の欲望。聖王の血筋を失った治世が乱れるまでに、二〇年とかからなかった。

多くの諸侯が「我こそは聖王にふさわしい」と主張し、領主や貴族は人々に重税を課し、権勢と私腹を肥やすことに腐心し始めたのだった。

王国の乱れを見た異民族がそれを看過するはずもなく——各地では再び戦乱の火種が起きては鎮圧され、多くの血が流された。

この物語は、そんな戦乱の時代から始まる。

「またひどくやられたものだ……」

ここはハイランドの北方に位置するガナッシュの街。

北方の異民族「ヒツピア人」が国境付近の町ガナッシュに侵襲したとの一

報を受け、一軍を率いてガナッシュ奪還に進軍してきたのが、ハイランドの若き將軍アレスであった。

「アレス、斥候が帰還した。やつらもう抗戦の意志はなさそうだ」

そう報告するのは幼馴染みでもあるハイランドの騎士エルヴィン。一見氣障な優男に見えるが、常に前線で剣を振るうアレスの頼もしい片腕である。

エルヴィンは柔らかい巻き毛を指でひねると首を傾げる。

「にしても妙だね、報告では敵はもつと大軍だと聞いていたんだが、まったく拍子抜けもいいところだ」

「まあ、それはエルヴィンさまとアレスお兄さまが勇猛だったからに決まっていますわ」

と、これは僧侶服に身を包み、薄茶色の髪を肩まで垂らした、まだあどけなさの残る少女。

アレスの実妹でもある少女ミュリエルは、こう見えて回復魔法を使いこなす優秀な僧侶。

少女に褒められてエルヴィンは得意げだが、アレスは報告と実際の敵戦力の齟齬に疑問を抱いた。

「敵戦力が多いというよりは、こちらの抵抗が少なかった……？ よもやヒツピアの異とも思えんが」

アレスは数名の兵とエルヴィンを連れ、街中を視察することにした。

ヒツピアは騎馬を駆使して電撃的な攻撃を仕掛けてくると聞くが、アレスたちが相手をする限りは数も少なく、

それに比して街の被害は甚大だった。街のあちこちではまだ完全に火の手が消えていない。

「やはり変だ、エルヴィン。街の正門を見ろ、これはヒツピアの襲撃で破壊したもののじゃない」

「ど、どういうこと？」

本来、敵の侵入を防ぐはずの正門は門作りもガタガタで、とても騎馬隊を防げる代物ではない。

「もうずっと以前からこんな状態ですよ。街が全滅しなかっただけでも奇跡つてもんだ」

吐き捨てるように言ったのは、正門にもたれかかっていた市民兵と思しき男。包帯を巻き、右腕を吊った痛々しい姿に、アレスは違和感を覚えた。

「キミは、市民兵なのか。街の警護の要とも言うべき兵士が、どうしてそんな槍を」

がしゃりと彼が地面に投げ出したのは、細い木の先に小さな矢じりが付けられただけの、粗末きわまる武器。

「俺たちに回されるのはこんな武器だけなんですよ。農具や鉈で家族を守って死んだやつだつていて」

「馬鹿な……正門を修繕する予算も下りていなかったというのか」

そこにミュリエルが駆けつけ、兵士に回復魔法をかけ始める。心優しき少女は目尻に浮かぶ涙を拭こうともせず、一心に兵士の治療を続ける。

「あんたたちが街を救ってくれたことには感謝する。だが、ヒツピアの連中

が攻めてきたとき、真つ先に逃げ出したのは領主や貴族だったんだ！」

「……………」

「あいつら、街の若い娘だけを連れていきやがった。お、俺の娘も……………」

「お、おいよせ！」

若き軍師の拳が怒りに打ち震えるのを見て、近くにいた兵の一人が包帯の兵士を慌てて止める。

所詮本国付きの騎士と市民兵では身分が違いすぎる。だが負傷兵の怒りは収まりはしない。

「ろくな装備もない、兵士の数も足りていない、あとに残されたのは老人と病人と子どもだけだ……………」そこにやつらが、ヒツピアの連中が……………」

「——エルヴィン」

我ながら、こんな低く冷たい声が出るのかと、アレスは思う。

「ただちに警備兵の実情と改善案、人員と予算の計上を。この街の領主に対する更迭命令をグスタフ王に進言。ガナツシュに降りるはずだった防衛予算をどこの誰が横流ししたのか、徹底的に追及してやる」

「ア、アレス……………」さ、早急に調査をさせよう。だから落ち着いてくれ」

常日頃、滅多に激昂しないアレスが誰よりも騎士道を重んじる性格だということ、エルヴィンは知っていた。市民兵の言動をいっさい責めることなく、アレスは未だ黒煙の上がる空を、いつまでも眺みつけるのだった。

本国に帰還したアレスは、エルヴィンのまとめた資料を携え、さつそくグスタフ王に謁見を申し出た。

彼は聖王家の外戚だが、「聖王」の継承者ではない。だが、現在のハイランド王国を实権を握っているのは彼だ。

ハイランド王国の騎士であるアレスにとつては、仕えるべき君主であることに間違いない。

「おおアレス、お手柄だったようだが。さすが名将ガイウスの忘れ形見よの」

「有り難き幸せ。ですが、ガナツシュの受けた被害も決して少なくは」  
だがグスタフ王はひたすらにアレスの軍略と采配を褒めちぎり、今宵の晩さん会にぜひ出席するように言った。

「陛下、どうか今一度国防の抜本的見直しを」

「うむむ、じゃが今宵はお前を労うための晩さん会。明日よりまたハイランドのために尽くしてくれい」

こうなつては王に聞く耳はない。グスタフは野心家ではあるが、自分に都合のいい言葉を好む傾向にある。

「では晩さん会を楽しみにしておろぞ、アレス」

上機嫌の王に深々と一礼すると、アレスはその場を退出した。

その夜——アレスはドレスアップしたミュリエルをエスコートして晩さん会に出席した。テーブルには山海の珍味が並び、貴族たちは浴びるように高級酒を呷っている。

（ガナツシュの惨状とは雲泥の差ではないか）

だが、蛮族を駆逐した英雄が苦い顔をしているわけにもいかない。

挨拶回りをしていると、王の片腕とも噂されるヘルマン軍務卿がここにこゝと愛想のいい顔で近づいてきた。

「これはヘルマン卿——報告書は読んでいただきましたか」

「さすがは騎士アレスどの、と言いたるところだが少々頂けませんな。あれではまるで田舎町に押し降るべき予算が横流しされているような記述」

「い、いえ、しかし兵たちはろくな武器も支給されず、街の守りも手薄なままで放置され」

唇に薄笑いをはりつかせたまま、ヘルマンは酷薄そうな目をアレスに向けてる。王に取り入ることに腐心するこの老人が、アレスは好きではなかった。

「たかがちつぽけな街のことで、大げさに過ぎるのでは？ 所詮は取るに足らぬ庶民の命に過ぎぬでしょう」

ヘルマンの言葉に、アレスは息を飲む。軍務卿は爬虫類の目つきで言葉を畳みかけてくる。

「噂ではガナツシュ領主は街の若い娘を率先して避難させるといふ『英断』に及んだとか。報告書とはずいぶん話が違ふようだ」

英断——？

守るべき民を見捨て、若い娘を拉致した拳句に尻に帆かけて逃げ出した卑劣な行為を「英断」だというのか。

エルヴィンの報告によれば、ガナツ

シュの領主はずいぶん私腹を肥やしていたようだ。これは立派な横領行為ではないか。

「名将ガイウスどのの御子息とも思えぬお粗末な顔末ですな。たかだか北方の蛮族相手に三〇〇〇の兵を率いて勝利した程度で得意げになるとは、些か呆れ果てましたな」

怒りのあまり、グラスを持つ手の先が冷たくなるのを感じた。この男は、報告書を握りつぶすつもりだ。

（どこまで——どこまで腐り果てているのだこやつらは。守るべきは民守るべきは国だというのに！）

だが、アレスはハイランド王国に、グスタフ王に仕える騎士。

剣の腕や軍略には覚えがあつても、政に関してはまだ若輩者。老練なヘルマンとまともに渡りあう自信はない。

「出すぎた真似をして申し訳ありません、ヘルマン卿。無辜の民を守るのは兵士の役目、彼らにどうかその役目を果たさせてやってください」

「ふん——騎士たるもの民の盾たれ……………」ご立派な心掛けですな。くくく」

屈辱を堪えてアレスはヘルマンに頭を下げる。今ここで一時の感情に流されてしまつては、彼ら兵士は冷遇されただけだ。

（俺は彼らを、民を守らねばならない）  
だが、このときのアレスはヘルマンの感情を見誤っていた。

青年の高潔さが、老人の羨望と悪意

を引き寄せていたのだということに。

「うう……いやあ……もう、もうやめてください……」

薄暗い室内で、複数の人間の影が蠢いている。一人は肥満した男、あとの人影はみな若い女のようなのだ。

「なにをしている、杯が濁っているぞ。早く注がぬか」

肥満男が女の肩をぐいと抱き寄せ、乱暴に杯を突き出す。女は涙ぐみながらも酒瓶の酒を男の杯に注ぐ。

女たちの着せられている衣服は決して上等とは言えず、その扱ひもまるで奴隷も同然だった。

「ふつ、お前たち今さらあのみすばらしい街に戻りたいというのか」

分厚い手が女の乳房を掴み上げ、荒々しく揉み上げる。女は痛みと屈辱に顔をゆがめ、美しい顔をいつそう涙で濡らすのだ。

「お、お願いします。ガナツシュには私の父がまた……」

「ふん、どうせ今ごろは街ごと蛮族に滅ぼされているだろうよ」

残酷な男の言葉に、女たちは泣き崩れる。彼女たちはガナツシュの住人。

異民族の襲撃をいち早く知った街の領主は私兵に命じ、私財の全てと街で評判の美少女たちを攫わせ、自分だけいち早く逃走したのだ。

「ええい、いつまで泣いておるのだ鬱陶しい！ そらお前、街より救い出した恩をわしに返すのが、お前たちの崇

高な義務だろうが……！」

「ひや……ん、んううう……」

ガナツシュの街の元領主は少女の手を掴むや、その美しい顔を自らの股間に近づけようとする。そこには醜い牡の証が隆々と天を仰いでいた。

蠟石のように白い頬に不潔な肉棒を擦りつけられ、少女は嗚咽する。その哀れな姿に男は興奮したのか、かくかく腰を振り立て、少女の美貌を汚す。

ここはハイランド王城の一室——ガナツシュを逃げのびてきた元領主は、かどわかしてきた少女たちと共に、酒池肉林の日々を過ごしていた。

（こりや、ひどいもんだ……）  
この醜悪な室内を、密かに覗き見ている目があった。

若き將軍アレスの頼もしい片腕、エルヴィンだ。彼は表立って動きにくいアレスに代わり、時にこうして隠密的な活動をするのがあったのだ。

（あの野郎をぶちのめすのは簡単なんだけど、娘さんたちをどうするかだな。ここは静観するしか……ちえつ）

ぎりつ、とエルヴィンは歯がみをする。目の前で罪もない少女たちが恥辱を受けているというのに、どうすることもできない。

（やつは子爵、あんな贅沢できる身分じゃあなかったよな。やつぱり街の防衛費をちよるまかしたか？）

既にガナツシュの惨状や国防費の消失については、軍務卿のヘルマンに報告は上がっているはずなのだが。

「むっひひひ、舌遣いはまだまだだが、下の口はそうでもあるまい。わしのデカマラで可愛がってやろう」

「ひっ？ ど、どうかお許しを」

だが元領主が聞く耳など持つはずもなく。娘の粗末なドレスの裾を思い切り引つ張ると「びりびりいっ」とドレスの裾が大きく裂ける。

むき出しになった白くむっちりした太ももに、男の視線が集中する。街娘の股を大きく広げると、卑劣な領主はそこに腰を割り込ませていった。

「そうら、入っていくぞ」  
めりめりめりつと音がしそうな錯覚さえするかのようになり、少女はびくつと下肢をつっぱらせて領主の肉茎を涙ながらに受け入れていく。

「う、うう……ひどい……」

「なにがひどいものか。あの街にいれば蛮族にみな殺されていたのだぞ。命承らえただけでも幸運と思え」

そも街が壊滅しかけたのは自分の失策だということを棚に上げ、元領主は浅ましく腰を振り立てて娘の中をさんざんに突きまくる。

（可愛いお嬢さんになってことを！ けど今の僕にはどうすることも……）

エルヴィンの任務はあくまでも元領主の動向をさぐることに。そしてできれば言い逃れのできぬ確実な証拠を掴むこと。

（けどアレス、先が……先が見えないよ。この国の、未来が……）

己の醜行の一部始終を覗かれている

とも知らず、肥満子爵はいっそう興奮したようだった。

豚のような顔を真っ赤にして杯の酒をぐびぐび飲み干すと、残りの少女たちにギラリとケダモノのような目を向けて怒鳴りつける。

「貴様らもなにをばさつとしておるか。それ、股ぐらを開かぬか。いつ城からほり出しでも構わないのだぞ」

子爵の言葉に一人また一人と娘たちは立ち上がって下着を脱ぐ。

そうして頬を赤らめつつ、スカートの裾を両手で持ち上げると、領主は傍らの娘の股間にやおら顔を突っ込んでふごふごと鼻を鳴らす。

その様は薄汚い獣そのもの。

「ひっ……」  
びちゃや、びちゃ……淫らな音に少女は膝を震わせ、恥辱にひたすら耐える。男はそれだけでは飽き足らず、もう一人の娘の股間に手を潜らせる。

「い、いたいっ」

「れろ……ふむ、もしやお前は生娘かでは後でじっくり、我が高貴なるマラで味わってくれよう」  
（娘さん方、もう少し辛抱してくれ）

と——ノックの音と共に、おぞましい陵辱部屋に一人の老人が入室してきた。

（ヘルマン卿……だと？）  
「こ、これはヘルマンどの。こらなにをしているか貴様たち、軍務卿にも酌をせぬか」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**